

もし、一日前に戻れたら…

私たち（被災者）からみなさんに伝えたいこと

『いち にち まえ一日前プロジェクト』エピソード集

平成22年3月



内閣府
(防災担当)

はじめに

「災害列島」とも呼ばれる我が国では、過去に幾度となく大きな災害に見舞われ、多くのかけがえのない命や貴重な財産が失われています。

これらの被災経験を踏まえ、現在、国・地方公共団体、市民、企業、地域コミュニティそれぞれが工夫を凝らし、平時から災害に備えることによって災害被害を軽減しようとする「災害被害を軽減する国民運動」が展開されているところです。

「一日前プロジェクト」は、この国民運動の一環として平成18年度にスタートしました。それ以来、全国各地の被災者や災害対応に携わった方々に、その時どのように行動し、どのような思いを抱いたか等を話してもらい、読む人に、日ごろから災害に備えておくことの大切さに気づいてもらえるような物語(教訓)を生み出すことに力を注いできました。

本エピソード集は、平成18年度から平成21年度に作成された約450の物語の中から109のエピソードを掲載しています。中には必ずしも正しい行動とは言えないものもありますが、失敗談も含めて、地域や職場、学校等で防災について考える際の一つの材料として活用していただければ幸いです。

なお、これまでに作成された物語は全て、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」に掲載しています。物語やイラストは、非営利の目的であれば自由に使うことができますので、広報誌やパンフレットなどにも是非利用してください。

今後、皆さんがお住まいの各地域においても「一日前プロジェクト」が実施され、地域の防災力の向上につながることを期待しています。

内閣府（防災担当）

災害被害を軽減する国民運動のホームページ：<http://www.bousai.go.jp/km/>

「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	
18	1	地震・津波	地震のショックで思考停止 ～声出す人がリーダーシップ～	中部	地域・ご近所	平成16年(2004年)新潟県中越地震 (平成16年10月)	
	2		朝食を一緒に配りませんか? ～被災者も立派な働き手～				
	3		大工の私が一番後悔 ～家具の転倒防止を勧めておけば・・・～		企業・職場		
	4		高い食器を二度割った	九州	家庭		福岡県西方沖を震源とする地震 (平成17年3月)
	5		つくりつけの家具で救われる ～倒れるかと思った高層マンション～				
	6		最初はみんな「お殿様かお姫様」の避難所		地域・ご近所		
	7		地震後に「店開けてくれ」と70軒 ～デパートの客追い出しで人あふれ～				
	8		デマ防止に、消防車や校内放送でラジオ流す				
	9		役だった「災害時要援護者台帳」 ～「民生委員さんが来たよ!」との声に役割を実感～	学校			
	10		避難所のリーダーさんは中学生 ～校庭キャンプの経験生かす～				
	11	風水害	入っておけば良かった損害保険	中部	家庭	平成16年7月新潟・福島豪雨 (平成16年7月)	
	12		早かったですよ、水がきてからは ～たった一時間で自宅が水没～				
	13		お母さん、足がグニョっとする ～水が量を押し上げた～				
	14		冷蔵庫も洗濯機も浮いていた				
	15		非常持出袋より避難が優先				
	16		100万本のタオル届いて目を回す				
	17		「水飲み」「休め」のサンドイッチマン ～「熱中症注意!」とねり歩く～				
	18		こんなにも多かった地域のお年寄り				
	19		レポーターはタクシードライバー ～コミュニティFMが大活躍～				
	20	災害共通	ふだんからの声かけが災害時に生きる	中部	地域・ご近所	平成16年7月新潟・福島豪雨 (平成16年7月)	
	21		要援護者の枕元に手作りタンカ				
	22		働き盛りの男性を地域デビューさせるには?	九州	地域・ご近所	福岡県西方沖を震源とする地震 (平成17年3月)	
19	23	地震・津波	おばあさんを背負って山の中腹へ ～津波を見に行つて、危機一髪～	四国	家庭	南海地震 (昭和21年12月)	
	24		早く逃げれば良かった				
	25		やっぱりみんな倒れてしまった ～物が散乱して前に進めず～	東北	家庭	宮城県北部を震源とする地震 (平成15年7月)	
	26		水が使えず、お皿にラップ				
	27		油断大敵! ～屋根うらのボルトのゆるみも確認を～				
	28		家具は倒れず ～役立った転倒防止グッズ～				
	29		全戸に配った手作りの「井戸マップ」				地域・ご近所
	30		中学生の「防災学」				学校

「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害
19	31	地震・津波	役場の職員にもケアが必要	東北	行政	宮城県北部を震源とする地震 (平成15年7月)
	32		スリッパではあぶない家の中 ～部屋の中は、どこもワレモノだらけに～	中部	家庭	平成19年(2007年)能登半島地震 (平成19年3月)
	33		食料や物資はふだんから備蓄してないと	中部	家庭	平成19年新潟県中越沖地震 (平成19年7月)
	34		そんなところで寝ていちゃ、ダメ ～家具の配置に要注意～			
	35		おとなりの井戸水もらえて大助かり ～トイレの「ジャー」は、バケツ3杯分～		地域・ご近所	
	36		地震の反省を生かし工夫	企業・職場		
	37	風水害	人に頼る避難より自主避難を!	四国	地域・ご近所	平成16年台風第23号 (平成16年10月)
	38		「いままで大丈夫だったから」は危ない			
	39		地元の人間の話をよく聞いて!			
	40		避難の準備をする間、ジャーのごはんをおにぎりに	近畿	家庭	
	41	2階のトイレから水が噴き出す ～洪水時の外出は危険～	関東	家庭	平成17年台風第14号 (平成17年9月)	
	42	駅前はいつもと同じ、川の氾濫想像でできず ～局地的豪雨の恐ろしさを感じた～		地域・ご近所		
	43	お嫁に来てから初めての体験 ～ご近所の方の連絡で気づく～				
	44	火山	足りなかった心構え ～自宅から火砕流見物～	九州	家庭	雲仙岳噴火 (平成2年11月～ 平成8年6月)
	45		話し合っておくべきだった避難先		企業・職場	
	46		必要だった火山の知識 ～噴火後からでも学習を～			
	47	災害共通	自主防災会にはお年寄りや子どもも参加	東北	地域・ご近所	宮城県北部を震源とする地震 (平成15年7月)
	48		帰宅訓練のおかげで足に自信	関東	家庭	平成17年台風第14号 (平成17年9月)
	49		薬持ち出せず、避難所で大弱り ～自分の薬は肌身はなさず～	中部	家庭	平成19年(2007年)能登半島地震 (平成19年3月)
20	50	地震・津波	再現映像で震災の光景一気に思い出す	近畿	家庭	阪神・淡路大震災 (平成7年1月)
	51		2階で寝ていて助かった ～逃げ出す時に切った足、入浴時に気づく～			
	52		まず老人会の会長さんをひっぱり出し ～地域の役割のある人から声かけ～			
	53		知らなかった土壁の壊し方			
	54		知っていれば良かった救急救命法		行政	
	55		ご近所で「あげます」「いります」 ～玄関前にボードで貼りだし～			
	56		出勤か、救助か、悩む ～誰かがジャッキ、12人助ける～			
	57		パジャマに作業着で部下出勤 ～思わず注意し、被災度の違い知る～			
	58	風水害	のんびり聞こえた「避難勧告」 ～緊迫感なかった防災無線～	近畿	家庭	平成16年台風第23号 (平成16年10月)
	59		急きょ地元で避難所開設 ～訓練どおりに事は運ばず～		地域・ご近所	
	60		製品はすべて産業廃棄物 ～10トン車で6回捨てて作業再開～		企業・職場	

「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害
20	61	風水害	水没のコンバインまで保険でカバー	近畿	企業・職場	平成16年台風第23号 (平成16年10月)
	62		しなかった台風前の畳上げ ～ポンプ場でき、備えおこたる～	九州	家庭	平成17年台風第14号 (平成17年9月)
	63		避難所のテレビで発見、泥水に浸かるわが家			
	64		おとなりさんがいない! ～腰まで浸かっておとしよりの救出～		地域・ご近所	
	65		命綱つけて濁流の中を泳いだ ～おとしより救助も命がけ～			
	66		車の通行で二次災害 ～水圧でガラス割れ～	中部	家庭	平成18年梅雨前線による豪雨 (平成18年7月)
	67		避難者受け入れで大混乱		地域・ご近所	
	68		出先事業所に伝わらなかった本社の被害状況 ～なぜ休みと問い合わせ相次ぐ～		企業・職場	
	69		「まだまだ長雨」と最悪のシナリオを考える			
	70	風水害 (竜巻)	ドーンと音がして電車が横転 ～瓦や角材が水平に飛んだ～	九州	地域・ご近所	平成18年台風第13号 (平成18年9月)
	71	風水害	マイカー水没の経験生かす	中部	家庭	平成20年8月末豪雨 (平成20年8月)
	72		停電でケーブルテレビ映らずワンセグで雨量知る			
	73		町内にボランティアのサテライト ～地元の問題解決にひと役～		地域・ご近所	
	74		水田にあふれた水から威圧感			
75	災害共通	1時間で開始、公民館の炊き出し	九州	地域・ご近所	平成18年台風第13号 (平成18年9月)	
76		みんなで守る地域の高齢者 ～民生委員さんと一緒に「見守り隊」～				
77		すぐ来てくれた市の相談窓口		行政		
21	78	地震・津波	缶が転がる家で1カ月 ～避難所行かず、自閉症の子と自宅で過ごす～	中国	家庭	平成13年(2001年)芸予地震 (平成13年3月)
	79		指令待たずに消防団の服を着て駆けつけ		地域・ご近所	
	80		「あんたがやるんよ」 ～わざとスコップ持たずに地域の見回り～			
	81		軽トラック横転、必死の脱出 ～道路が真ん中から「バーン」と割れた～	東北	家庭	平成20年(2008年)岩手・宮城内陸地震 (平成20年6月)
	82		思い知った水の有り難さ ～一瞬にして沢の水止まる～			
	83		不安から希望へ ～道路工事の進み具合を知り、気持ちも前向きに～		地域・ご近所	
	84		避難するときはまわりに言づけて ～行く先わからず安否確認に手間どる～			
	85		杉の木につかまり、揺れがおさまるのを待った ～チェーンソーで、道路切り開き～		企業・職場	
	86		学校に行かなくても安心 ～先生からこまめにメール～		学校	
	87		間に合わなかった急傾斜対策 ～測量開始が一週間前～		中国	
88	救急車来ず、自力で病院へ ～3回目の119番に「行かれませぬ」～					
89	「サラサラサラ」と流れていった隣りの家 ～「99%中に人がおる」の一言でレスキューがすぐ救助～	地域・ご近所				
90	顔色みながら職員と会話し、アフターケア	行政				

「一日前プロジェクト」エピソード一覧

年度	ページ	災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災害	
21	91	風水害 (高潮)	膝までの水にパソコン持って部屋の中をうろうろ ～最後は水の中に「ポイ」～	中国	家庭	平成11年台風第18号 (平成11年9月)	
	92		水は「ズンズンズン」と押し寄せた				
	93		台風通過の全国ニュース、地元の状況分らず ～避難勧告の空振り「最高」～				
	94		2度目の経験 記録に残そうと写真撮る				
	95		まちの電気屋さんが家電製品を無料修理 ～直後はご近所から部屋借りる～		地域・ご近所		
	96		特定の避難所より2階や親戚 ～自主防災会で計画～				
	97		高潮きっかけに自主防災会 ～やっぱり日ごろのおつき合い～				
	98		30センチの水が急に胸まで ～普段は気付かない道路の凸凹～				
	99	風水害	近くの大災害もニュースで知る	中国	家庭		平成21年7月中国九州北部豪雨 (平成21年7月)
	100		たな田がナイアガラの滝のよう				
	101		まるで地獄の使者のよう ～木、岩、砂が家に「バリバリッ」～				
	102	火山	準備万端でクールに受け止め ～ニュースにならないとメディア引き上げ～	北海道	地域・ご近所		平成12年(2000年)有珠山噴火 (平成12年3月)
103	安全な時期に学ぶ山と共生の大切さ ～火山防災への地域の積み上げ～						
104	避難所内の取材規制で被災者の心守る ～子どもたちの居場所作りにも苦心～						
105	噴火前から避難所新聞 ～生活の約束事など知らせる～						
106	避難中も空き事務所で商売続ける ～一旦離れたお客は二度と戻ってこない～		企業・職場				
107	災害共通	3、4年探してやっと見つけた次の自治会長	中国	地域・ご近所	平成11年6月末梅雨前線豪雨 (平成11年6月)		
108		災害時にも必要だった女性の視点	中国	地域・ご近所	平成11年台風第18号 (平成11年9月)		
109		避難者対応に栄養士さんが大活躍 ～コンビニ弁当のメニューも考案～	北海道	企業・職場	平成12年(2000年)有珠山噴火 (平成12年3月)		

地震のショックで思考停止

～声出す人がリーダーシップ～

(小千谷市 50代 男性)

自衛隊のヘリが来るまでは、みんなで廃校になった小学校のグラウンドに避難したんですけど、やっぱりショックが大きくて、そこに行くにもだれかが先導しないと動けないという状態でした。声を出す人が2人くらいいないと絶対動けないんですね。何をどう考えていいかわからないという感じ。だから、自分と友達2人で、いったん村を捨てようという決断を皆にさせようと相談してから、「ここで寝てくれ」とか指示をすると、全員いい子になってついてくるんです。人の思考回路というものがなくなってしまったかのように。

「それは結構怖いことだな」、「もし自分たちの判断が間違っていたらとんでもない方向にいったかもしれないな」と、後で友達と話をしました。その後3日目くらいからやっと個々に文句を言うようになってきました。「これは意識が戻ってきたね」と。自分たちもしっかりしていたつもりなんだけど、相当変にはなっていたと思うんです。

5日目くらいになると皆さん自分の意思表示ができるようになったというか、「おまえらみたいなのに指図される筋合いはない」という声がいっぱい出てきて、これはもう大丈夫だということで、村の区長さんたちにバトンタッチしました。



朝食を一緒に配りませんか？

～被災者も立派な働き手～

(三条市 30代 男性)

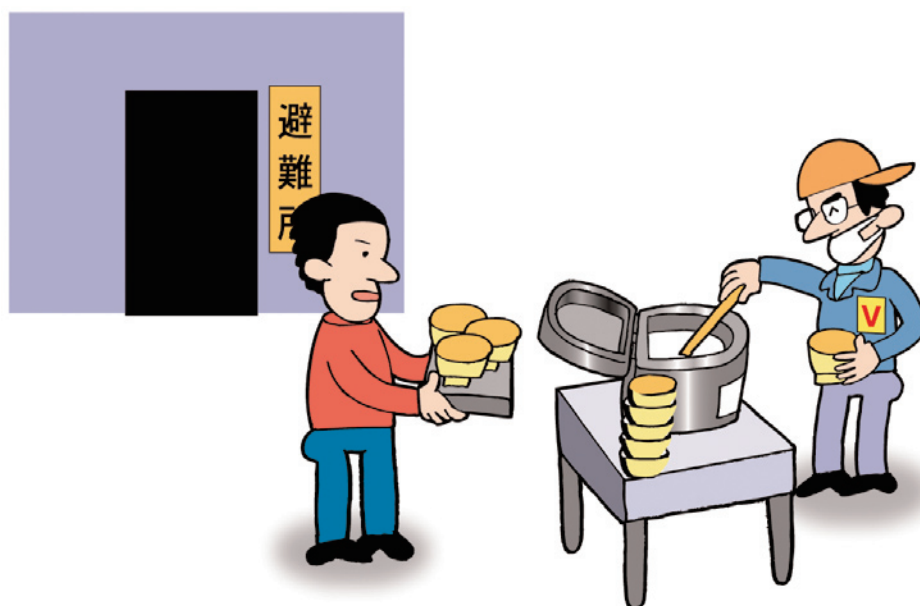
地震で被災した地域の小学校のテントですっと寝泊まりをしていました。固いおにぎりじゃ、とてもジーちゃん、バーちゃんは食えないぞという話になって、おかゆだけは乳幼児の離乳食にも使えるからと、24時間切らさないようにしていました。

で、朝ご飯を7時に食べさせようとする、一般ボランティアはまだ来てくれないから、人の手が足りない。われわれ2～3人で1,000食とかを配り切れるものじゃない。

考えたら、「いるじゃないか、体育館の中にぶらぶらマンガを読んでヒマそうにしている連中が！」となって、館内放送をしてもらったら、10人ぐらいがわーっと来て手伝ってくれたんです。けれど、翌日から1人減り、2人減り、3人減りという具合。「どうせ、そんなことをしなくたって飯を食わしてもらえる」という考え方が浸透してきたんですね。

「冗談じゃないぞ」ということになって、行政のほうからも声をかけてもらったら、入れかわり違う人を連れてきてくれるようになり、今度はそこから派生して、どんどん人が増えてゆきました。

ボランティアって、なぜか避難所のなかって足を踏み入れにくいんですよ。生活の場、プライベートの場ですから。外部の我々はなるべく入りたくないし、入っちゃいけないと思うので、そこに避難している人に、炊き出しをとりに来られないお年寄りへおかゆを持って行ってもらいたいのです。そうすれば、お年寄りがいつもと違うようだったら、すぐに気づくはずですから。



大工の私が一番後悔

～家具の転倒防止を勧めておけば…～

(小千谷市 60代 男性)

私は大工をしているものですから、いわゆる皆さんの家の建築工事に携わっていて、いろんな面で家財道具の転倒防止というのを、盛んに言われてきたのを知っていたんです。

でも、まさかその当時は夢にも思わなかった、こういう大地震というのは。

今回の地震では、もちろん構造自体もそうだったんだけど、まず家財道具の転倒がものすごかったんです。ですから、そういうのをあらかじめ、やはり転倒防止、たとえば食器棚やタンスとか、ほんのちょっと、わずかなことなんだけど、それをしておけばまだ被害が軽かったなというのが、災害後にまず実感したこと。

一番後悔しているといひましようか、そんな感じがしました。



高い食器を二度割った

（福岡市 50代 女性）

地震が起きた日はちょうど日曜日で、主人はゴルフに行っていました。

私は家にひとりぼっちでした。で、着替えてソフトバレーボールの練習に出かけようとしていたら、ワーンと揺れて、うちの食器棚は観音開きだから、扉が左右にダーッと開いて、中の食器がバーッと飛び出しました。

割れた食器を見たら、いつもわりといいのを食器棚の手前の方に置いてあるから、コーヒーカップのセットやらクリスタルのグラスやらが落ちて粉々でした。それに、主人の退職祝いでもらった高い花瓶も割れてしまっているんです。「ああ、残念だったな」と思いました。

なもんで、そんな私をかわいそうに思った友達が、1回目の地震のあと、いくつか食器を持ってきてくださったんです。けど、1ヶ月後の2回目の地震のときに、それもまた割ってしまいました。

最初の地震で大事なものを割ってしまったから、しばらくは食器棚の扉が開かないようにヒモでくくりつけていたのに、1ヶ月たったらもう忘れているんです。



つくりつけの家具で救われる

～倒れるかと思った高層マンション～

（福岡市 50代 男性）

私の家は、9階建のマンションの最上階です。地震が起きた時は、まず体験したことがない揺れでしたので、「あ、このマンション倒れるな」とふと思いました。それから、子供が家に居たので、無我夢中で子供部屋を見に行きました。

うちは幸運にも、4、5年前にリフォームをして、家具を全部「つくりつけ」にしていたので、タンスが倒れることもありませんでした。隣の家に行ってみると、棚上のテレビは落ち、大きな家具は倒れ、金魚鉢も見事に割れていました。

家具を「つくりつけ」にしたのは、地震を意識していたわけではないんです。収納力がアップするし、見栄えもいいという、ただそれだけの理由でした。

今回の地震で、つくりつけの家具*と後置き家具がこんなに違うんだということを実感しました。ほんとうに、たまたまでしたが、ラッキーでした。

*つくりつけの家具とは、取り外しのできない、壁などと一体化して作られた家具のこと。



最初はみんな「お殿様かお姫様」の避難所

（福岡市 60代 男性）

避難所に来た皆さんは、最初はお殿様かお姫様みたいに、じっと座っているだけなんですよ。私たち小学校区の役員が対応に追われているときも。同じ被災者なのにね。

そこで、「元気な方はどうぞ、一緒におにぎりを握ってください」、「お米を研ぐのを手伝ってください」とお願いしたら、若い人もお年寄りも我に返ったように、「それなら」と気持ちよく炊き出しの手伝いをしてくれました。

あれから、避難所にいる人たちの気持ちがひとつになったような気がします。だから、避難されてきた方々をお客様みたいにさせない方策、例えば必要な役割ごとにあらかじめチームを作っておいて、どこに何人配置するかを決めておく。避難者にも作業をお願いするということも考えておくことが必要じゃないかと思います。



地震後に「店開けてくれ」と70軒

～デパートの客追い出しで人あふれ～

（福岡市 50代 男性）

町内にはデパートが2軒、ホテルが1軒、大型商業施設やらバスセンターやら駅ビルがあって、市の避難所になっている公園があります。地震発生直後、その公園には、近くのデパートなどから避難してきた人たちが大勢、不安そうな顔をして集まっていました。

私はそれを見て、町内のお店70軒くらいに「自分達も大変だろうが、店を開けてくれ」とお願いをして回りました。要は、避難している人たちにお水やお茶を提供してほしい、お便所を貸してほしいというお願いをしたわけです。みんなお店を開けてくれたので、助かりました。お店の方も普段よりもうかったなんて笑い話もありました。

やっぱりこういう時は助け合いが大事ですね。今までも『市政だより』を自分達で届けたりしていましたが、これからは、お店のご主人や企業の方、デパートの防災担当の方たちとは、普段からもっと連絡をとるようにしたいと思います。



デマ防止に、消防車や校内放送でラジオ流す

（福岡市 70代 男性）

避難所になる小学校には消防署が隣接しています。幸い、地震が発生して、私が小学校に駆けつけたときには、もう、消防団が集まっておりました。で、私はまず、彼らに消防車の拡声器でNHKのラジオを流すように頼みました。

それから小学校に避難してきた地域の人たちに、1人ずつ声をかけていたら、教頭先生がおられたから、「学校放送でNHKのラジオを流し続けてください」と言いました。

私は子供のころから、関東大震災の時にいろいろとデマが飛んで暴動が起き、地震とは関係の無いところで事件が起きてしまったという話を聞かされてきました。だから、正確な情報がスムーズに伝達されなければならないと思い、NHKのラジオを流し続けるように頼んだのです。

そうしたら、被害の状況とか、街の様子とかが、ずっとラジオから聞いたんですよ。



役だった「災害時要援護者台帳」

～「民生委員さんが来たよ！」との声に役割を実感～

（福岡市 60代 男性）

私は長年民生委員*をしています。その日は彼岸の中日ということで墓参りに行く準備をしていた時に、ゴーツという音と同時に、びっくりするくらい家が揺れました。幸い私のうちは新しく建てたもので、いろいろ中のものが倒れた以外は無事でしたので、すぐに「災害時要援護者台帳」を持って、それに登録してある方たちの安否確認に出向きました。

台帳は、平成7年の阪神・淡路大震災の翌年から取り組んでおりまして、ひとり暮らしの高齢者や障害をお持ちの方とか、生活弱者の方たちに民生委員が聞き取り調査をして保管をしているものです。

台帳には、親戚とか緊急連絡先が3名まで書かれていて、ケガとかされていた場合すぐに電話できるからと、それを持って回りました。

私たちは、いつものように民生委員の腕章をつけて、順番に家を回りました。あるお宅に行って、「ケガないね？」と声をかけたら、電話中だったんだけど、「今、民生委員さんが来てらっしゃった！」と電話越しに大きな声で言っていました。あとで聞いたら、娘さんと話をしていたとのこと。

そんな時、やっぱり民生委員も頼られているなと思いました。

* 民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



避難所のリーダーさんは中学生

～校庭キャンプの経験生かす～

（福岡市 50代 男性）

学校に行ったら、子供たちが率先してハンゴウ*を出したり、畳を干したりしていました。大人の方も手伝っていましたが、確か、その春に卒業したばかりの子供たちが中心になっていたと思います。

最初の3日間ぐらいは、畳とかマットを敷いて、小学校の講堂に避難してきた人たちを寝かせたのですが、子ども会で年に1回、校庭でキャンプをしているので、講堂のどこに何がしまっているのか、子供たちは全部知っているんですね。

避難所になっている小学校の隣は消防署でしょう。寒いからと言って消防署の方も一緒にたき火をしようということになりました。子供たちは校庭キャンプでバーベキューをした経験があるから、ドラム缶で火をたこう、お湯を沸かそう、という時に自然にできたのです。

*ハンゴウとは、アルミニウムなどで作った底の深い炊飯兼用の弁当箱。
キャンプなどで使用。



入っておけば良かった損害保険

（三条市 40代 男性）

今回、たくさんの車が水につかってだめになっちゃったけど、車両保険に入っていた車は、保険金が支払われています。

そういう話を聞くと、やっぱり保険というのは大事だなと思いました。

だって、前の日、7月12日の夜9時に新築した家の引き渡しを受けて、翌日の2時過ぎに水につかっちゃったという家もあったわけですよ。信じられない話ですけど。

実際にそういう話を聞いたり、見たりしているから、今は、やっぱり何はさておき、まず保険だなと思っています。



早かったですよ、水がきてからは

～たった一時間で自宅が水没～

（三条市 40代 女性）

テレビで、あの辺の川がはんらんしそうですとか、三条市は大雨で大変ですみたいのを見ていたんだけど、うちのところに水が来るなんてことは、全然想像できませんでした。主人もお昼頃、うちに戻ってくるわけですよ、車に乗って。タイヤがかぶるくらいの水の中を、「職場の人が、何かあるといけないからと、お茶のペットボトルとカップラーメンくれたぞ」とか言って帰って来て、車を車庫にきっちり入れました。

で、「やあね、こんな雨」とか言いながら過ごしていて、家族全員がうちにいたわけですよ。家はちょっと道路よりも上にあるので、玄関にもし水が来たら嫌だからと言って、子供の野球用品とか大事なやつを玄関の上に上げたただけでした。

それが午後2時ごろで、ワーッと水が来たのが午後3時か3時半ごろでした。うちの中に水が入って来たんです。早かったですよ、水が来てからは。1時間くらいで1階がすべて水につかってしまいました。



お母さん、足がグニュッとする

～水が畳を押し上げた～

（三条市 40代 女性）

パソコンで何かやっていた子どもが、「何か足がグニュッとする」と言いました。私は台所において、板の間だったから何も感じなかったのですが、子どもたちが「あれっ、何か畳がおかしい」とか言っていました。私は「えーっ！」と言って、バツと玄関をあけてみたら、水がこう、下から畳を押し上げていたわけですよ。

これ、ふつうじゃないよということで、息子と主人は、データが失われるとか言いながら、パソコンを2階に運びました。それから、デジカメは上に上げなきゃとか、家中大騒ぎになりました。

地震と違って水は静かに来るんですね。家の中にいた私たちは、回りがそんなに恐ろしいことになっているなんて、全然気がついていませんでした。

大雨のときはラジオを聞くなりして、もっと積極的に情報を集めておけば良かったなと思っています。



冷蔵庫も洗濯機も浮いていた

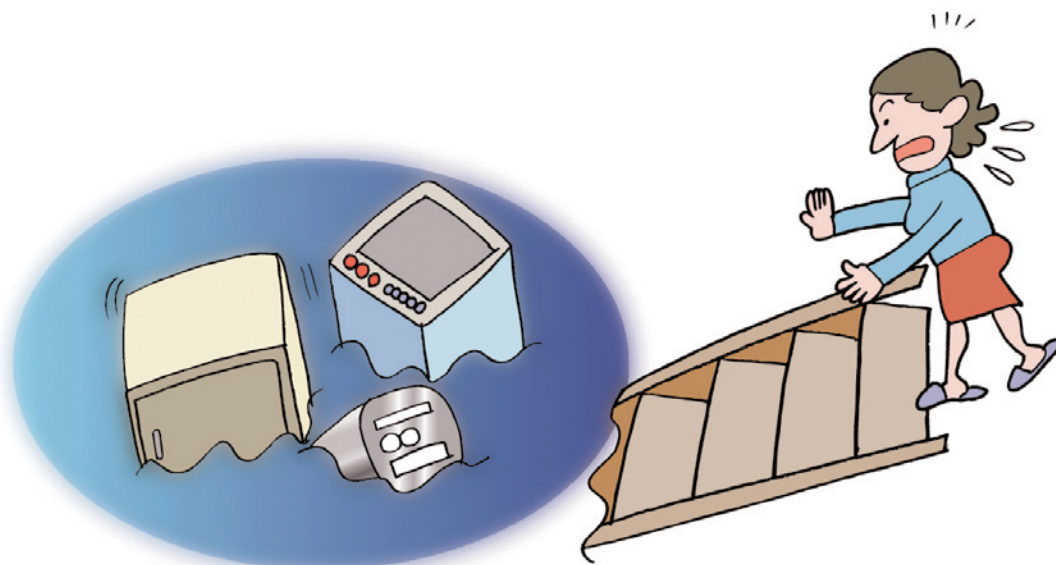
（三条市 40代 女性）

川が決壊してからは早かったですね。ほんとに一瞬の出来事というか、水が玄関の中に入って、「入ってきたよ！」って子供に言われて、「じゃあ、荷物をとっとと上げなきゃね」と言った時には、もう水はヒザより上の高さでした。

それからあっという間に、裏の川からどンドン水が流れてくる。台所のほうが湿ってきちゃって、「これはやっぱり上がってきちゃうのかな」と思ったのが午前11時過ぎ。息子たちに手伝ってもらって、体操着から布団までみんな二階に上げた頃はお昼を回っていました。

子どもが「腹減った」というので、おにぎりを食べさせて、テレビをつけたら、避難するところが大分増えていましたが、まだ私たちの町名というのはいないんですね。

じゃあ、うちだけがひどいのかなと思って、2階から外を見ていたら、ミシミシと音がしてきました。何かと思って下を見ると、たんすが倒れ、畳も冷蔵庫も洗濯機もみんな浮いちゃっていたんですよ。そうなったら、もう階段を下りられるような状態ではないんですね。階段の下から4段、5段まで水が来ていて。それが午後1時半過ぎたころだったと思います。



非常持出袋より避難が優先

（長岡市 40代 男性）

緊急用の持出袋を用意しなさいってよく言われるけど、私は特別なものは必要ないと思いますよ。今回は食料はすぐ届いたし、外に出ればコンビニがあっちこちにあって、飲み水もある。それを捜す手間があるんだったら、とっとと逃げてほしいと思います。避難するのが第一です。

なぜなら、中越地震の時に、その袋を取りに戻った方が、直後の余震で亡くなられたとも聞いています。そのときにさっと持っていけるものだけ持って逃げればいいんです。私たちが逃げるときは、余計なものは持っていきませんでした。

今回の水害でも、結構みんな、現金とか通帳とかを持って逃げているんですよ。でも、通帳やキャッシュカードがなくても、身分証明さえしっかりしていれば、金融機関は全部やってくれましたからね。ただ、災害泥棒みたいなのがいるから、家をあんまり空けたくないという気持ちがあって、逃げるのをためらっちゃう気持ちもわかります。留守宅の見回りとかを組織的に実施できるようになればいいなと思います。



100万本のタオル届いて目を回す

（三条市 40代 男性）

NPO*の人が、ネットで「全国からタオルを集める大作戦」を提案してくれました。たかが知れているだろうと思って受け入れたら、ピーク時には、タオルが10トントラック3~4台分も来て、大変なことになりました。

過去に被災を経験した方々からアドバイスをもらって、よかれと思って始めたら、ネットの力が想像以上にすごかったです。どうしてもタイムラグが出ちゃうんですね。

今欲しいものをネットにアップすると、2~3日後に集まり始めて、1週間後ぐらいになるとそれが過剰に集まってくるので、「もう要らねえ」という話になるんです。

段ボールで、10箱、20箱と送られてくるやつを、人間が袋に入れて、3つや4つ持って歩いたところで知れていますから、さばきようがない。タオルの置き場所にも困るありさまでした。

*NPOとは、Nonprofit Organizationの略で、行政・企業とは別に社会的活動をする非営利の民間組織を指します。



「水飲み」「休め」のサンドイッチマン

～「熱中症注意！」とねり歩く～

（三条市 40代 男性）

水害後だから消毒しなきゃいけないということで、石灰をまいたり、消毒液をまいたりするのですが、最初はボランティアもまいていたけれど、石灰が目に入るとあぶないのでやめましょうということになりました。

救援活動を続けていくうちに、釘を踏んだりすると破傷風*のおそれがあるといった衛生面での注意事項がどんどん増えていきました。で、ボランティアセンターでも熱中症*とか脱水症状に注意するようにといったチラシを配りました。

7月の熱い最中で、水分補給が一番の課題でしたので、県の社会協議会の人自らがサンドイッチマンみたいになって、「熱中症注意」と書いた紙をからだにベタベタ貼って歩いていました。それから、スポーツドリンクは高価でなかなかないので、高校生のみなさんが塩ひとつまみをアルミホイルに包んで、道行く人に配っていたのを覚えています。

*破傷風とは、破傷風菌が産生する毒素によって、口唇や手足のしびれや口が開けにくいといった神経症状を引き起こし、治療が遅れると全身けいれんを引き起こし死に至る感染症です。傷口に木片や砂利などの異物が残っていると、破傷風は発病しやすくなります。水害対応のときには、泥の中での作業が多くなりますので、特に手や足に傷をつけないように注意しましょう。

*熱中症は、強い直射日光に長時間照らされた際に起こりやすい病気です。予防としては、休息や水分補給をしっかりとのこととされています。



こんなにも多かった地域のお年寄り

（長岡市 40代 男性）

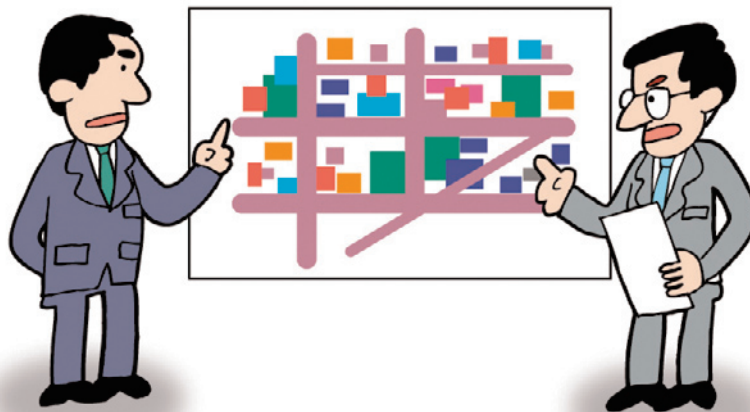
消防団では、今度、避難準備情報*が出たときに伝える仕組みづくりとして、お年寄り世帯を特定して、色分けをして、この世帯はお年寄りだけとか、昼間はうちの人が勤めに出ていて夜だけいるとかがわかるマップを作りました。

担当エリアは大体近所なので、どの家が昼間は年寄りだけなのかみんな把握していますが、色づけしてみると、ほとんど全部がそうなります。だから、今いる消防団員が11人で、大体最低で5人、6人は出てくるけれど、やっぱり自治会と連携していかなかったら、全部の家に声をかけて回るのは無理だと思います。

自治会のほうでも、援護が必要な方に声をかけるといった防災訓練を2年続けてやっていますが、自治会の班長さんだけが回ってそれでおわりなんです。班長さんだけだと、避難してくださいと言っても、ジーンちゃん、バァーちゃんは出てこないですよ。やっぱり、民生委員*や消防団、班長さん、自治会長と一緒にやらないとだめだと思います。

*避難準備情報とは、避難に時間がかかる「災害時要援護者」（高齢者や障害者ら避難に時間のかかる人たち）のために、通常の避難勧告（避難行動を開始すべき段階）や避難指示（生命への危機が迫っている段階）に先だって発令し、いち早く安全な場所に逃げてもらうための情報です。

*民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



レポーターはタクシードライバー

～コミュニティFMが大活躍～

（三条市 30代 男性）

情報ボランティアってすごく大事ですよ。水害になるとテレビがダメなので、ラジオしか情報源がないんです。避難所情報で、どこに何があるとか、何時から何が配られるとか、そういう情報はやっぱりラジオがすごく役に立ちました。

地元のミニFM局は、水があふれ始めたときから延々と、24時間水害情報を流していました。ああいうことを体験できたのは良かったと思います。

タクシーの運転手が帰ってくると、「〇〇が冠水しているよ」と無線を通じてラジオ局に知らせるんです。そうするとFM放送で、「〇〇冠水で、通れません」と流す。そういうのを繰り返していたと運転手さんに聞きました。

ほかの民放局は、やっぱりそれなりのプログラムで、たまにスポット的に情報を流すぐらいですが、水害は範囲が限られているから、地元のFMが頼りです。



ふだんからの声かけが災害時に生きる

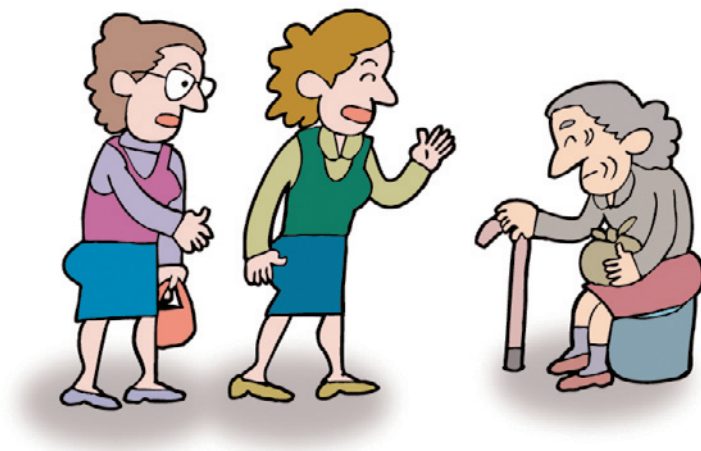
（三条市 80代 女性）

自分は今、民生委員*をさせていただいているんですが、市のほうからいろいろな指示が来たときに、「いや、おら、そんなとこ、嫌だから行かぬえ」っていうお年寄りもいますよね。そうじゃなくて、「あんたの言うことだったら聞くから、おれも一緒に連れていってくれ」というような、信頼関係をつくっておくことが大切だと思います。

洪水で本当に水がどんどん追いかけてくる場合は、年寄りを置いて、自分が先に逃げるかもしれませんけれども、まず、地域のお年寄りの人たちに、安心して町内に住んでもらって、みんな助け合っているんだということをわかってもらえれば、「頼むね」「うん、任せてね」という、そういう信頼関係ができると思います。

普段からお宅を訪問して健康状態を聞いたり、心配事はないかとかいう話しをしておいて、自治会長さんとうまく連絡をとりあって、一緒に避難するという約束ごとをつくっておけば、みんな一緒に逃げられるって思いました。

*民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



要援護者の枕元に手作りタンカ

（三条市 80代 男性）

昨年、援護が必要な方に参加してもらって避難訓練をやったんですが、寝たきりの方を両脇から抱えて、車のとこまで運んでいくだけでもほんとうに大変でした。それで、車いすなんて家の中じゃうまくいかないから、タンカで表へ運ぼうということになって、一番大変な人のところへタンカを設置することになりました。

以前、県の防災訓練のときのタンカは、布がやわらかくて、こう、くぼむわけ。だからそこに寝た人は難儀で、もう、息が苦しくなるほどだったと。それではダメだということで、女性たちがみんなで集まって、張りのあるかたい布でタンカを作ろうということになりました。脇に伸縮するステンレス製の丈夫な物干し竿を入れてみたら、人が乗っても布があまり下がらないんです。

今はみんなで作ったタンカを、「いつでも隣近所、民生委員*、それから災害委員が手伝いに来て、安全なところへ運びますから」と言って、順次、必要な方の枕元に置いてもらっていますが、大変喜ばれています。

*民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



働き盛りの男性を地域デビューさせるには？

（福岡市 50代 男性）

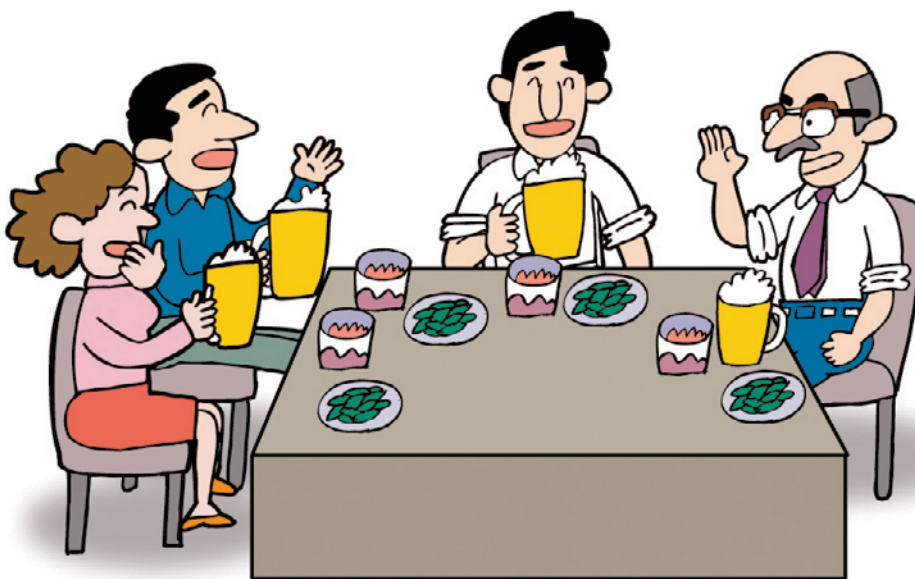
地域の活動に参加する40代、50代前半の男性というのは極めて少ないのです。その人たちをどう確保するかというと、やっぱり飲み会。今までの経験からいっても、やっぱりお酒の席が一番入りやすいんですよ。

新しい人を誘う時には、とにかく名前だけでも書いてもらって、「来られるときに来てください」、「来られないときにはすみませんが電話をください」と声をかけます。2回続けて返事もなければもう誘いません。

男性を地域の活動に誘い込むのはものすごく難しいです。一度出ても、二度目は来ないという人も結構いるわけです。40代、50代前半の男性が継続して参加するような雰囲気になると、すごくよくなるんじゃないかなと思います。

男性は平等に見ようとするけれども、女性だけにすると偏ってしまう。かといって、あまり男性が強すぎると軍隊みたいになってしまう。やっぱり女性、男性お互いに物が言える環境をつくっていくことが大事ですね。

今度の地震でも、日ごろのおつき合いがあったから、地域の復旧活動がうまくいったのではないかと思います。



おばあさんを背負って山の中腹へ

～津波を見に行つて、危機一髪～

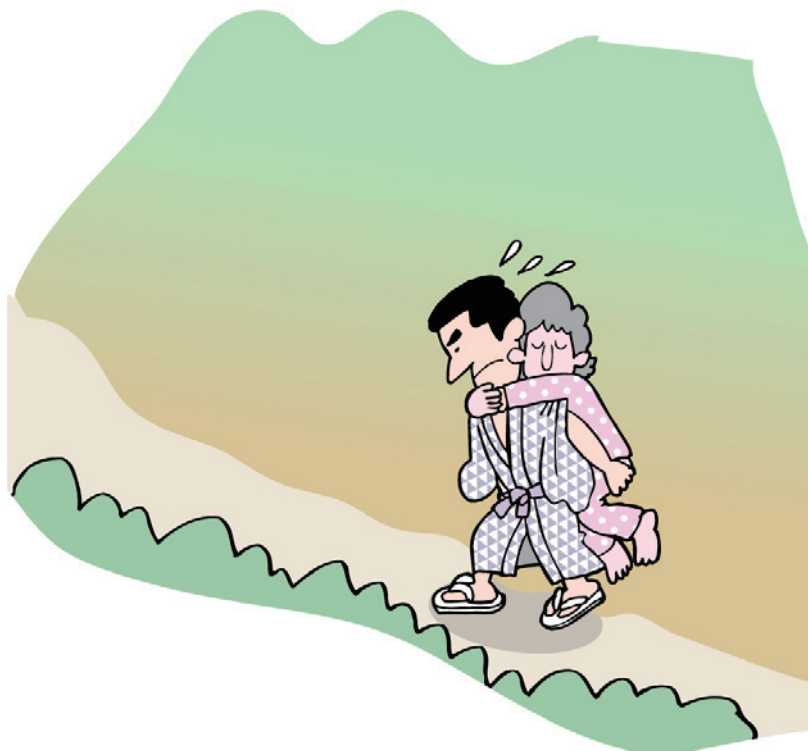
（徳島県海部郡 80代 男性）

ものすごく家が揺れてね。2階に寝よつたから階段をはうようにしておいて、隣の空き地へ行つたのよ。で、一たん揺れがおさまつてから、このままではいかん、こういう格好では何もできないと、服を着替えに2階へ上がつていった。そしたら、隣のおばさんが「井戸の水が引いたぞー、津波が来るぞー」言うて、どなつとるんよ。

すぐに逃げなきゃいけないのに、その頃は全く津波や地震の知識がなくてね。津波が来る、こら面白いなということで、海の見える土手まで見に行つたんです。すると、水がドーンと上がつてきとる。これはいかんわと、あわてて家へ帰りました。

家では、84歳のおばあさんが寝ていたのですが、布団のそばまで津波の潮が来ていました。それからアツという間に部屋の畳が浮き出したんです。

水はもう腰ぐらい。私は、「おばあさんを死なせちゃならない」と背負つて、藻やらが浮く水の中をかき分け、かき分け、150mぐらい先の山の中腹に住む知人宅へかつぎ込みました。気がつけば、浴衣1枚でしょう。寒うてねえ。枯れ枝を集めてきて、さあ火をつけよう思うて、マッチをなんぼすつても火がつかんのじゃ、手が震えて。



早く逃げれば良かった

（徳島県海部郡 70代 女性）

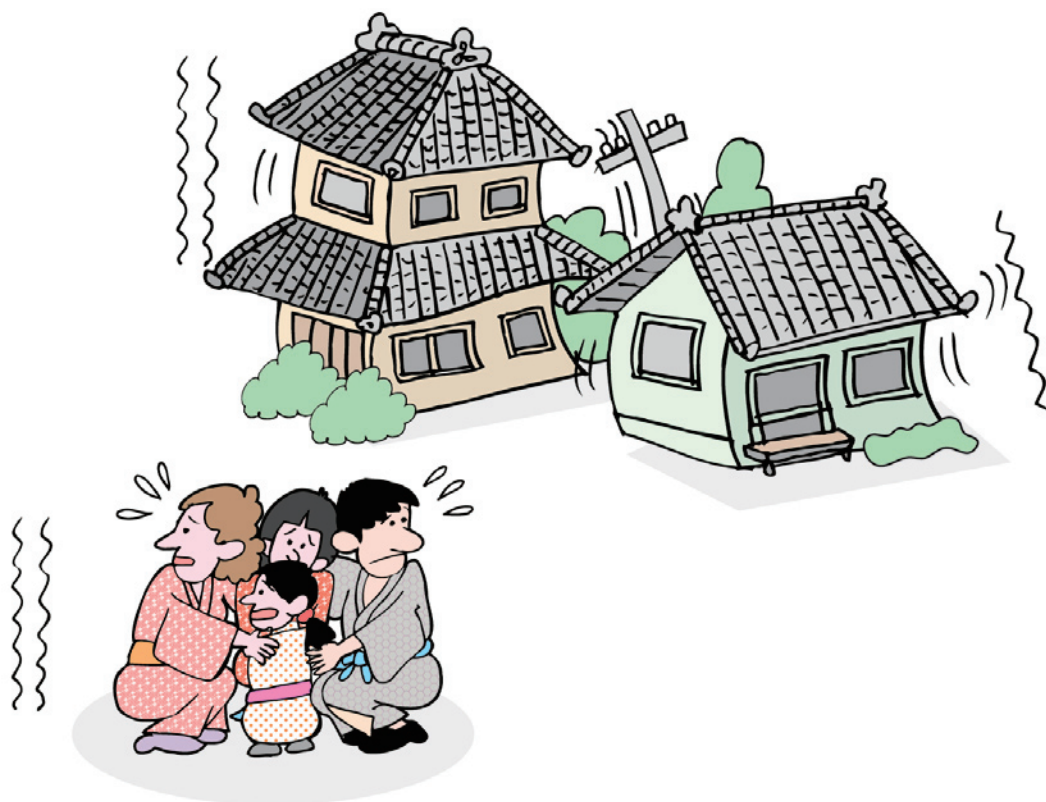
当時私は16歳。寝入りばな、体を揺さぶられたような気がして目が覚めました。横に姉が寝ていたから、起こそうかと思ったけれど、たいしたことないだろうと思ってね。

しばらくしたら、すごい揺れがはじまって、「家がつぶれたらたいへんだ」と父が言って、素足のまま、親子4人が外へ飛び出しました。

ものすごい揺れだったから、とても立っておれなくて、4人がお互い体を支えるようにして、道路の上へ座ったんです。外は真っ暗で何も見えませんが、家がギシギシ音をたて、「これ、止まるのかなあ」って思いました。

で、ようやく揺れがおさまった時、逃げればいいのに、寒いからと、またみんなで布団の中へ入ったんですよ。それから1、2分ぐらいでしょうか。男の人の声で、「津波が来るぞー」と2回聞こえたのです。父が「早う逃げなんたら、あかん」言うて、親子4人が家の玄関の戸をあけたときには、もう腰まで潮が来ていました。

今なら、布団にもどってしまうなんて考えられませんが、親も津波の経験がなかったからだと思います。



やっぱりみんな倒れてしまった

～物が散乱して前に進めず～

（石巻市 50代 男性）

「ガ、ガ、ガ」ときて目がさめて、「ああ、これがいわゆる宮城沖地震なのかな」って、立ちながら感じていました。

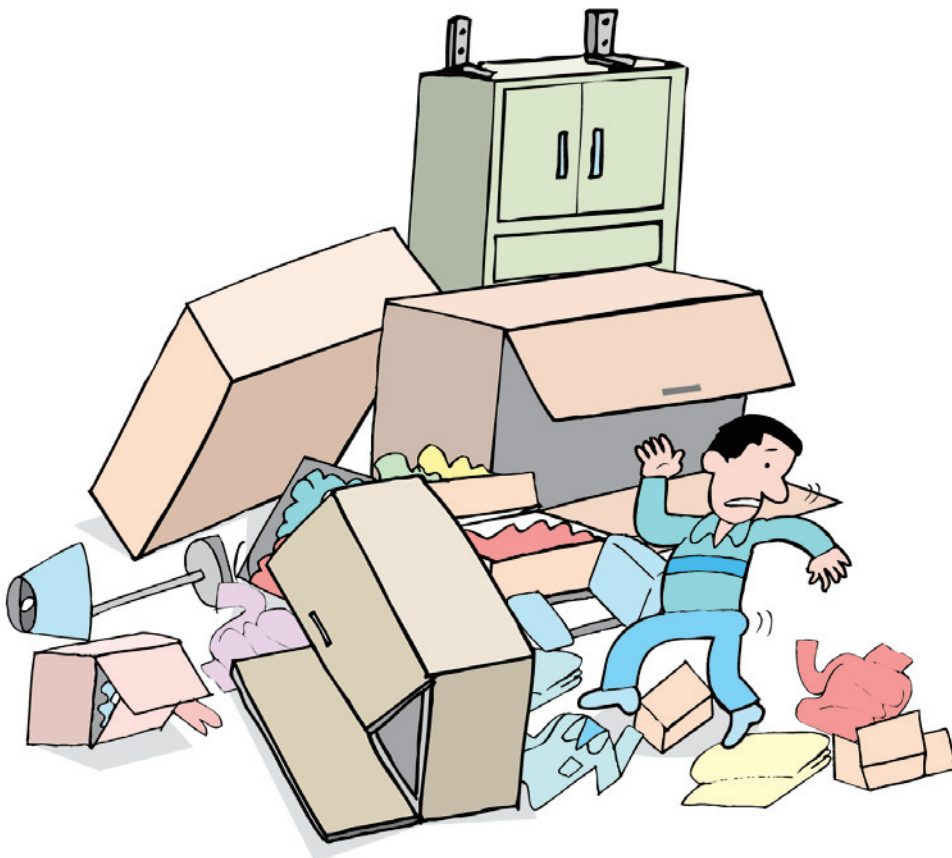
部屋が2階に4部屋ほどあって、私は道路側の階段から一番遠い部屋で寝ていました。そのとき女房はもう朝起きていて、1階で朝ご飯のしたくをしていましたので、無事かどうか確かめに行こうと思いました。

ようやくフスマをあけて部屋から脱出しましたが、家の中のありとあらゆるものが倒れたり、落ちたりしていて、足の踏み場もないくらいでしたので、なかなか前に進めないのです。

で、2階から下の茶の間に行くまでに、10分はかかりました。

ちゃんと地震が来るとわかっていたら、いろんなものを留めていたと思うんですけども、それをやっていなかったものだから、やっぱりみんな倒れてしまったわけです。

ただ、茶の間の大きな食器棚だけは、L字金具を買ってきて何力所か留めていたので、倒れませんでした。やってよかったなと思いました。



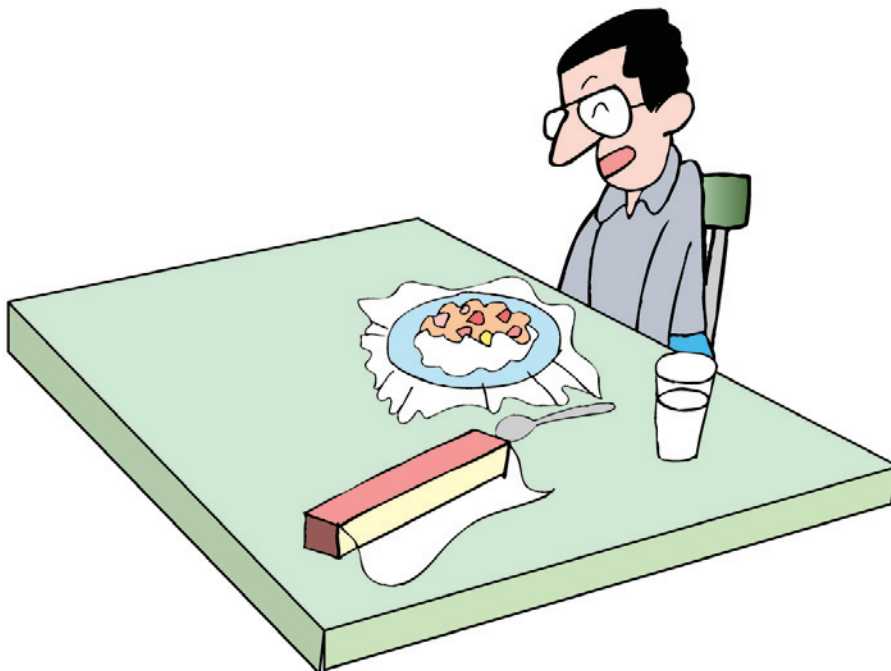
水が使えず、お皿にラップ

（石巻市 70代 男性）

私のうちは地震後92時間、3日半ぐらい水が出なかったのね。トイレはすぐ近くの病院ですませました。病院は自家発電で大丈夫だったから。

水がなくて一番困るのは、何でも洗うことができないということなんですよ。で、アウトドアでやったのを思い出して、ご飯を食べるときもコーヒーを飲むときもラップを敷いて使いました。

友達が多いものだから、食べる物がないだろうからって、豚の角煮だのいろいろと持ってきてくれるのです。ああいうのって油っぽいから、洗うのは大変ですよ。だけど、ラップを敷くやり方だと、汚れたらラップさえ取り替えればいいわけです。水が出るまでの間、ずっとそうやっていました。



油断大敵！

～屋根うらのボルトのゆるみも確認を～

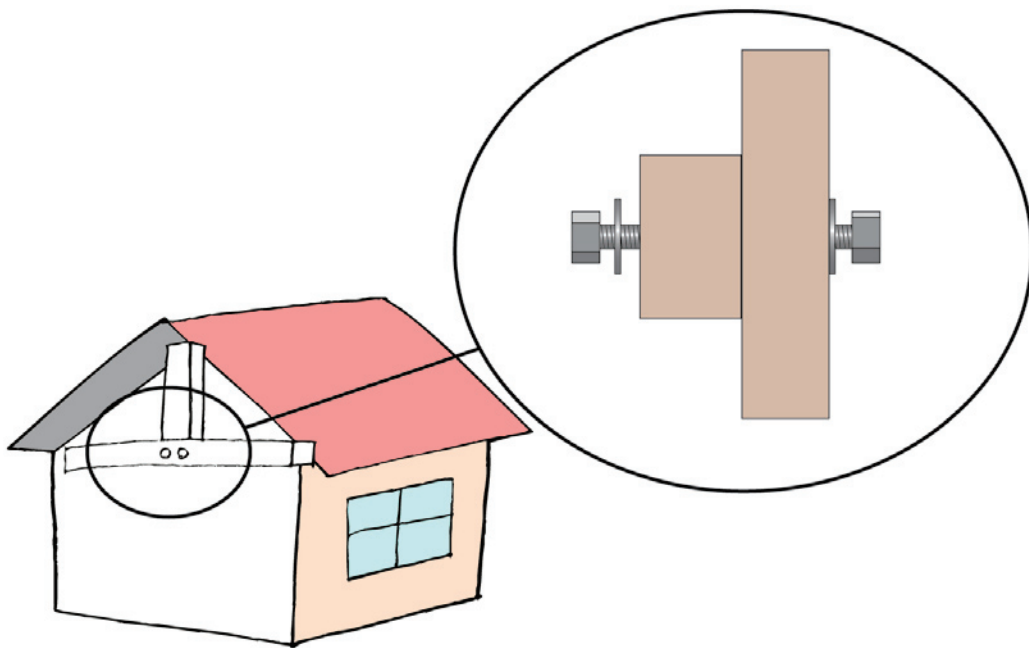
（東松島市 50代 男性）

地震の後、ある住宅メーカーが無料診断をしてくれるというので、建築士の人に屋根裏に入って見てもらったんです。うちの家は平成3年につくったものですが、撮ってくれた写真を見ると、ボルトなどの金具がみんな緩んでいたんです。

木造だと、乾燥して木がだんだんやせてきて、やせてもボルトはそのままだから、何もなくても若干は緩むということは知っていましたが、うちの場合は、地震の影響でナットなんかはかなり緩んでいたのので、耐震補強をしてもらいました。

ふつうの人は、ふだん屋根裏までは見ませんからね。「この前、あのくらいの地震がきてもつぶれなかったから、今度も大丈夫」なんて思っていると危ないということなんですよ。

もう今すでに緩んでいるとしたら、今度同じような地震がくれば、つぶれるくらいになるわけですから、点検や補強をしておくというのは、ほんとうに大事だと思います。起きてしまってからでは取り返しがつきませんからね。



家具は倒れず

～役立つ転倒防止グッズ～

（東松島市 70代 女性）

ご飯をよそって出して、みそ汁を持ってこようと思って立ち上がったときに「ドン」と来たんですね。アッと思って、とっさに私は食器棚を押さえ、お父さんがあちから、テレビを押さえました。

食器棚は、観音扉*を少し太めのゴムでとめていました。そのゴムが伸びて、中のものが少し飛び出しましたが、たいしたことはありませんでした。

それから、今度は仏壇の花が心配になって走っていったのですが、ふっと庭を見ると、道路に面したうちの岩塀が倒れていました。

たんすとか本棚とかは全部、前々からゴムみたいな転倒防止用のやつを買って、下に入れてあったんです。だからぜんぜん倒れなくて、助かりました。

*観音扉とは、中央から左右に広がって開く形式の扉のこと。



全戸に配った手作りの「井戸マップ」

（石巻市 40代 男性）

あの地震は、たまたま局地的だったですけども、あれが広範囲だったら大変ですよ。被害がこの辺だけだったので、ちょっと車で5分、10分走れば、何でも買ってこられたんですよ。もし宮城県沖地震なんか来れば、宮城県全体がある程度被害を受けるから、大変なことになると思いますね。

何と言っても、最後は水がないのが一番困るんですよ。それで、私たちの防災会では、井戸がどこにあるのかが一目でわかるマップを作って、町内267戸全戸に配布したのです。ラミネート*をかぶせて長持ちするようにして。

ここで肝心なのは、「もしもの場合は、どなた様も来てくださいね」と言っている家だけを地図に載せているところです。それがイヤだという人のところは、井戸がないことになっているわけで、ちゃんと了解をとっているんですよ。

自分は建築事務所をやっているから、製図用のコンピュータソフトを使って地図づくりを手伝いました。少しは役に立てたかなと思います。

*ラミネートとは、ラミネートフィルムという透明なシートのこと。



中学生の「防災学」

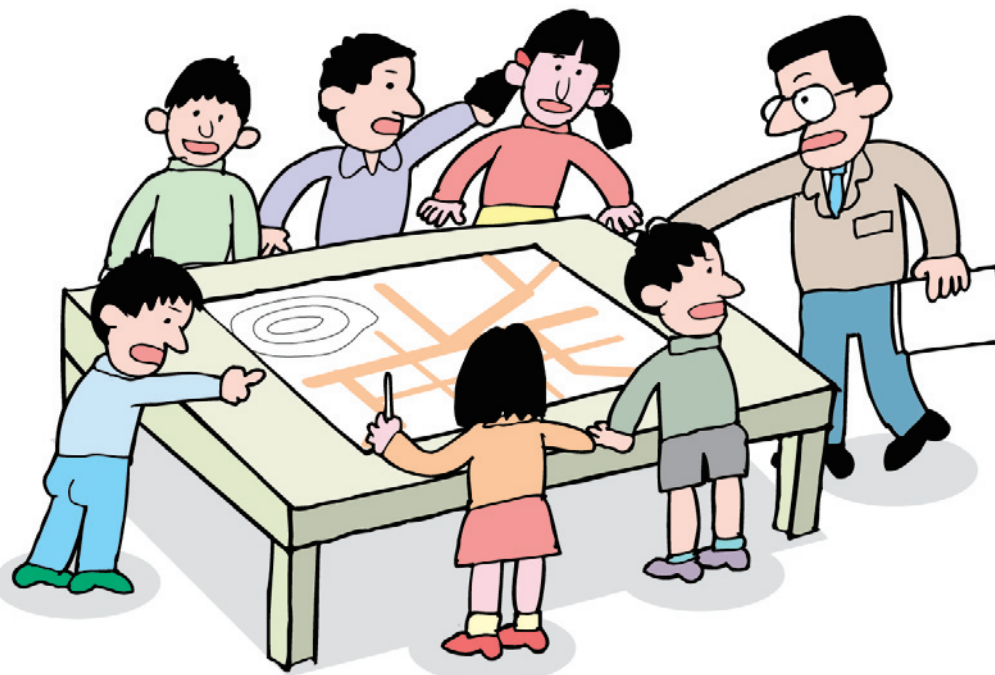
（宮城郡 30代 男性 役場職員）

地震の被害があった後、耐震診断の授業を受けた子どもたちが先生となって地域で講習会をやったんです。参加するおじいちゃん、おばあちゃん世代の人も、孫世代から言われると身にしみるのか、耐震の大切さを実感されたようです。

地場産品を販売する産業祭の中でも、中学生の子供たちが一つのテントを持って、模型やパネルを置いて、お客さんたちに耐震の大切さというのを一生懸命アピールしていました。

これをきっかけに、地元の中学校で「松島防災学」が始まりました。図上訓練をやってみたところ、いろんな意見が出て時間が足りませんでした。来年は図上訓練だけを、半日ぐらいかけてやろうかなと思っています。

これから大人になる中学生たちに防災の正しい知識を身につけてもらうことは、とても大切なことだと思います。



役場の職員にもケアが必要

（宮城郡 50代 女性 行政職員）

しばらくの間、役場の人間は、皆さんの大変だ、困った、どうしようかという話をずっと聞かなければならないんです。何にしても対応をすぐ迫られたり、いろいろな苦情とかを聞いている職員は、大変な思いをしていましたね。

通常の自分の仕事のほかに罹災証明の発行とか家屋調査とかでバタバタしていて、とても休める状態じゃなく、みんなかなり無理をしていたと思います。災害対応は1日2日じゃなく長期にわたったので、疲労はたまる一方でした。

災害対応は長丁場なので、町民だけじゃなくて、職員のケアもしなきゃいけないと思いました。疲労回復の方法について保健師さんが相談にのってくれるとか、そういうことも考えておく必要があると思いました。



スリッパではあぶない家の中

～部屋の中は、どこもワレモノだらけに～

(輪島市 60代 女性)

私の家は「一部損壊」でしたが、うちの中はそこら中の物が倒れて、足の踏み場もないほどでした。

台所の食器棚は扉が開き、中の茶わんやコップがほとんど下に落ちて、床の上に踏み場もないほど散乱していました。

よく「防災グッズとしてスリッパを用意したほうがいい」なんて言いますが、ああいう時は、実際、スリッパなんて、とてもじゃないけど使いものになりませんね。カンタンにはぬげない、底の厚いしっかりした靴をはかないと足を切ってしまうそうだったから、家族みんなで家の中でも長靴やズックをはいていました。



食料や物資はふだんから備蓄してないと

（柏崎市 30代 女性）

ちょうどコンビニに停めて、車のサイドブレーキをかけた瞬間に揺れ始めて、そのうちジェットコースターに乗っているような感じになりました。

直後でしたので、運良くコンビニに寄れて水とかおにぎりとかパンとか、当面必要な食料を買うことができました。コンビニは、お酒とかが割れて床が水浸しで、お酒の臭いが混じったすごい臭いがしました。

家に帰ったら既に停電していました。で、「ああ、ポリタンクを買ってくるのを忘れたね」と言って、慌ててまた買いに出たんですけど、「もう全部売り切れました」と言われてしまいました。

もう水もすぐにとまっちゃうような感じでしたから、ペットボトルの空いたのを一生懸命探して、買ってきた水と冷蔵庫にあったお茶とかで、復旧まで足りるのかなとすごく心配しました。

3年前の新潟県中越地震のときは水もガスも止まらなかったのだから、「何とかなるだろう」と、容器とかも全然そろえていなかったんですね。それが、ガスも、水道も、電気も全部とまってしまったので、「私たちはどうなるんだろう」という感じでした。

やはり、食料や必要な容器などは、ふだんから備蓄しておかないといけないなと思いました。



そんなところで寝ていちゃ、ダメ

～家具の配置に要注意～

（柏崎市 20代 男性）

前の日の夜が仕事で遅くて、その時間までまだ寝ていたんです。最初軽く揺れ出して、「あ、また地震だな。まあ、いつものことだから」と思って、そんなに慌てもしなかったんですけど、すぐにクレーン車か何かが突っ込んで来たんじゃないかと思うほどの揺れになりました。

で、あわてて、パジャマのまま、2階の部屋の窓から1階の屋根の上に飛び出たんです。「上から2階の屋根のかわらが落ちてきたりして、かえって危ないよ」とあとで人に言われたんですけど、その時は夢中でした。

私が寝ていた場所というのは、頭のほうにテレビが置いてあって、足元には冷蔵庫が置いてありました。やっと揺れがおさまって、振り返って自分の部屋の中を見たら、テレビと冷蔵庫が自分の寝ていた場所にドン、ドンと転がっていたのです。

それを見て、「逃げてよかったな」と思うと同時に、「そんなところで寝ていちゃいけないな」と思いました。



おとなりの井戸水もらえて大助かり

～トイレの「ジャー」は、バケツ3杯分～

（柏崎市 30代 男性）

水が出ないのが一番こまりましたね。うちは田舎なので家に井戸があって、これは助かったなと思ったんですけど、地震で井戸水のほうのパイプがやられてしまって、井戸水をくみ出すことができませんでした。で、何日間か、水道が出るまで、おとなりから井戸水をもらってしのぎました。

でも、いつも何となくやっているトイレの「ジャー」は、バケツ3杯も運ばなきゃだめなんですよ。

いつも洗濯に使う風呂の残り湯は、大きな揺れで、ガシャンガシャンと台所まで飛び散っていて、もう3分の1ぐらいしかありませんでした。

何が困ると言ったって、やっぱりトイレの水が一番で、おとなりから井戸の水をいただけたのは、すごくありがたかったです。

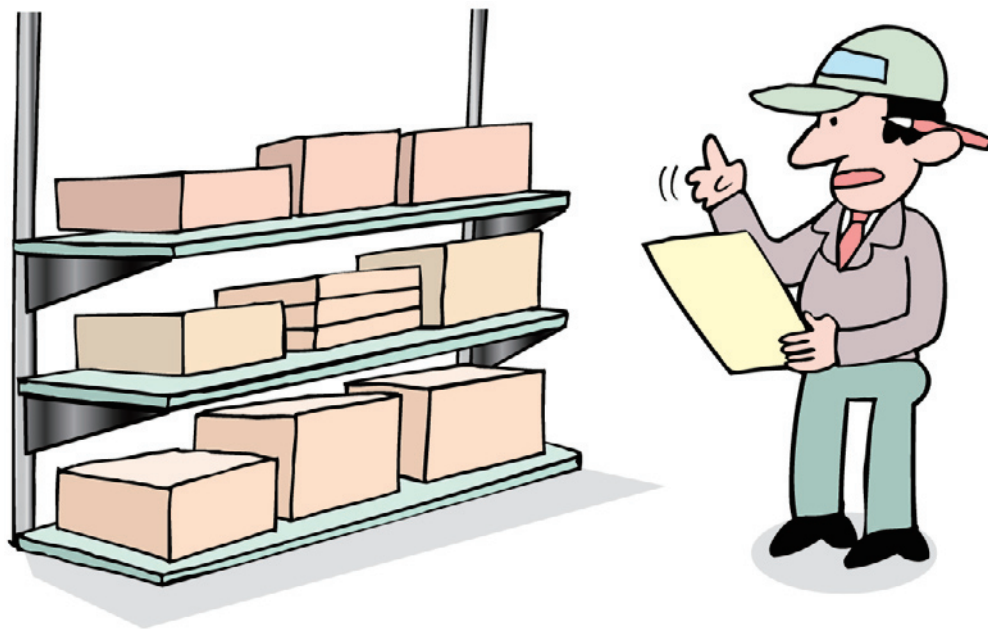


地震の反省を生かし工夫

（柏崎市 40代 男性 会社員）

会社の反省ですが、4階に背の高い棚がいっぱいありましたので、この地震を機に棚の高さを1.5m以下にすることに決めました。

棚は以前から固定していたのですが、地震の衝撃で壁ごと倒れてしまったんです。そこで、地震後の対応としては、柱と壁がかたいもの同士なので、部屋の角の柱と壁の間を柔らかいクッション材みたいなものでカバーしたり、多少揺れても落ちないように天井のボードとボードの間に少し余裕を持たせたような感じにしたりして、新たな工夫をしました。



人に頼る避難より自主避難を！

（徳島市 50代 男性 消防団員）

災害対応にあたっては、避難する側の人の心構えが大事だなと思います。「犬を飼っているので、犬を連れていってもいいか」とか、「寝る布団はあるのか」、「食うものはあるか」とか、いろんなことを言う人もいました。

市営住宅の人たちを避難させに行ったときには、消防団が車で送り迎えしてくれるというような考えでいるから、なかなか自分から動かないんですよ。みんな乗用車を持っているんだから、各戸で誘い合って乗っていったらいいのに、悲しいかな、それができない。何度も車で往復しなければならず、時間もかかって大変でした。

それ以降、台風時などの出水については早目の避難ということで、住民の皆さん方には、早い形で自主的に避難をしてくださいというようなマニュアルづくりをしています。

これからは住民の皆さんが自主的に動く自主防災会のようなシステムをこしらえておく必要があると思いますね。



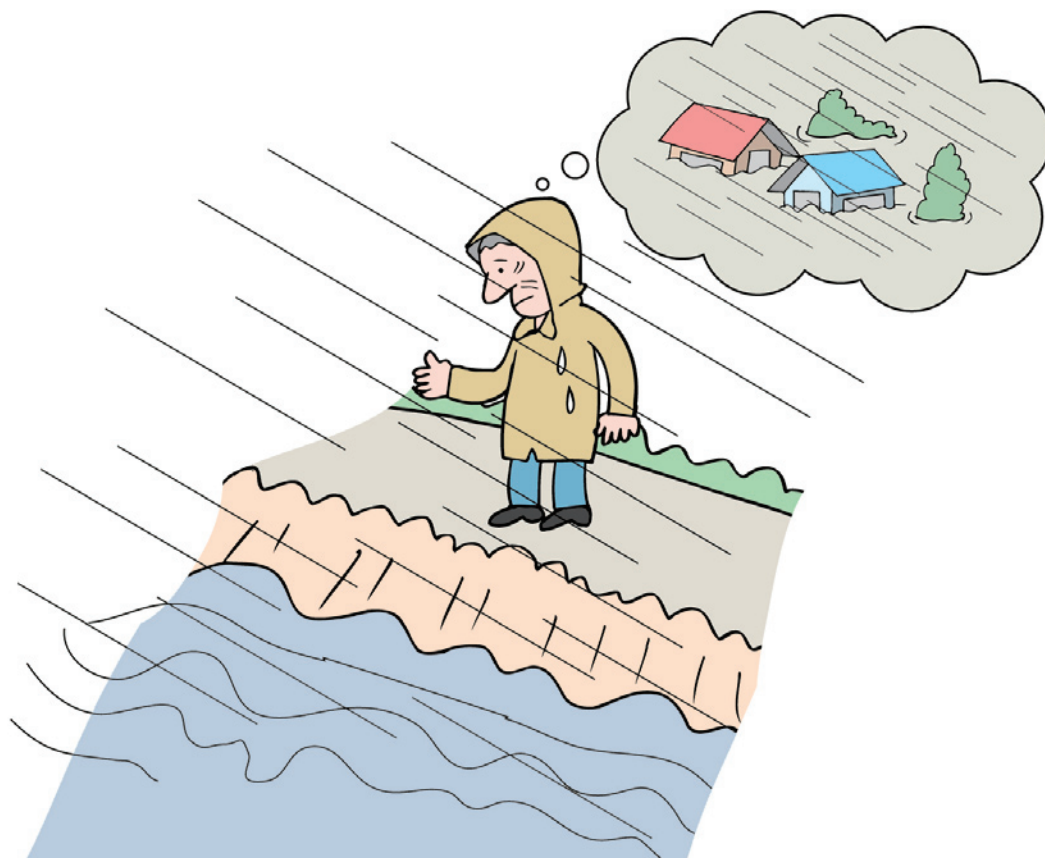
「いままで大丈夫だったから」は危ない

(徳島市 60代 男性)

ずっと昔、我々がちょうど小学校2、3年生のころに、今回と同じ川の堤防が決壊して、軒下まで水が来たんです。そのときに大きな被害を受けたので、地区の人たちの台風に対する備えや考え方は十分にできていたと思いますが、「40年以上たったから、もう心配ない」というのがどこかにあったのではないのでしょうか。

平成16年は台風が特に多かった年で、5回台風が来てもなんとかなっていたものだから、6回目の台風23号の時には、「避難しろ」と言っても、なかなか言うことを聞かなかったということなんですよ。

それで大変な被害を受けたものだから、あれから、台風がくるといえば、みんな、車とかを高いところに上げています。それがいつか、「上げたけど心配なかった」になり、「もう上げなくてもいい」というようになって、危機感がだんだん薄れていかなければいいのですが。今回の水害で、『災害は忘れたころにやってくる』ことを実感しました。



地元の人間話をよく聞いて！

（徳島市 60代 男性 消防団員）

よくテレビでは、冠水している場所でもかまわず車を走らせる光景が映っているけれど、水の中を走ればブレーキが効きませんし、しまいには車がエンストを起こしてしまうんですよ。

あと、僕らが「この道は通行止めですよ」と言っても、「大丈夫。だれにも迷惑をかけないから」と言う。そうすると、我々には止められませんのでね。そのまま進んで行って、そのうち車はストップして、いろんな人に迷惑をかけることになっていきます。

状況がわかっている地元の我々の言うことを聞かなければ、命を落とす確率も高くなりますよね。

やっぱり、外からきた人は、被災地に入ったときには、地元の人話をよく聞いてほしい、協調性をもって行動してほしい、そう思います。



避難の準備をする間、ジャーのごはんをおにぎりに

（福知山市 50代 男性）

当時、避難所の毛布が足らなかったという話をよく耳にしました。だけど、あのとき、週末でお父さんたちも家にいたのに、何で自分らの毛布一つ持っていかなかったのか、行政に対してものを言う前に、「じゃあ、自分はどうだったの？」と思うのです。毛布は2枚あったほうがいいし、3枚あったほうがもっといいわけです。

それから、避難の準備をするときには、ジャーの中のご飯を出しておにぎりを作るとか、冷蔵庫のソーセージを袋に入れるとか、いろいろ考えられますよね。

市のほうが人数分きっちり用意したとしても、それを運んで来られない場合もありますから、常に自己防衛策を頭のすみにおいておくことが必要だと思いますね。

毎年9月に地域の防災訓練があって、避難訓練をやっていますが、うちの自主防災としては、できるだけリアルに、必要な荷物を持って逃げる訓練に参加してくれる人を増やしていきたいと思っています。



2階のトイレから水が噴き出す

～洪水時の外出は危険～

（杉並区 40代 女性）

川が増水すると下水が逆流してトイレから水が噴き上がることがありますが、今回の水害では、2階のトイレから水が噴き出した家もありました。そういう時には、ビニール袋に水を入れてポンとふたをしておけばある程度防げるそうですが、ほんとうにビックリしました。

マンホールの蓋が持ち上げられて水が噴き出している箇所もあったので、あの時道路を流れていた水は汚水が混じっていたはずなんです。なので、子供たちが感染症にならないか心配でしたね。

臭いもきつくて、洗ってもどうにもならないので、あの日履いていた靴は捨てました。夜であまりよく見えなかったから、いろんな危険な漂流物があるところを、平気で膝ぐらいまである水の中をジャブジャブ歩いてたけれど、ずいぶん危ないことをしていたんだなと思います。

マンホールに落ちたり、感染症にかかる心配もあるだけに、洪水時に外出するときには気をつけないといけないですね。



駅前はいつもと同じ、川の氾濫想像できず

～局地的豪雨の恐ろしさを感じた～

（杉並区 30代 男性）

駅の近くで食事をしていました。確かにものすごい降り方でしたが、川が危険な状態になっているなんて全く想像もしていませんでした。

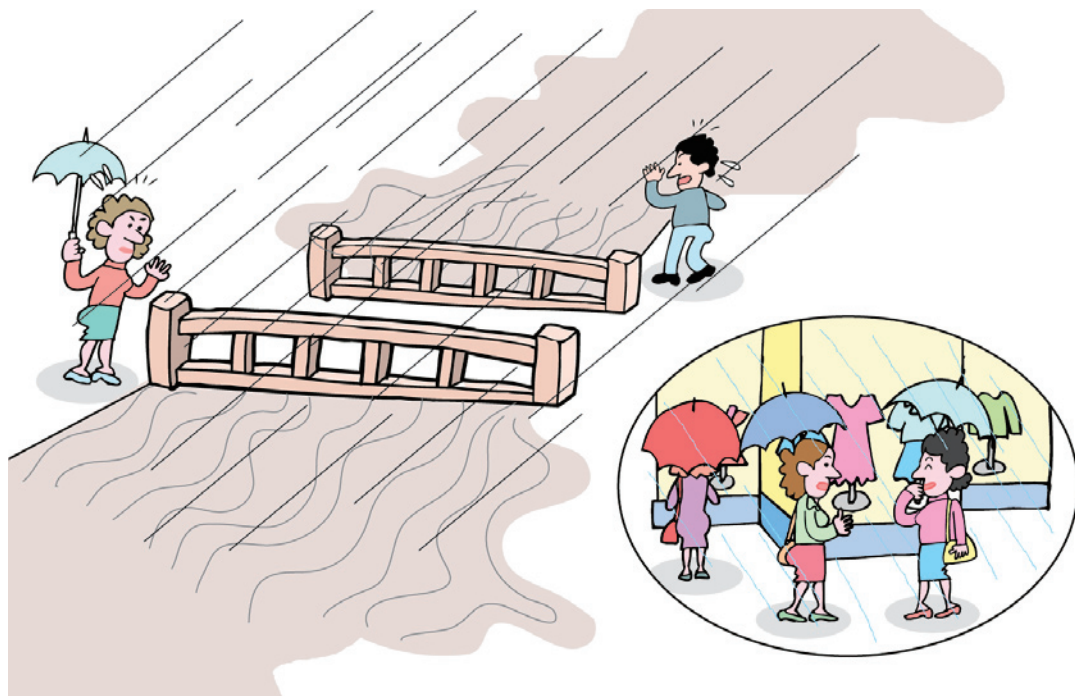
「ちょっとこの雨ひどいね」、「傘がないからもう少し待とう」と店に居続けたのですが、いっこうに止む気配がありません。

「もういいかげんに帰らなくちゃ」と思っていたときに、携帯電話が鳴って、「今、川がすごいことになっている」という連絡が入りました。「どこが？」と。まさか自分たちの街の川があふれ出しているなんて想像もできませんでした。

普通に電車も走っているし、駅のまわりの店には明々と電気がついていて、街の生活のどこかが不自由になった印象は全くありませんでした。

川の近くに住んでいた人たちはすごい大変な思いをしているけれども、ちょっと離れたところでは、「えっ、川があふれていたの？」という、のんきな声が次の日も聞こえました。

都市部特有の局地的豪雨の恐ろしさを思い知らされた気がしました。



お嫁に来てから初めての体験

～ご近所の方の連絡で気づく～

（杉並区 40代 女性）

私の家は、川に一番近い通りに面しています。近くには橋があって、ちょうど土地が低くなっているところです。

主人の母なんかは過去に1回あったかなと申しておりますが、私がお嫁に来てからも何十年になりますが、水害の経験は一切ありませんでした。だから、すごい雨だなと思ってはいても、あそこの川があふれるという認識はまったくなかったんです。

しばらくして、川側にあるお向かいさんから、「今、川があふれて、うちの裏にも水が来ている。どうしよう」という電話がありました。私がずっと学校の役員などをしているので、気をきかせて電話をかけてきてくれたんだと思います。

「えっ？」と初めてそこで窓を開けてみたら、橋の上に水がわんわん来ていたんです。「これはうちもやばいじゃん」と、傘もささずに着のみ着のままで外に飛び出してみると、我が家のガレージにも水が入っていました。

それにしても、私はたまたま学校の役員をして、知らせてくれる人もたくさんいたので、早めに気づけたんですけれども、そうでなかったら大変なことになっていたかもしれません。



足りなかった心構え

～自宅から火砕流*見物～

（島原市 70代 女性）

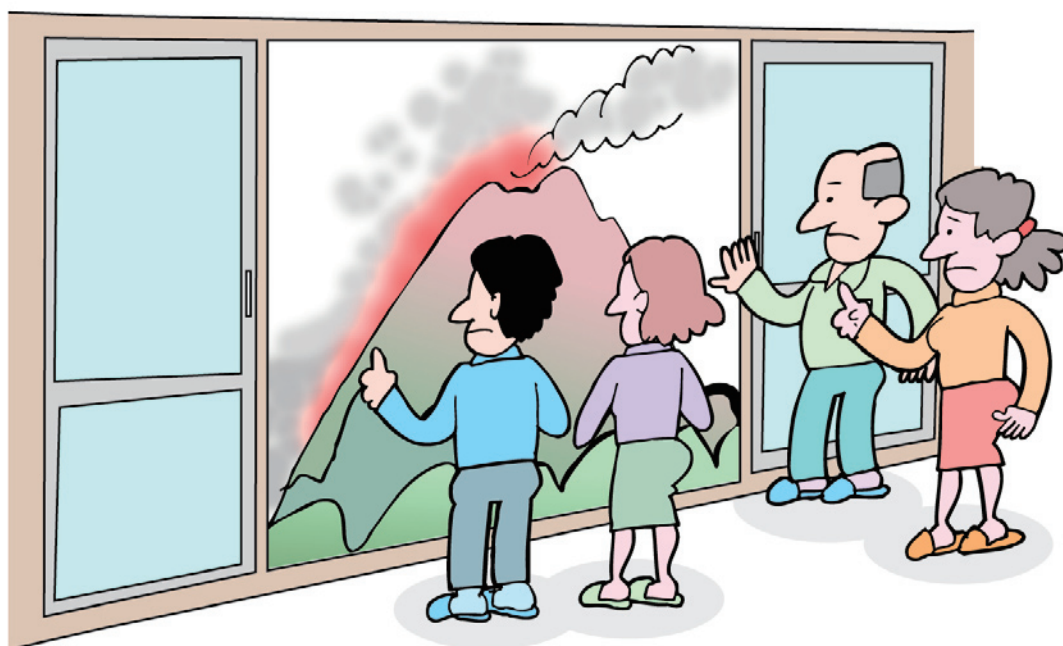
うちの居間の戸を開けると、火砕流が見えるんです。ぱっと赤くなったら、電気を消して、真っ黒い空に真っ赤な明かりが下って行くのを、「今、2回目」なんて言いながら、まるで花火見物でもするように見ていたんです。

親戚なんかも、「ちょっと遊びに来ん？このごろはきれいかよ、うちの茶の間から見えるから」と言ってきてね。

実は、火山の知識のある息子から、「そろそろあぶないから、お母さんたちは逃げる用意をしときなさい」って言われていたんですよ。「家族と東京に行くから、避難するときは長崎の家を使っていいよ」とカギまで送ってよこしてね。

でも、わたしは、「何を言っているの？」と、耳を貸しませんでした。火砕流のほんとうの恐ろしさを、想像することもできなかったのです。

*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。



話し合っておくべきだった避難先

（島原市 50代 男性）

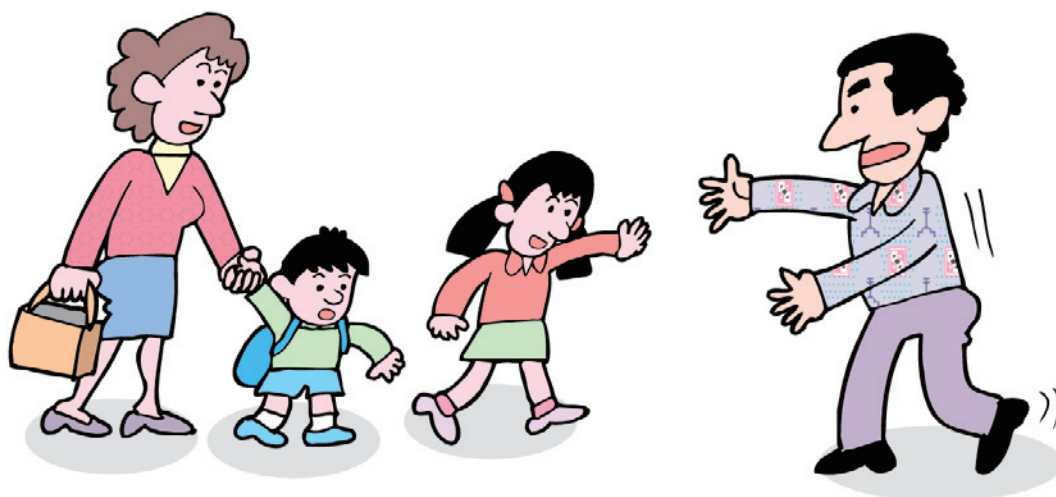
大火砕流*の際、市外にいたので、「家族は大丈夫だろうか」ということで頭がいっぱいでしたね。避難場所に指定されていた近所の中学校の体育館には、避難できないという情報が入ってきましたので、「そしたら避難場所はどこだろう。どこに行けばいいんだろう」って、車を走らせながらずっと考えていました。

で、とりあえず、市の体育館に行ってみたんです。でも、そこにも家族は見あたらなくて、あわてました。子どもは小学生だし、一番下の子はまだ4歳ぐらいでした。どこでどうしているのだろうか、心配でたまりませんでした。

それから、交通規制がしかれていないところに親戚があったので、そこに行ってみると、家族全員がいたわけです。ほんとうにホッとしました。

噴火に限らず何かあったときには、どこに行くことにするよとか、家族で避難経路についてよく話し合っておくべきだなと、そのときつくづく感じましたね。

*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。



必要だった火山の知識

～噴火後からでも学習を～

（長崎市 40代 女性）

記者としてほんとうに悔しいのは、平成3年の6月3日に大火砕流*が発生して、多くの方が犠牲になるまで、私自身、恐いと思ったこともないし、危機感が全然なかったということなんです。

実は、その数日前に、大学の先生に、「記者さん、マスコミが今いるあの場所は、もうほんとうに危ないよ」と言われたんです。そんなにきつい調子ではないけれど、「ほんとうに危ないから、下がりなさい」と。

その「危ない」という言葉を、「そこにいたら死ぬんだ」というふう置きかえて理解できなかったのは、火山に関する基礎的な知識が不足していたからだと思います。平成2年の噴火以来、あれだけ時間があつたのに、私たちは火山のことを勉強していませんでした。

今なら、噴火前の煙があがっているだけの状態であっても、先生の忠告に耳をかたむけることができる、そんな気がします。

*火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。



自主防災会にはお年寄りや子どもも参加

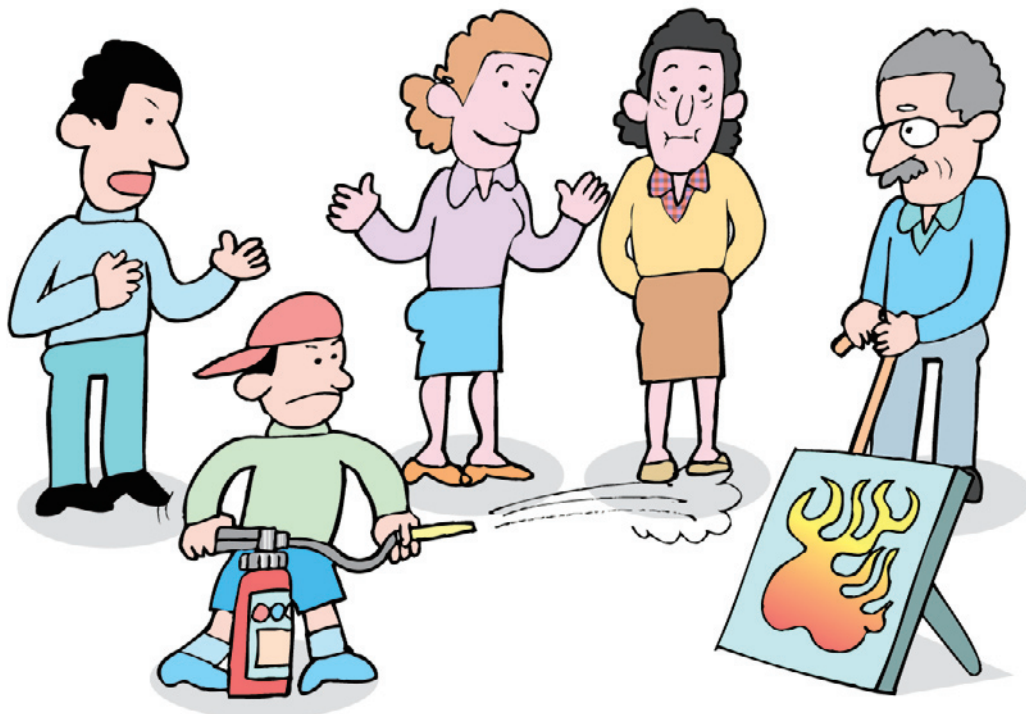
（東松島市 70代 男性）

今回はさいわい人身事故がなく、まだ救われましたが、災害が起きたときにはここに集まるとかいうものは、きちんと前もって決めておいて、それをみんなが守らなくちゃいけないと思いました。

例えば、災害時に市のほうから食料を持ってきてくれたときに、めいめいに届けてもらわねにはいかないわけで、やっぱり、自主防災会をたちあげておいて、何か起きたときに、みんなの考えが同じで、同じ場所に寄れるようにしておく必要があるのです。

最近自主防災会が増えていて、わたしたちのところも、今までの町内会をベースに自主防災会としての活動をはじめています。定期的にみんなと話し合ったり、おじいさんやおばあさん、子供たちにも防災訓練に出てもらったりしています。

この間も、防災訓練のときに、4年生ぐらいの子供に消火器を実際に使わせて、「ああ、オレでもできるんだ」ってやっているわけですけど、そういうふうなこともやってみればね、何かのときに役に立つ場合もあると思います。



帰宅訓練のおかげで足に自信

（杉並区 70代 女性）

何でも体験できるのはいいチャンスだからと、帰宅困難者の訓練に毎年参加しています。

先日、電車に乗っている時に、人身事故で電車がストップしてしまったんですが、帰宅訓練で新宿から自宅まで歩いたことがあるという自信があったので、さっさと一番に歩いて帰ったんです。

訓練で体験していなかったら、そうはいかなかったと思います。途中ではぐれてしまった主人は、新宿へ戻って電車を待たらしいんですけど、私より1時間ぐらい遅れて帰ってきました。

ただ、私もまさかこんな状況になるとは思っていなくて、ヒールのある靴を履いていたから、かなりきつかったですね。若い人たちには、「会社のロッカーには必ず低い靴を置いておきなさい」って言いたいです。



薬持ち出せず、避難所で大弱り

～自分の薬は肌身はなさず～

(輪島市 60代 女性)

年寄りの方がたくさんおるでしょう。避難所に行って感じたのは、お年寄りはみんな常にお薬を飲んでいるから、どんなときも自分の薬は肌身はなさず持っているといけなということでした。

夜中の2時ごろ、おばあさんが避難所のすみでちょこんと座っていたので、わけを聞くと、「リュウマチで痛くて眠られん」と言うのです。で、連絡すると、すぐにお医者さんが看護婦さんと一緒に来てくれたんです。それにはほんとうに頭が下がりましたね。

先生が「これを飲んで」と痛み止めの薬を渡していると、それを見て「私にも薬をください」と言う人がいっぱいいました。引き出しに置いていたから、とっさに持ってこれなかったという人が多かったですね。だから、前もって何かに分けて置いて、いつでも持って逃げられるようにしておかなければいけないとつくづく思いました。



再現映像で震災の光景一気に思い出す

（神戸市 20代 女性 学生）

地震から数日後、小学1年生だった私は、おじの家を見に行くという父についていきました。電車は止まったままでしたから、「線路が一番広くて安全」ということで、途中まで線路の上を歩いて行きました。普段は入れない線路の上を父と手をつないで歩いたので、安心なのと楽しい気持ちだったことを覚えています。被災後は、いつもは仕事や大学で帰ってこない父親や兄と、毎晩のようにトランプをしたりして、私にとってはある意味で望んでいた日常でした。

その私が、神戸の「人と防災未来センター」で震災直後の再現映像を見たときに、2駅分の線路を父と歩きながら見た一番生々しい光景を一気に思い出し、気を失って倒れてしまったんです。

行く手の向こうには火の手が見えていて、おじの家にたどりつくと、周りの家はほとんど焼け落ちてガレキ。人々が道路で固まって暖をとったり、公園のテントの横でたき火をしていたりで、いつもならないはずのおとなたちが、そんな所に集まっているというのがすごく衝撃的でした。6千人以上の方が亡くなったという現実がわかる高校生になって、いきなり思い出してしまったので、「自分は何ていうものを見たんだろう」と。

それだけの方が亡くなった中で、自分が生きのびて、これから何をしたらいいのかなと考え、大学のサークルなどで震災の経験を伝える活動に関わることになりました。



2階で寝ていて助かった

～逃げ出す時に切った足、入浴時に気づく～

（淡路市 60代 女性）

たまたま私たちは2階で寝ていたから助かったけど、下で寝ていたら完全にやられていたと思います。1階の天井が完全に落ちて、2階部分が1階のようになっていましたから。

主人が、枕元でライターをつけてくれてね。ライターで照らしながら、「入り口が開いとるから、先に出ろ」って言ったけど、2階の窓の棧やガラスが全部飛んでしまって、入り口に見えたのだろーと思います。

ちょうど私たちの寝ている枕元にコタツがあって、こっち側にあんま器があって、反対側に大きなテレビ。そのテレビとこたつとあんま器に天井が支えられていたので、私は主人が引っ張り出してくれたガウンをパジャマの上にはおり、スリッパをはいて、はって出ました。背の高いタンスは山側に倒れてくれたので、運良く、下敷きにならずにすみしました。

その夜、難を逃れた妹の家でお風呂に入ろうとしたら、服がくっついて脱げないのです。

おかしいなと思ってみると、太もものあたりが切れて血が固まっていた。地震で落ちた人形ケースのガラスがふとんに突き刺さり、中の羽毛が空中に舞い上がって前が良く見えないほどでしたので、それで切ったのでしょう。割れたガラスは本当に怖いものだと思います。



まず老人会の会長さんをひっぱり出し

～地域の役割のある人から声かけ～

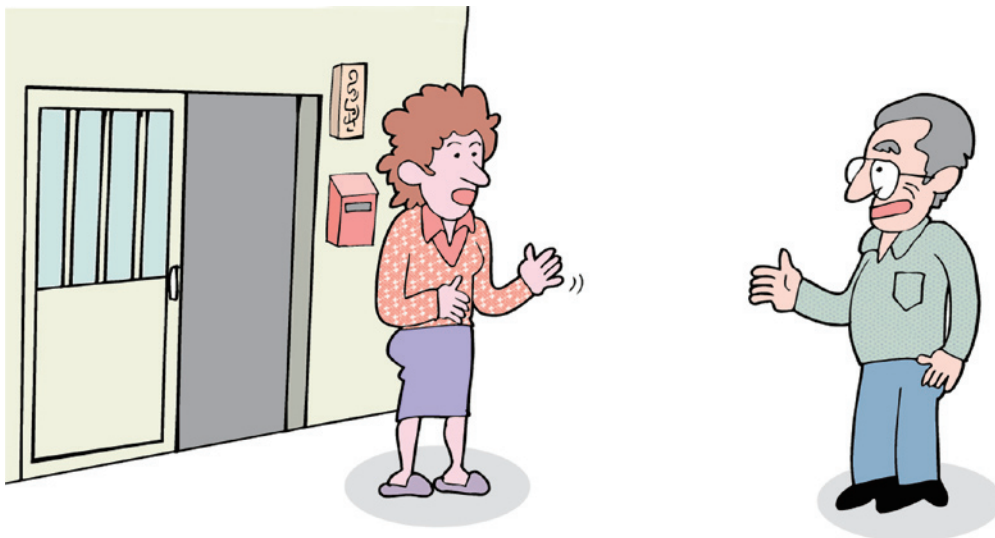
（神戸市 60代 男性）

私は自治会長だったので、地震の前の晩は夜中の1時半過ぎまで、なれない手つきでワープロでまちづくりに関する資料づくりをしていました。

ちょうど寝入りばなに、グラグラと大きな地震が起きたのです。表に出ると、となり町の空に真っ赤な火の手があがっていたので、「これはあかん」と思いました。そのあたりには、昔ながらのアーケードにつらなる市場があったので、そこに火が入ったら、アーケードに火が走ってすぐに我々の町に来るだろうと思ったのです。

自治会長の私だけでは、どうすることもできないと思って、地域の老人会の会長さんや、婦人会の会長さんとかに声をかけました。その人たちがそれぞれ自分の担当で動いてくれるだろうと思って声をかけたのですが、期待どおりしっかり行動されていました。

自分は何度か火災を経験し、火の怖さを十分知っていたので、「早く、火に近いところから助け出さなければ」と思っていました。埋もれている人の掌握にと、町を二回りしたところには、すぐそこに火が来ていました。ほんとうに火の勢いは速かったんです。



知らなかった土壁の壊し方

（神戸市 50代 男性）

地震の後は、近所のみんなと力をあわせて、こわれた家の下敷きになった人たちの救出にとりかかりました。

木造家屋のほとんどが土壁でした。土壁っていうのは困ったもので、なかなかこわれなんですよ。バールで突っいたらバールが土に突き刺さってしまうし、ハンマーでたたくとハンマーの頭の形だけが凹む（へこむ）だけなのです。

だから土を削っていくしかないし、少しずつ削りながら壁をくずしていきました。そうすると、今度は、竹でできた下地が出てくる。この竹っていうのが、これまたくせもので、のこぎりでもなかなか切れない。しかたがないから、人が通れるぐらいにその竹の編み目を広げて、人をひっぱり出したのです。

カケヤ*で一番上の部分をバーンとたたけば、バンと壁が外れることはあとから教えてもらいましたが、その時はみんな知らなくて。竹の下地には、ほんとうに悩まされました。

*カケヤ（掛矢）：くいを打ち込むときに用いる大型の木づち。



知っていれば良かった救急救命法

（神戸市 70代 男性）

ほんとうにこれを知っとけば良かったというのはね、今で言う救急法の知識ですね。

当時17歳の女の子が助け出されて、50代後半に近いおばちゃんが一生懸命人工呼吸をやっていて、私も手伝って、その子が一度は息を吹き返したんです。

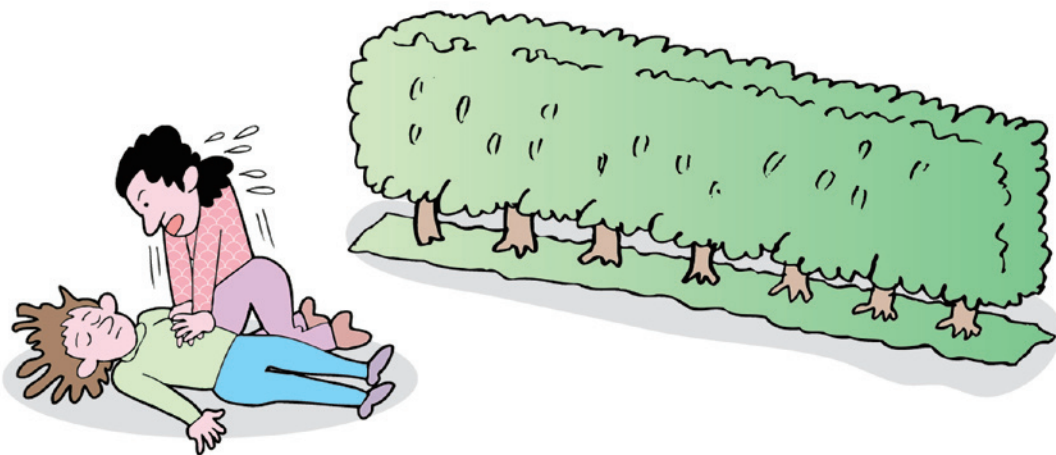
そこで私は、「息吹き返したからこれで大丈夫や」と思い、「あと、お願いします」と言ってその場を離れました。とにかく、他にも助けなければならない人がたくさんあったから。

でも、後で、その子が数時間後に窒息で亡くなってしまったということを知りました。

救急法の「気道確保」とかを知っていたら、口あけて、口の中に詰まっている土を取り出してジュースでも探してきて口をゆすいであげていたら、あの子は助かったかもしれないという思いがずっと残っています。

寝ていた場所がわかっていたら、土壁の土ぼこりを吸い込んでいるかもしれないと気づいたのかもしれないんだけど、どんな状況で助けられたのかも聞かされていませんでしたし。

実際にそういう状況で助かった子もいたようですからね。救急法の知識をもっとちゃんと身につけていれば良かったと、今でも悔やんでいます。



ご近所で「あげます」「いります」

～玄関前にボードで貼りだし～

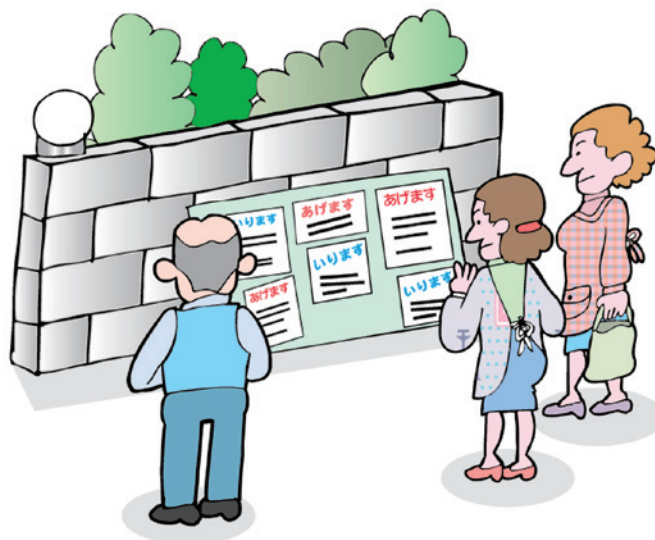
（神戸市 60代 男性）

地震後、家の中を片づけるのに大変だった時期に、近所の十数家族で避難所になった近くの小学校に、交代でみんなの朝とお昼の菓子パンを取りに行っていました。初めから決めていたわけじゃなくて、奥さん方が「今日は私が手伝います」、「じゃ、次の日は私が手伝います」って自主的に言ってくれたのが始まりでした。

しばらくたってから、家の前に厚いベニヤ板を出して「こんなものが役立つよ」とか、「こんなものが余っているから使わない?」とか書いた紙を張り出すようにしたら、お互いにないものをスムーズに供給しあうことができました。

うちは、きれいな水の入ったポリタンクを外に出しておいたのですが、どこからか情報を聞いて、「うちのおばあちゃんが薬飲む水がないんですけど、いただいてもいいですか」とか言って来られるんです。煙やらで、のどがむせたりするとやっぱり水が欲しくなるでしょ、みなさん寄ってきて、最後は犬までできましたよ。

私は、引っ越してきて1年2カ月ぐらいで、近所とは顔見知りになっていましたが、もうちょっと広い範囲に住む、初めて家の名前も知った人たちと一緒に力を合わせることができて、とてもうれしかったです。



出勤か、救助か、悩む

～誰かがジャッキ、12人助ける～

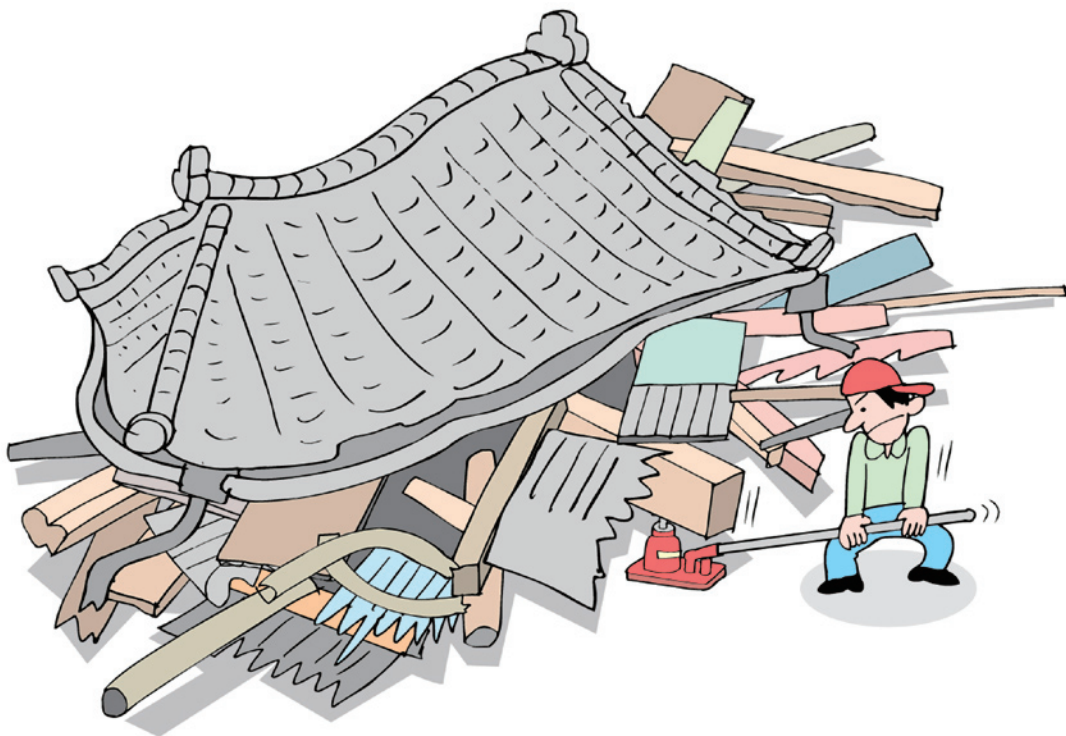
（神戸市 60代 男性 元市職員）

私の家はつぶれなかったけれども、周りはほとんどつぶれました。立場を考え、出勤すべきか迷ったあげく、その日は夜まで救助活動を続け、12人助けました。

家の下敷きになった人を助けたのですが、その助け方が難しいんですよ。上からいったら人の重みがかかって危険なので、下からもぐり込んで助けるんです。木造の建物などは、梁にジャッキをかませたりしてね。

最初、大きなジャッキでやろうとしたけど、重たくて扱えない。そのうち、近所の誰かが小さいジャッキを持ってきてくれたので、それを使って、ちょっとずつ持ち上げていきました。車のジャッキも使いましたが安定が悪くて、案外使いづらかったんです。

で、頭が入るぐらいの大きさまでになったら、そこからもぐっていくのですが、余震があるから、これがかなり怖いんです。私は田舎の百姓の育ちだったから、できたけど、町の人には難しいやろうね。



パジャマに作業着で部下出勤

～思わず注意し、被災度の違い知る～

（神戸市 60代 男性 元市職員）

当時、役所の職員は、自分の家がつぶれたとかというようなことは、あまり言わなかったですね。市民が大変な状況でしたので、自分のことなど言い出せなかったのだと思います。

ある日、部下の職員がパジャマの上に作業着を着て、長靴をはいてずっと役所に泊まっていることに気づき、「おまえ、家に帰れや」言うたんです。

すると、「実は、家がつぶれてしまって」という返事。「お母さんを親類に預けて、パジャマのまま役所に出てきました。だから、帰るところがないんです」ということでね。

地震後すでに1週間ぐらい経ったころでしたね。私の家はかろうじて倒れなかったものですから、冬の時期に、パジャマに作業着ではさぞかし寒かったろうと思いますが、すぐには気づいてあげられませんでした。



のんびり聞こえた「避難勧告」

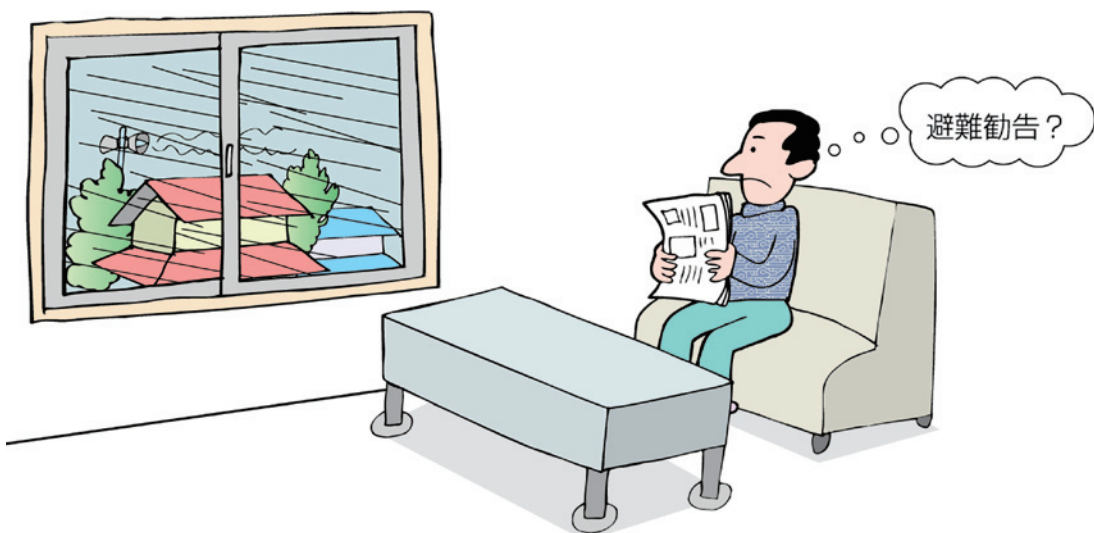
～緊迫感なかった防災無線～

（豊岡市 50代 男性）

夜になって防災無線が入ったんですが、何とものんびりした感じなんですよね。おとしよりのためにゆっくりしゃべるということもあったのかもしれませんが、何だか避難命令という緊急性とはかけ離れているように思いました。

もう家の玄関のところまで水が来てしまっているのに、「避難勧告が出ました」とペラッと緊迫感のない声で言っているだけなんです。もう少し大きい声で、大変な状況になっているということが伝わってくるような調子で言ってもらえば良いのにと思いました。

情報の伝達にもスピード感がほしいですね。昔は地区の消防団などを介して、近くの川の水位が今どのくらいになっているというような情報が、すぐに家々に伝わって来たものです。防災無線のリアリティーのなさもそうですが、もうちょっと地域の情報がすぐに伝わる仕組みが必要ですね。



急きょ地域に避難所開設

～訓練どおりに事は運ばず～

（豊岡市 60代 男性）

午後4時半ごろでしたか、地区のほうから、県の銘木になっている神社の柳の木が折れて通学路を塞いでいるという電話をもらって、すぐ会社から戻りました。

で、区の人たちと、どうやってその木を撤去しようかと相談しているうちに、雨がはげしく降ってきました。それでも、過去20年、同じようなことがあっても地区のところまでは水が来なかったという気持ちがみんなの中にもありました。

夜の7時ごろになって、防災無線で、避難所に指定されている高校に避難するよという連絡が入りましたが、地区の若い奥さんから「小さな子どもを連れて遠くの高校までいけません」と電話がかかってきたので、急きょ、地区の会館を避難所にしようということに決めました。

ひとり暮らしのおとしよりとかもいますし、そのころ膝ぐらいまで水が来ていましたので、早めに避難するように呼びかけました。結局、会館には100人ぐらいが集まりました。

実は、被災した年の5月に県の防災訓練があって、私を含めて区から15名が参加していたんです。それと全く同じことをやったという感じですが、実際にやってみると、いろいろ大変で、訓練どおりには行かなかったです。



製品はすべて産業廃棄物

～10トン車で6回捨てて操業再開～

（豊岡市 50代 男性）

水に浸かった製品は売り物になりませんから、もうすべて産業廃棄物*になってしまいました。被災している社員も多く、道路が冠水でところどころ通れない状況になっていて、集まりにくい状況でしたが、あくる日には社員8名全員が集まってくれました。

会社が操業する前に、まず片づけをしなきゃいけない。片づけるということは、すなわち捨てるということなんですね。製品をすべて捨ててしまわなきゃいけないという非情さを味わいました。

水害に備えるには、製品を事前に他の場所に移すことが良いと思いますが、スペースの問題があってなかなか難しいものがあります。実際、前の日に一部の製品を高いところに上げるように指示はしていたのですが、ごくごく一部でした。ただ、マシンとかの生産設備やコンピューター関係が無事だったことは不幸中の幸いでした。

指定された廃棄場所まで、少なくとも10トン車で6回は捨てに行きましたね。結局、操業まで約2週間かかりましたが、取引先なども手伝いに来てくれて、人の温かみというか、親切さを、つくづくありがたいなと思いました。

*産業廃棄物とは、産業活動の結果、排出されてくる廃棄物のこと。



水没のコンバインまで保険でカバー

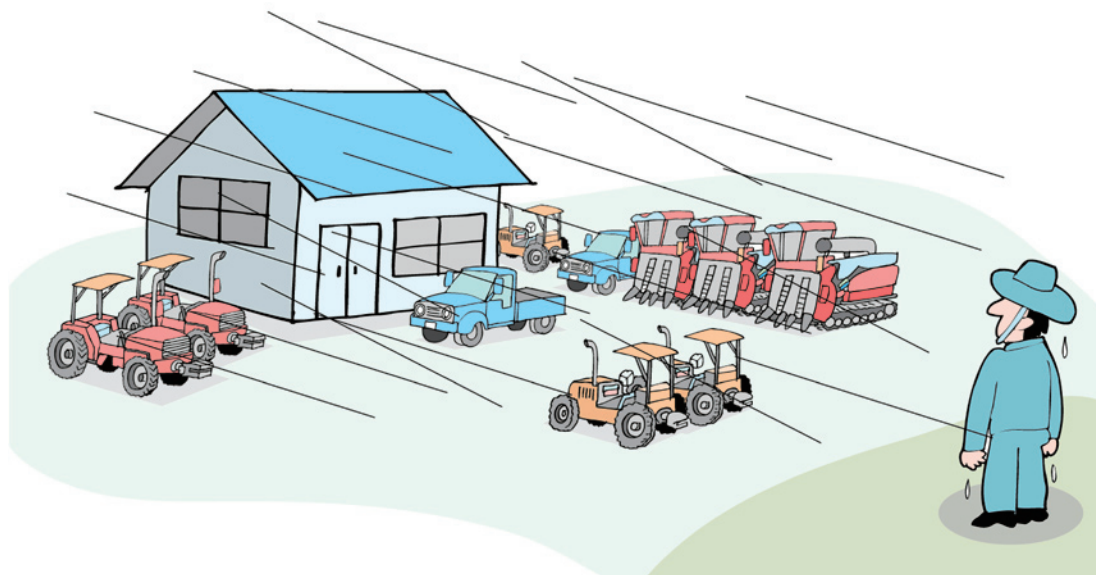
（豊岡市 70代 男性）

そのあたりは昔からよく水がつくところと承知していましたが、うちの事務所は、田んぼから4メートルぐらい高い位置に建てていました。すぐ横に流れている川の堤防よりも高いので、堤防が切れても大丈夫だと思っていたのです。

けれど、夜の9時ごろになってますます雨と風が強くなり、心配になって会社のようすを見に出かけました。その頃には、円山川本流につながる川の水が、下流側から上流にもすごい勢いで逆流していて、まるで津波のように立ち上がっていたのです。さすがに、「これはちょっとおかしいな」と。

はっきり覚えてはいませんが、堤防が切れたのは10時半ごろだったと思います。それからは考えられないほどの速さで水が押し寄せてきました。会社には、トラクターとか、2トン車とか、軽トラックとかが、いっぱい置いてあったんですわ。それも5台や6台じゃないんですよ。

ただ、運の良いことに、その年の4月に、保険を火災保険から総合保険に全部切りかえていたんですよ。農協さんから「新しい保険が出たから、どう？」って言われてね。すぐにはそのことに気がつかなかったぐらい混乱していましたが、水没したコンバインなんかもすべて保険でカバーできて、ほんとうに助かりました。



しなかった台風前の畳上げ

～ポンプ場でき、備えおこたる～

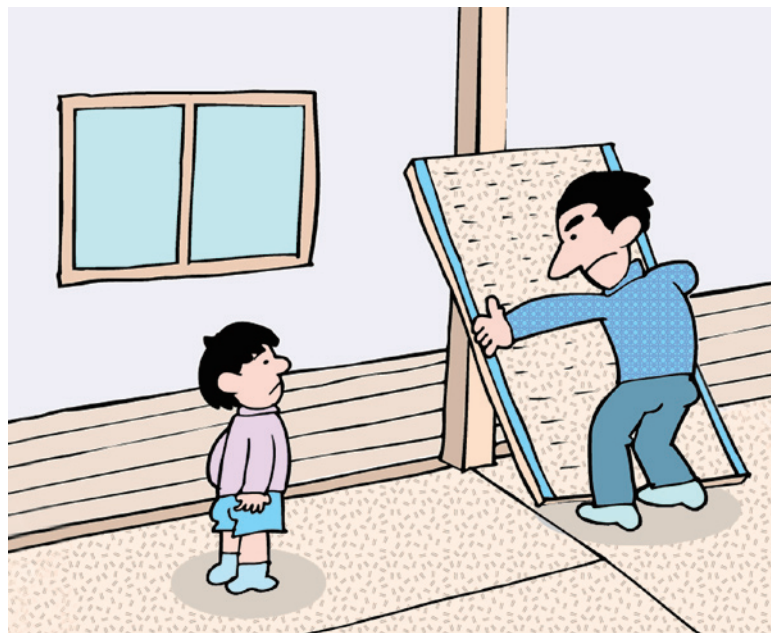
（宮崎市 60代 男性）

我々は子どものころから、台風がきたら何をしなくちゃいけないかというのは、分かっていたんです。この土地はまわりに比べて低いから、「雨が降ったら大変だな」という思いは、自然と体の中にしみついていました。

昔は、農業をしている家は、だいたいが食料の米や麦などを床下に置いていて、どこの家も台風がくるとなったら、そういうものを家の中に移動して、畳はぬれないように柱に立てかける、いわば「畳上げ」をしたものです。そういう準備に必要な角材や丈夫なヒモなどは、私の家にもありました。

けれども、10年ぐらい前に、ここに雨水ポンプ場という排水施設ができてからは、「もう水は上がらないよ」という雰囲気になっていたんです。ところが今回は、「未曾有*の雨」だから、どうにもならなかったんですね。私も、水が出そうかなんて、いっさい気にしていませんでした。ちょっと油断があったのかなと反省しています。

*未曾有(みぞう)とは、昔から今までに、まだ一度もないこと。



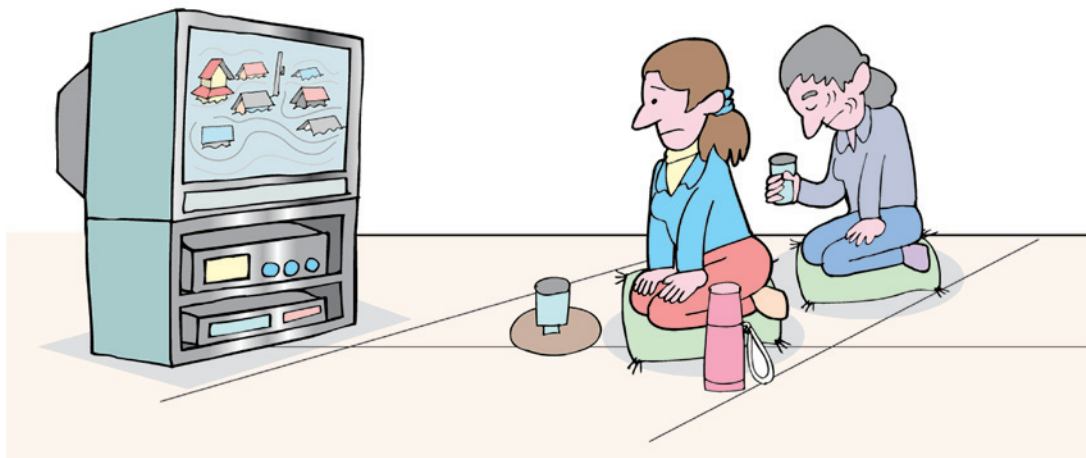
避難所のテレビで発見、泥水に浸かるわが家

（宮崎市 20代 女性）

私が住んでいたところは、今まで水に浸かったことがなかったので、水害に遭うということを全く想定していませんでした。朝の5時ごろに消防団の人たちが「避難してください」と言って回っていることに家族が気づいて、家族全員、布団から出て服を着替えて、すぐに避難を始めました。

避難所になっている小学校に行く途中では、橋を渡らなければなりません。うちは足腰の悪いおばあちゃんを連れていたので、傘もさせないようなすごい雨風の中を逃げること自体、怖かったです。

私はおばあちゃんと一緒にいたので、小学校の畳の部屋で過ごさせてもらっていたのですが、その部屋のテレビでニュースを見てみると、川が氾濫して、あたり一面、海のようになった町のように流れました。その中に自分の家を見つけたときには、ショックで言葉もありませんでした。



おとなりさんがいない！

～腰まで浸かっておとしよりの救出～

（宮崎市 60代 男性）

夜になって、民生委員さんがおとなりに住んでいる人が来ていないことに気がつき、「こりゃ、大変だ」ということになりました。あの頃は自治会でも、安否をチェックする役目の人なんて決めていなかったものですから。

で、市役所の方がおられたから、こういう人がまだ来ていないので、今から迎えに行きたいんですと言うたら、「もう今日は遅いから明日にしてください」と言われました。

でも、いてもたってもいられず、1人じゃ危ないからと、仲間と2人で様子を見に行きました。堤防ぞいに歩いて、その家にたどり着き、戸をたたくと、むこうから声がしたんです。「おい、中にいるぞ！」ということですね。

こちら腰まで水につかっている状況だから、水圧でドアが開かないんですよ。ようやくドアをたたき壊すと、家の中の物がこっちにブワーッと流れ出てきました。

85歳と83歳の老夫婦でしたから、二人とも部屋の中で、立ったまま、声も出さずに震えておられました。助けることができ、ほんとうに良かったなと思いました。



命綱つけて濁流の中を泳いだ

～おとしより救助も命がけ～

（延岡市 30代 男性）

僕は社会福祉協議会の職員ですが、当時消防団員もやっていましたので、救助活動のために現場に行きました。そこはほんとうにすごい展開になっていて、「役場からの命令じゃないと動かない」と言っていたおじいちゃん、おばあちゃんが家に取り残されている状況でした。

水の流れが速くて、ボートをこいだら自分たちが流されちゃうぐらいなんです。で、僕は泳ぎがかなり得意なものですから、命綱をつけ、ボートのロープをもって、濁流の中を泳いで助けに行きました。なんとか無事に泳ぎきりましたが、普通の人には、絶対にしてはいけないと思います。危険ですからね。

「とにかく乗りなさい」と言って、二人をボートに乗せました。おじいちゃん達は、とりあえず必要なものだけはビニール袋に入れていましたが、あとは着の身着のまま。雨が激しくて傘をさせるような状態ではなかったのですが、ずぶぬれになりながらボートの上で不安そうにしていました。

近所の人が避難するように言っても、かたくなに「もう、ここから動きたくない」という人がよくいますが、やっぱり避難は早めにしないとイケませんね。



車の通行で二次災害

～水圧でガラス割れ～

（諏訪市 60代 女性）

水害のときには、ものめずらしさから見にくる人もいますが、4WDの車がありますよね、あれは水の中でもよく走れるものですから、すごい勢いで通って行くことがありました。ガラス戸が水に浸かった家では、車が通ったときに起こる波の水圧でガラスがみんな割れちゃったそうです。とんだ二次災害で、余計な出費になるものですから、「このやろう」と思うんですが、運転している人は気がつかずに行ってしまうんです。

うちも玄関ぎりぎりまで水がきて、「もうこれ以上来ないで」というときに車が通って、その波で床上浸水してしまいました。ほんとうに、車にはきてもらいたくなかったです。

でも、車で近づいちゃいけないというのは、地元の人じゃないとわからないから、交通規制とかをきちんとやってもらわないとなと思いました。



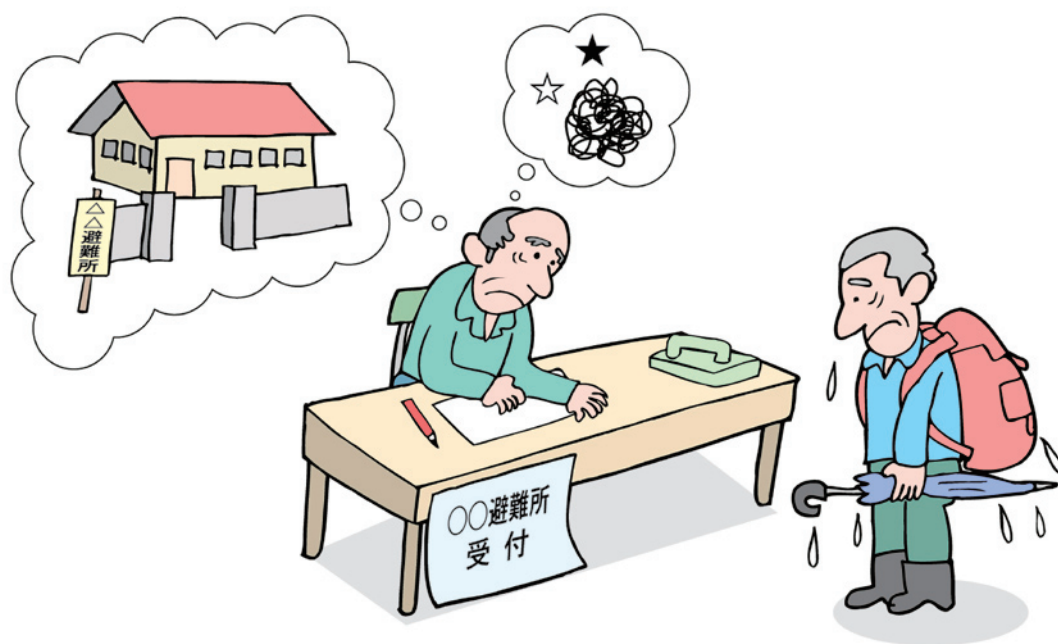
避難者受け入れで大混乱

（諏訪市 50代 男性）

私は、ちょうどこの水害のときに公民館長をやっていたのですが、腰あたりまで水が来ていましたから、ボートに乗って、市の炊き出しやら、ホテルの炊き出しやらの対応に夜中まで町内をぐるぐる回っていました。トイレに行けないおとしよりがいたものですから、ボートへ乗せて、ホテルまで送って、トイレを済ませて送りとどけるというのもやっていました。

町内をあちこち回っていると、近くの避難所へ行ったおとしよりで、割り当て地域が違うからだめだと言われた人がいたので、そこまで濡れて一生懸命としよりが行っているのに、また腰までつかって別の避難所に行くなんて、そんなばかなという事で、市のほうに抗議しました。

今までこんな大きな災害がなかったものですから、みんな混乱していて、市の職員の人たちも、疲れ切っていたんですね。そういった中で判断力も落ちてくるから、そこまで気が回らなかったと思うんですが、ちゃんとしたマニュアルとか、防災関係の教育をこれからしていけないといけないなと感じました。



出先事業所に伝わらなかった本社の被害状況

～なぜ休みと問い合わせ相次ぐ～

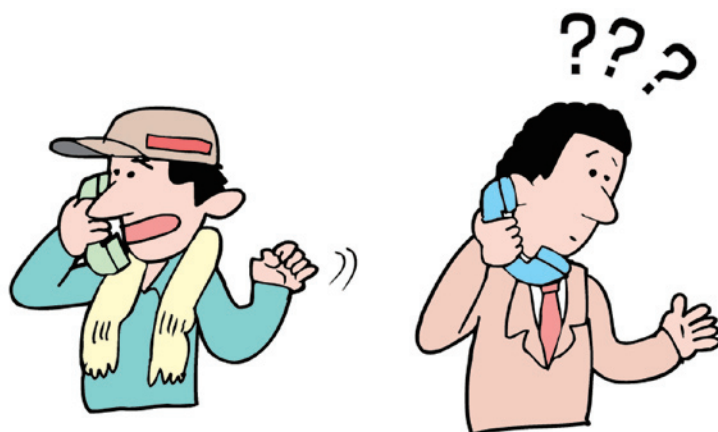
（諏訪市 50代 男性）

わが社は、県内にいくつも事業所をもっているのですが、それぞれ気象条件が違いますね。本社の周辺は被害が大きかったので、臨時休業の判断をしたのですが、それほど被害のない地域の事業所からは、「なんで臨時休業するんだ」と、こちらの状況を理解してもらうのに時間がかかりました。

東京の人は、通常通り勤務していて、基本的に仕事中はテレビなんか見ませんから、「何だ、きょう珍しいな、だれも出ないのか」と思うくらいで、ずっと電話を鳴らしていたそうです。

「今、こういう状況です」と、本社の状況、周辺の国道、JRの状況をこと細かく電話で説明するしかなくて、一番苦労しました。

後から思えば、防災本部の組織の中には、広報とか記録のために被害写真を撮る担当がいますので、写真とかそういった情報を流していたら、早かったのになと思います。

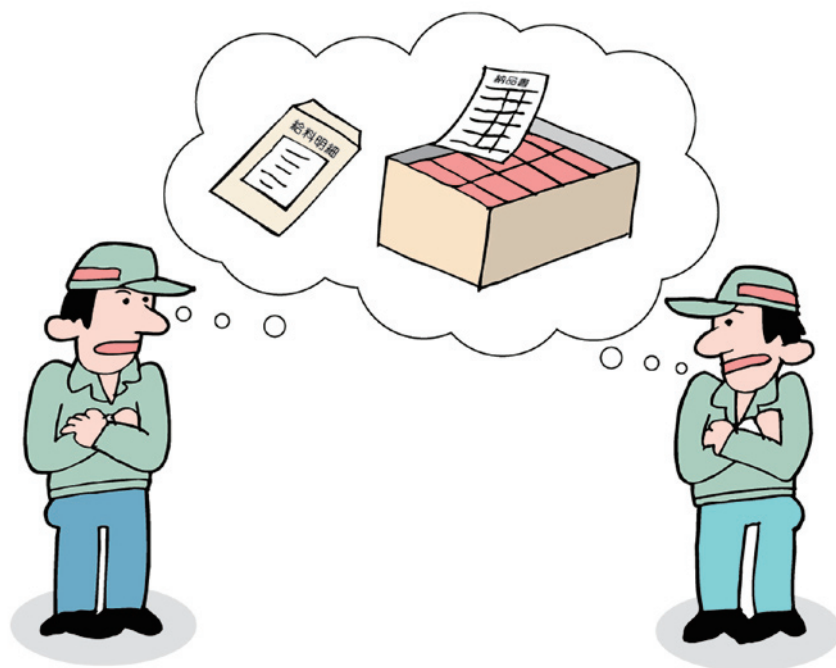


「まだまだ長雨」と最悪のシナリオを考える

（諏訪市 50代 男性）

水がついてから3日目が金曜日で、雨は小康状態になっていたんですけども、また週末にかけて大雨になりそうだというような天気予報が出ていました。だから、会社の危機管理委員会では、万が一、土曜日、日曜日にまた大雨が降って、月曜日に会社に出てこれないようなときには、月末の従業員の給与の支払いですとか、業務の締め切りですとか、業務上必要なことをどうするかを、財務とか、人事とか、労務のメンバーと打ち合わせておきました。幸いにも、週末は大雨にならず、それ以降、大きな被害がなかったのが、よかったのですが。

今回は、たまたま本社や危機管理委員会を置いた事業所に、いるべき人がいたので、そういう対応がとれたように思いますが、これが地震なんかで、被害が分散していたらもっと大変だったと思います。だから、そういう事態をいかに想定して、体制をととのえておくかが、今後の課題だと思っています。



ドーンと音がして電車が横転

～瓦や角材が水平に飛んだ～

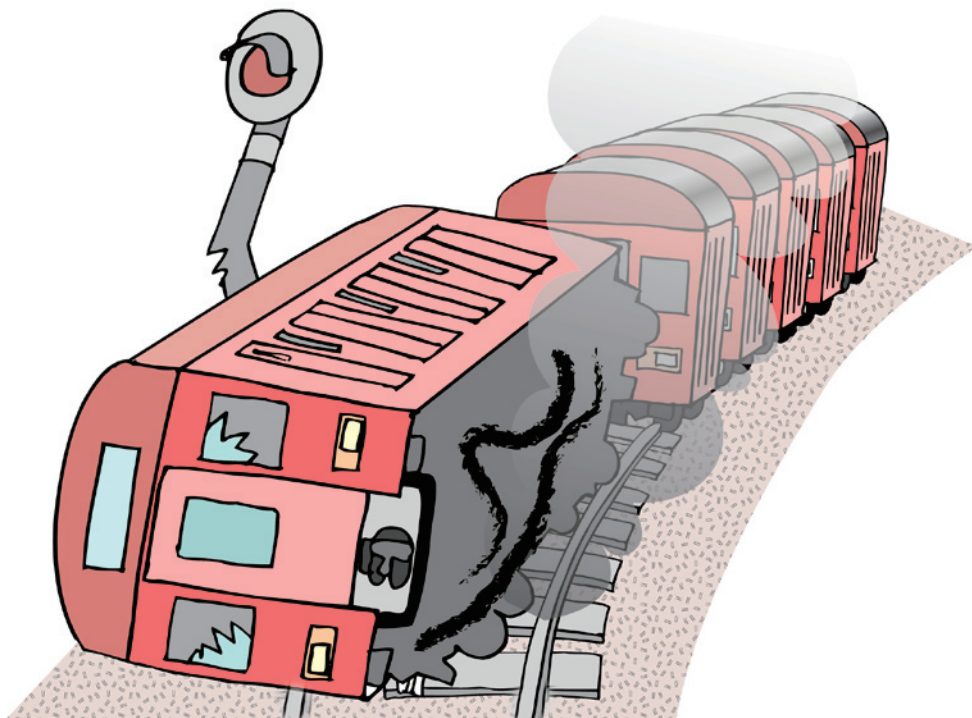
（延岡市 60代 男性）

公民館の窓から外を見ていたら、グワっというものすごい音とともに10センチぐらいの角材が、南から北に向かって、瓦なんかと一緒に水平に飛んで行きました。それに、目の前の公園の植木なども音をたてて折れました。

それは信じられない光景で、アッという間のできごとでしたが、最後にドーンという音がしたので、何だろうと思って、外に飛び出て音のした方に行ってみると、列車が横転していました。

運転手さんの右手から血が流れていたなので、思わずアッと息を飲みました。「大丈夫ですか」と言ったら、さすがプロですね、「はい、乗客のほうも、我々乗務員も大丈夫ですよ」と言われまして、「ああ、助かった。偉いな」と思いました。

赤い車体の電車が脱線して横倒しになっているだけでもすごい絵なのですが、まわりを見渡すと、家の瓦から何からめっちゃめっちゃになっていました。それも竜巻のシワザとあとで分かったのですが、すぐには何が起きたのか分かりませんでした。とにかく、竜巻の力は想像を超えるものでした。



マイカー水没の経験生かす

（名古屋市 60代 男性）

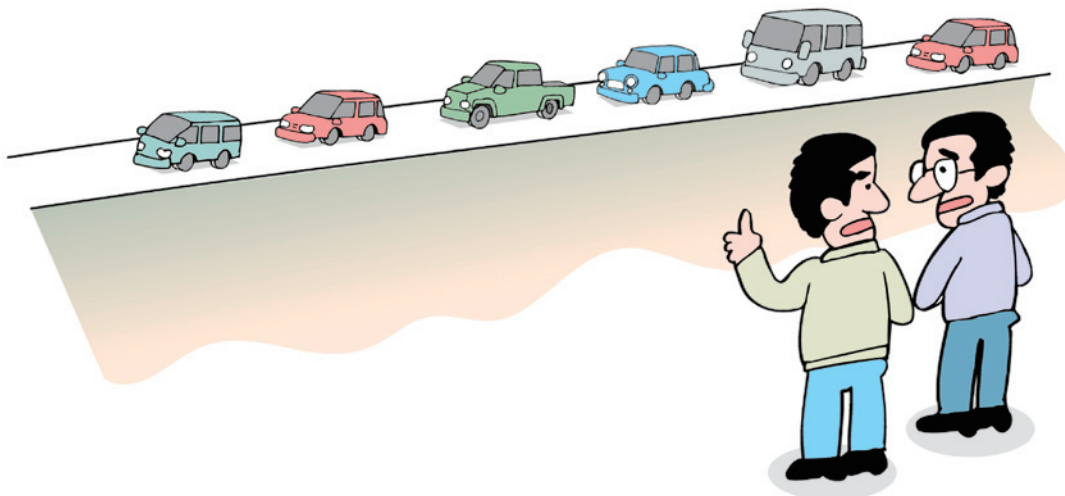
私は実を言うと、8年前の東海水害*のときに買ったばかりの新築の家が床下までつかったという、とんでもない経験があります。

私の家は6軒の建て売り住宅のひとつで、他のみなさんと同じ時期に入居したんですが、いつも雨が強く降り始めると、近くにある高い土手のところにご近所の車がずらっと並ぶんですよ。「何でなんだろう」と、新しく入った仲間同士で話していました。

ところが、当時雨がはげしく降ってきて、タイヤの下あたりまでだった水が、だんだんこう上がってくるわけですよ。どの段階で上の方に移せばいいんだろうって、みんなが迷っているうちに、もう抜き差しならなくなっちゃって、家は床下浸水になり、車も使いものにならなくなっていました。

だから今回は、これだけ雨が降ったら、どれぐらいの水が溜まるとか、いつごろ車を上に上げなきゃならないかがだいたい分かっていたので、大雨に関する情報をテレビやラジオなどで一生懸命集めて対応できました。

*東海水害：台風14号（平成12年）に伴い東海地方を襲った集中豪雨は、愛知県下に甚大な被害をもたらした。



停電でケーブルテレビ映らずワンセグ*で雨量知る

（額田郡幸田町 30代 男性）

その夜は、雷と雨がひどかったので、なかなか寝つけず、とりあえずケーブルテレビを見ていたんですが、近くに雷がおちて停電してしまいました。昔から「雷が光ったら数えろ。3より前にドンときたら近い。」というじゃないですか。その夜は1、2でドンとくるのが多くて、雨も雷も今までにないすごい音でした。

電気は30分ぐらいでついたんですが、ケーブルテレビは次の日の夕方ぐらいまでつきませんでした。あまりにすごい雨だったので気になっていたら、たまたま携帯でテレビが見られるのを思い出して、見てみようということになったんです。今は携帯が便利ですからね。そしたら、この地方で時間100ミリの雨が降ったと聞いていたので、「2000年*に切れた堤防が、また切れるかな」という予感がしました。

翌朝起きたら、やはり未明に堤防が切れていて、あたり一面の田んぼが浸水して湖のようになっていて、「これはすごいことになった」と思いました。

*ワンセグとは、地上デジタル放送で行なわれる携帯電話などの移動体向けの放送のこと。

*2000年とは、平成12年9月10日からの大雨等（2000年9月東海豪雨とも呼ばれる）のこと。



町内にボランティアのサテライト

～地元の問題解決にひと役～

（岡崎市 70代 男性）

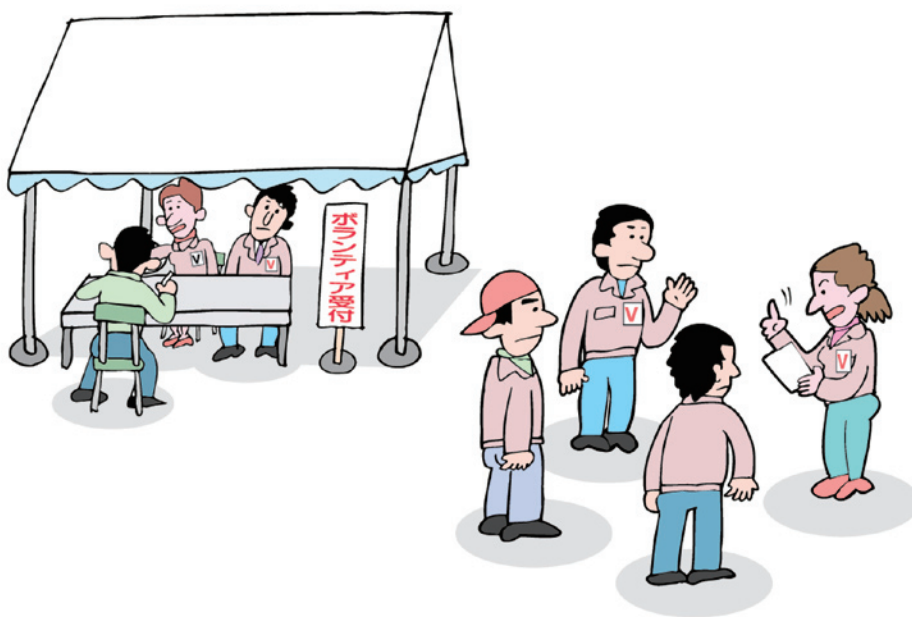
私は総代*をやっているのですが、うちの地区の被害が大きいことを知った社会福祉協議会から、「ボランティアさんが来てくれます。何人要るか、自己申告してください」と連絡がありました。

当時は、地元にはボランティアを受け入れるコーディネーターという人がひとりもいませんでした。私がそれをやる役目とされていたが、とてもそんなことができる状態じゃなかったので、「できません」と言いました。しばらくそれでもめましたが、地区の中にサテライト*を作ってもらえることになって、問題が解決しました。

サテライトがないころは、ボランティアの本部に電話しても通じなかったり、現場のことがよくわかってもらえなかったりで、要領を得ませんでした。だから、サテライトが地域にできて、ものすごく助かりました。私は、今回の水害で一番助けてもらったのは、ボランティアの人たちだと思っています。

*総代とは、町内会の代表者のこと。岡崎市ではこの呼称を用いている。

*サテライトとは、ボランティア活動の調整を行うボランティアセンターの地域事務所のこと。



水田にあふれた水から威圧感

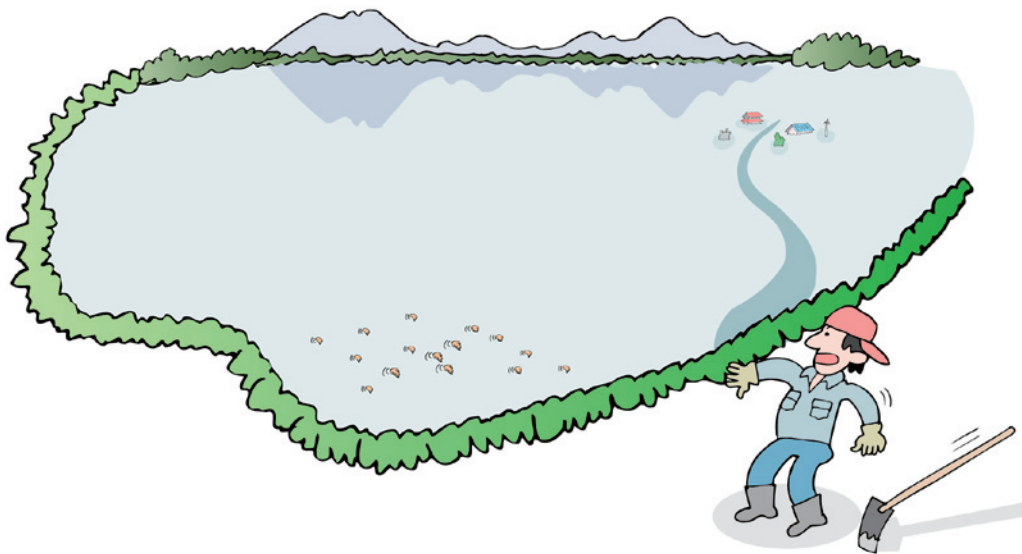
（額田郡幸田町 30代 男性）

朝、6時ごろかな。仲間の農家の方が電話をくれて、「おまえのところはすごいことになっている。テレビで流れていたぞ」というので、坂を下って田んぼを見にいったんです。

その時はもう晴れていて、あたり一面、湖というか沼のようになっているのが見えました。ふだん、田植えの時に水をはると、湖の水面のように見えることはあるんですが、それとは全然違う。水面の位置が高くなっていたので、すごく威圧感がありました。

翌日になって、いったん仮閉めした堤防がふたたび決壊するのを、親父が見ていたんですが、水がこちらに向かってくる感じがしたそうです。あふれた川の水が堤防をのりあげ、堤防がだんだん下がるように見えたので、「堤防がきれたな」と思ったとたん、水位が増して徐々に自分の方に向かってきたとも言っていました。水の勢いが速かったので、さぞ怖かっただろうと思います。

昔、この一帯が池だったとは聞かされていましたが、あそこまで広い範囲に水がついた風景は初めて見ました。でも、水が少し引いてた後、水面に向こうの山が逆さ富士みたいに映ったのは、それはきれいだったですよ。



1時間で開始、公民館の炊き出し

（延岡市 60代 男性）

救急病院に次から次へと患者さんが運ばれてくるのを見て、消防団員に「災害本部を公民館に設けるから、後を頼む」と言って、公民館に引き返し、すぐに災害本部を立ち上げました。

その時には、もう婦人部の部長さんが来ていて、「区長、炊き出しはどうしますか」と言われました。「そんなこと、おれは全然頭になかったわ」と言ってね。「長引くかもしれないから、頼むわ」と言った1時間後ぐらいには、もう炊き出しが始まっていました。

その部長さんが器材や食材はもちろん、人も20名ぐらい集めてくれましてね。いつもながらのお握りを作ってくれたので、さっそく公民館に避難してきた皆さんに食べていただきました。

炊き出しの手際良さも、被害にあわれた方が公民館に避難してきたのも、いつもやっている防災訓練のおかげだったと思います。



みんなで守る地域の高齢者

～民生委員さんと一緒に「見守り隊」～

（延岡市 50代 女性）

被災当時、ひとり暮らしのおとしよりは15人でしたが、現在は、18人に増えています。

私たちの地域もやっぱり高齢化が進んでいるんだなと思いますね。

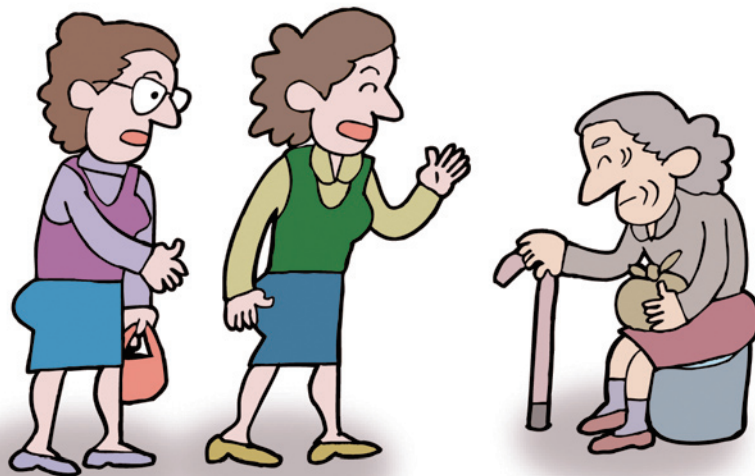
で、「何かのときは、声をかけてください」ということで、近所に住む人が、2～3人1組で「見守り隊」になって、それぞれ決められた高齢者のケアをしています。

おたがいに近所に住んでいますから、何かあったらすぐ駆けつけることもできるし、「近ごろ顔を見ないけど、病気かな」と思えば、すぐにようすを見に行くこともできるんですよ。

あらかじめ分担表ができていますから、みんなの責任感もでてくるし、おとしやりの方も「見守られている」という安心感があると思います。

こういう取組を引っ張る立場として、民生委員*の私もやりがいを感じています。あんまり押しかけて、おとしなりに嫌がられるところもちょっとあつたりするので、そこは気をつけなくちゃと思っています。

*民生委員とは、社会奉仕の精神を持ち、常に住民の立場になって相談に応じるなど、社会福祉の増進に努めることを任務として、市町村の区域に配置されている民間の人です。また、民生委員は児童委員を兼ねています。



すぐ来てくれた市の相談窓口

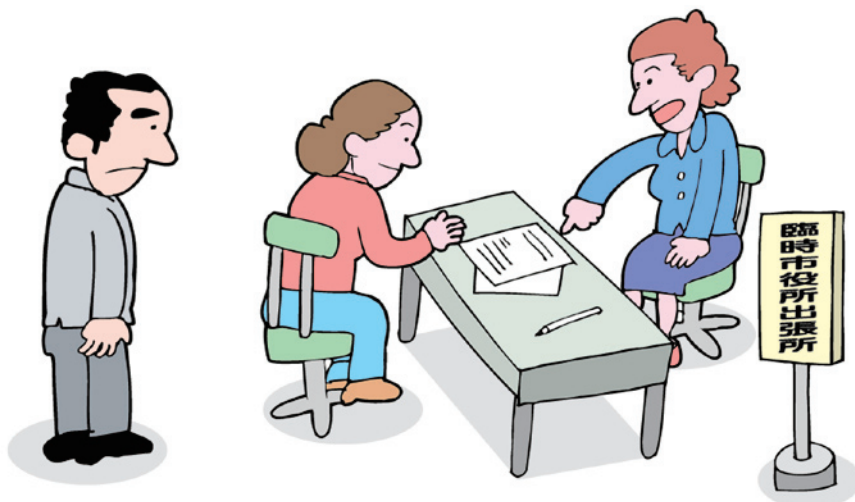
（延岡市 60代 男性）

ひとり暮らしの方が入院されていて、竜巻で家も壊れてしまっているから、その方の罹災証明をとってあげんといかんということで、区長さんとかが代わりにそれをもらいに市役所に行こうとしていたら、「家の修理とかで大変でしょうから」と市役所が出張してきてくれたんです。

当初は、市役所の中の講堂に、各課が集まって対応していたのですが、おとしよりの方なんかはこられないし、きてもずっと待たされる状況になってしまうからということで、7つの地区に分けて出張相談窓口をつくろうということになったようです。

水害の時などにもよくありましたが、市役所に行っても、「これは土木課です」、「これは福祉課です」と次々と回されたりするんですよ。それが、市に防災推進室ができてからは、いろんな面で住民への対応がきめ細かくなってきたなと感じています。

住民の側としても、市役所の人 came 来たからといって、陳情合戦にならないように気をつけたいですね。



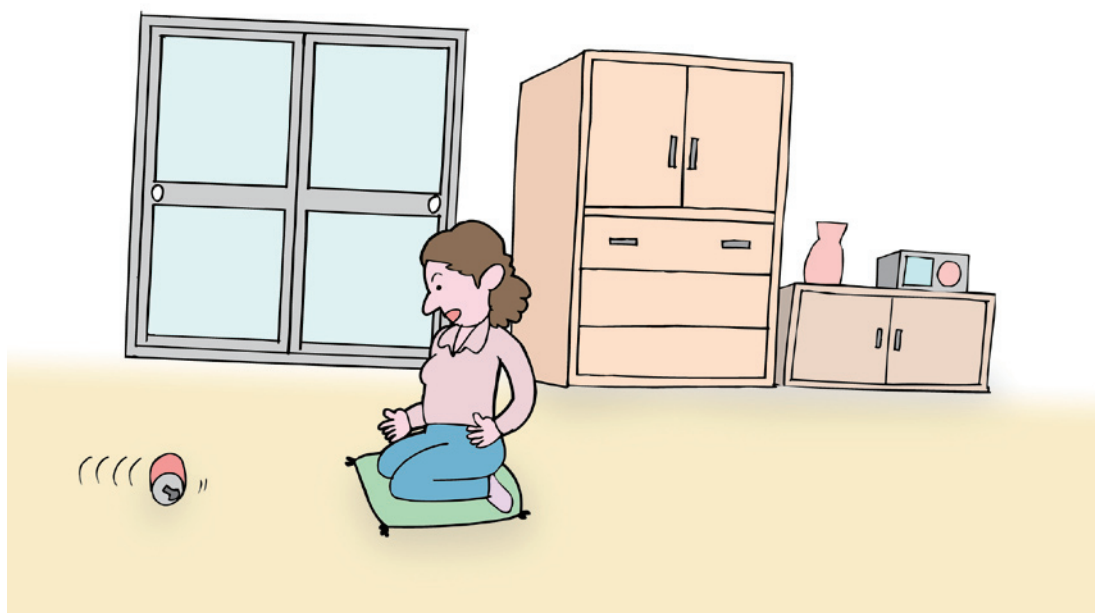
缶が転がる家で1カ月

～避難所行かず、自閉症の子と自宅で過ごす～

(呉市 60代 女性)

うちは何かものが落ちるとか、ガラスが割れるとか、そういうことは一切なかったんです。ただ、崖が崩れて家ごと斜めになっていたの、ジュースの缶は転がっていくし、戸も動かないような状態でした。でも、ライフラインが無事だったので、とりあえずは過ごせました。うちには自閉症の子供がいるので、避難所に避難するとか、そういうのが難しかったものですから、そこでそのまま過ごしました。うちの子供は、地震が起きても、普通どおりにしていたら何てことはないんですよ。

子どものためにも、私たちは、仮の住まいでなく、落ち着いて住める家を探さなきゃと、とにかく必死で探しました。でもなかなか見つからなくて、1カ月ちょっとは、ミシミシいう中を家で過ごしました。雨が降るたびに、「避難してください」と言われてね。怒られたんですけど、その場所にいなきゃしょうがなかったんです。



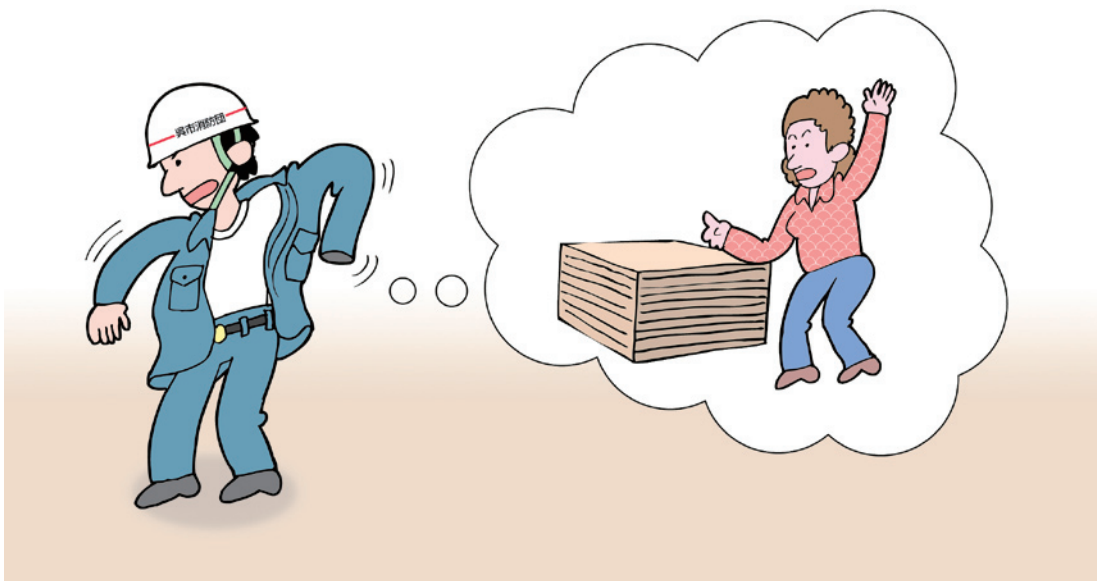
指令待たずに消防団の服着て駆けつけ

(呉市 60代 男性 元消防団員)

土曜日、たまたま市外へ出かけていたのですが、地震が起きたのですぐに呉へ帰って来ました。家の近くへ来るとだんだんひどいことになっていてビックリしました。

女性の自治会長さんから、「ブルーシートを配るの手伝って」と言われたんで、消防局から指令があったわけでも何でもないですが、すぐに消防団の制服を着て手伝いに行っただけです。地元がSOS出しているんだから、助けるのが一番やと思って。まず、自治会長さんが現場を見てOKと判断した人に配っていったんですけど、それ以外の人を取りに来たときには、少しもめましたね。

その後で、ブルーシートを屋根にかけてまわった時には、市からは「危ないからやってくれるな」と言われたけど、「気に入らんやったら消防団の制服を脱いでボランティアでやる」と言って、とにかくやりました。市のいうこともわかるけど、それでは何も進まんからね。



「あんたがやるんよ」

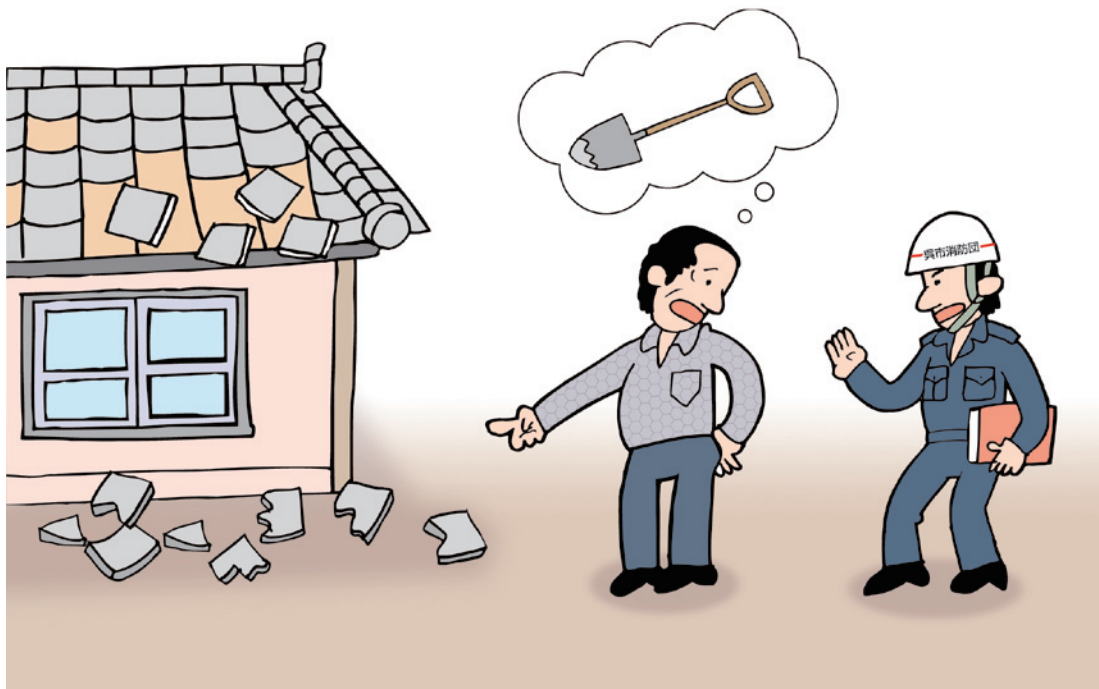
～わざとスコップ持たずに地域の見回り～

(呉市 60代 男性 元消防団員)

地震のあと、地域の見回りをしていると、「うちのガレキは誰が片付けるん」って声をかけられました。「あんたがやるんよ」と言ったら、不満そうな顔をされましたね。

私は、被害はそれほどでもないのに、自分の家の瓦も自分で片付けない人がいるんだと、ちょっと残念に思いました。で、それからはわざとスコップを持たずに歩きました。

被災して人に頼りたい気持ちはわかるけど、どこでも地震が起こる可能性があると言われてるんやから、みんながその気になって用意せないかんと思います。うちの自治会では、自分たちで土のうを作るようにグランドゴルフ場のそばに砂を用意しているし、いちばん山の上の自治会なんかは、防災倉庫を作って、そこにスコップなどの道具をいっぱい揃えています。その会長さんは、「消防はすぐ来やせん。ここまで来るのに20分はかかるだろうから、その間はわしらで何とかせなけん」といつも言っていますが、ほんとうにそのとおりだと思いますね。



軽トラック横転、必死の脱出

～道路が真ん中から「パーン」と割れた～

(栗原市 60代 男性)

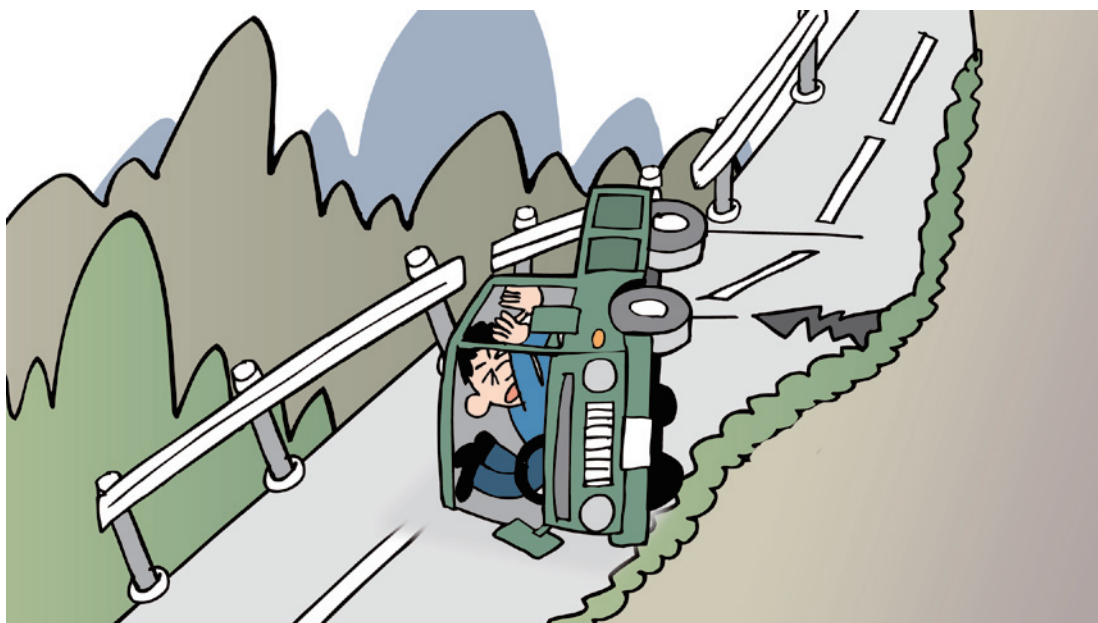
その時私は、今回の地震で大きく崩落した近くの尾根道を軽トラックで走っていました。で、ズンと急に車が持ち上げられたのです。ふだん石とか木の枝とかを踏んだときのような感じがして、「あれ、何もなかったよな」なんて思っているうちに、揺れ始めました。「あ、地震だ！」と、かなり大きな地震だと思って車をとめました。

そうしたら、道路が真ん中からパーンと割れて、その割れ目に車の右側の前輪後輪が入っちゃった。で、もう動けないわけです。

「わあ、何だろう」って、一瞬何だろうでしかないんです。そう思うまもなく道路の側面がドドドンと崩れていって、振り返ると、今通って来たところが、もう赤土の山に変わっていました。

そうしているうちに、今度は2つに割れた道路の片側だけが、ポーンと1メートルぐらい下がっちゃって、乗ったまま、軽トラックがズルズルズルっと横向きに倒れてしまったんです。

「うわ、巻き込まれる」と思って、車のドアをあけて出ようとしたらこれが重いんですね。後から思えば、窓のガラスを下げれば簡単に出来るのに、あわてていたからドアをあけなきゃと必死でした。



思い知った水の有り難さ

～一瞬にして沢の水止まる～

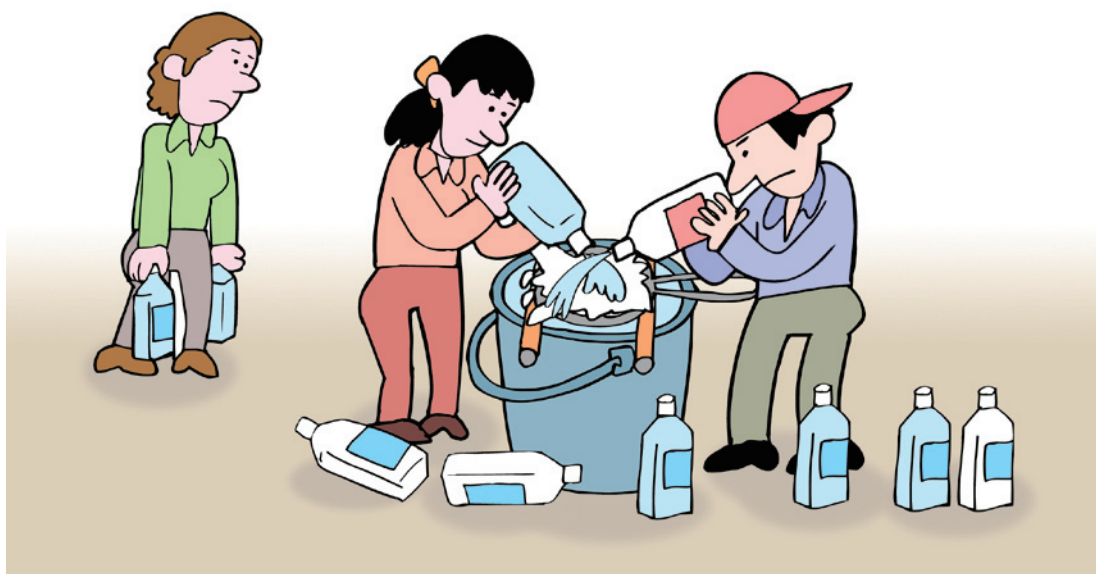
(栗原市 40代 女性)

大きな川もあるし、沢々にはきれいな水が常に流れていますから、水で苦労するなんてだれも考えていませんよ。それが地震発生後、一瞬にして沢の水も止まったのです。あんなに流れていた水がどこに行ったんだろうと思いました。出ていたわき水も濁っていないのは一つもなく、泥んこの水という感じになっていましたね。

当日私たちが避難した集会所も水が出ませんでした。下に降りればいくら水が出るだろうということで、みんなで一番低いところにある家のほうに行って、ペットボトルに水を汲んできては、持ち寄ったバケツに集めるということをやっていました。水は茶色に濁っていたけれど、厚紙をかけてごみが入らないようにして、なるべく上澄みを使おうって。

その茶色の水でご飯を炊いたのですが、汚れた手を洗う水もなく、ラップの上からおにぎりを握って、みんなに出していました。トイレに行っても、だれも手も洗っていなかったと思いますね。水の余裕は全然ありませんでしたから。

体力のない子どもたちは水でおなかをこわして、しばらく病院に通わなければなりません。何と言っても、やっぱり水は大事だと、つくづく思いましたね。



不安から希望へ

～道路工事の進み具合を知り、気持ちも前向きに～

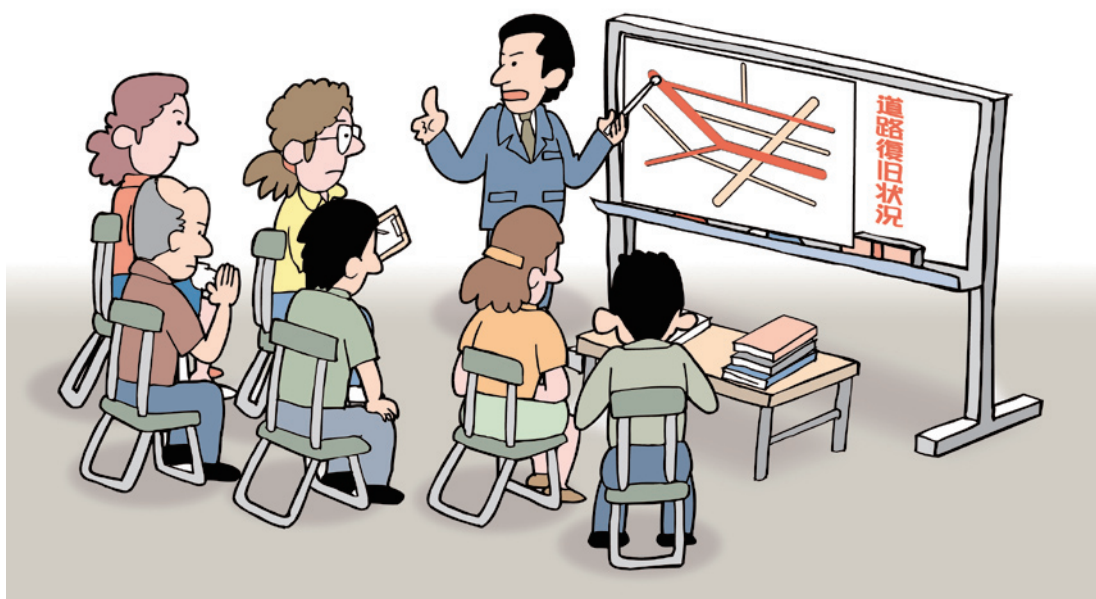
(栗原市 60代 男性)

被災して、自分たちの住むところから外に出されて、集団生活をするわけですが、やっぱりその時には、まず自分たちが先行きどうなるのかなということが心配なのです。その見通しというやつが見えないと不安なんですよね。だから、何を見ても、何を聞いても、何を食べても、うわの空でした。

果たしてもとの生活に戻れるのか、「これからどうするべ」というのがわからんうちが、ほんとうに苦しいんですよ。だから、本音で言えば、やっぱり1カ月ぐらいは、「もうほっといてくれよ」という感じでしたね。

で、避難生活に少しずつなじんでくると、山に戻るための道路をつくってもらえるのかとかが気になり出しました。行政がどのように考えているのか、ひょっとしたら集団移転させられるのかという不安もやっぱりありました。

でも、早い時期に県知事が、「被災地を見捨てはしない。必ず復興させる」というコメントを発表してくれましたし、国とか県の方たちが、大きな図面とかを持ってきて、道路工事の進捗状況を途中途中で開示してくださったので、私たちの気持ちもだんだん前向きになっていきました。



避難するときはまわりに言づけて

～行く先わからず安否確認に手間どる～

(栗原市 60代 男性)

山道で地震に遭って、そのままその地区の避難所に連れていってもらったものだから、私自身「行方不明者」のひとりになっていました。午後4時過ぎにNHKの取材を受け、それが6時の全国ニュースで流れて、「ああ、生きてる!」ということになったわけです。

そんなわけで、集落の皆さんに大変な心配をかけたうえに、区長としてその日絶対にやらなければいけなかった安否確認などもできなくて、「何の役にも立たなかったな」と、今もそういう気持ちでいます。

翌日の午前中になって、ようやく地元の避難所に移動することができ、さっそく皆さんの安否確認を始めました。ひとりずつ全員をチェックしていったのですが、子どもさんが来て連れていったとかいう人たちは、何も言わずに行くものですから、電話番号を調べたり、行き先を確認するのに、すごく時間がかかりました。

とにかく誰もが自分が逃げることしか考えていませんからね。「ドコドコへ行くよ」なんて言づける余裕はないわけです。やっぱり、前もって情報を出し合っておくことが必要だなと思いました。



杉の木につかまり、揺れがおさまるのを待った

～チェーンソーで、道路切り開き～

(栗原市 60代 男性)

その日もふだんと同じように山に入って、午前8時から間伐作業を始めていました。ただ、朝に小雨が降ったのか、露っぼかったので、みんなで足場のいい平坦なところで作業していたんです。

そこが思ったより早く終わって、「じゃあ、車のところで一息ついて上にあがろうか」なんて言いながら、みんなで車のそばに集まってきた途端に、地震が来たのです。

立ってられないほどの激しい揺れでしたので、みんな近くの杉の木につかまって、おさまるのを待っていました。最初は、何と言うのかな、恐怖を感じたというよりは、何が何だかわからなかったというのが正直なところでしたね。目の前に小さな石がコロコロ落ちてくるのを見て、「これは、ただごとではないな」って思いました。

道路まで出ると、地面が割れ、大きな石がゴロゴロしているといった状況でした。で、それらをみんなで力を合わせてどかして、何とか軽トラックが通れるぐらいに道路を開けて戻ってきました。途中、山が崩れたところもありましたが、道をふさいでいる木を切るのに、いつも使っているチェーンソーが大いに役にたちました。



学校に行かれなくても安心

～先生からこまめにメール～

(栗原市 40代 女性)

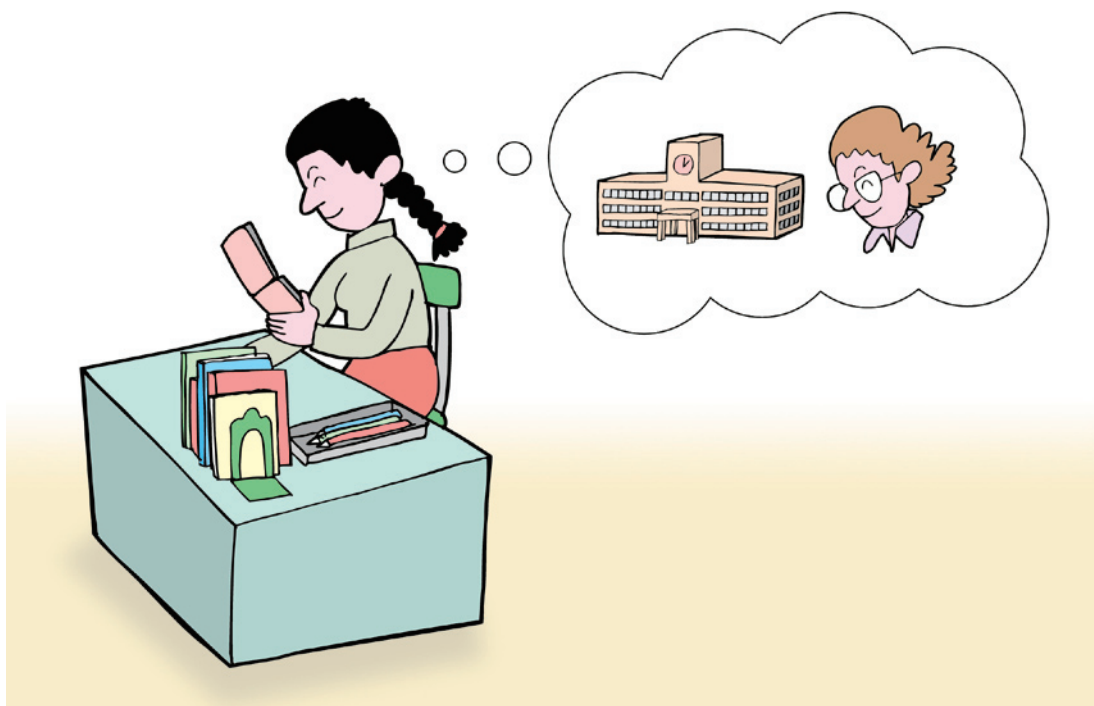
当時、私の娘は高校3年生でしたが、ちょうど模擬試験を受けている最中に地震が起きたのです。でも、ちょうど避難訓練を受けた直後だったこともあり、特に混乱なく避難できたようです。

前の宮城県沖地震*が6月12日だった関係で、この辺の学校はよくその時期に避難訓練をするんですよ。まず全員が校庭に出て、その後、落ちついてから男の子たちが教室に荷物をとりに行ったと聞いています。

親として有り難かったのは、避難した校庭で、先生がみんなの携帯の番号とメールアドレスを控えて、連絡網をつくってくれたことです。その日からしばらく学校は休みになってしまったのですが、「先生たちは、今日、こういう片づけをしたよ」といった便りや、学校からの連絡事項を、担任の先生がこまめにメールで流してくれました。

学校の施設にもかなり被害が出ましたが、「階段がこんなになっちゃったよ」と、先生が撮った写真を送ってくれたりもしました。子どもたちが意外と不安なく過ごすことができたのは、こんなふうに、先生とのコミュニケーションがとれていたからではないかなと思います。

*昭和53年(1978年)6月12日に仙台市を襲ったマグニチュード7.4(震度5)の地震で、死者16人、重軽傷者10,119人、住家の全半壊が4,385戸、部分壊が86,010戸という多大な被害が生じました。



間に合わなかった急傾斜対策

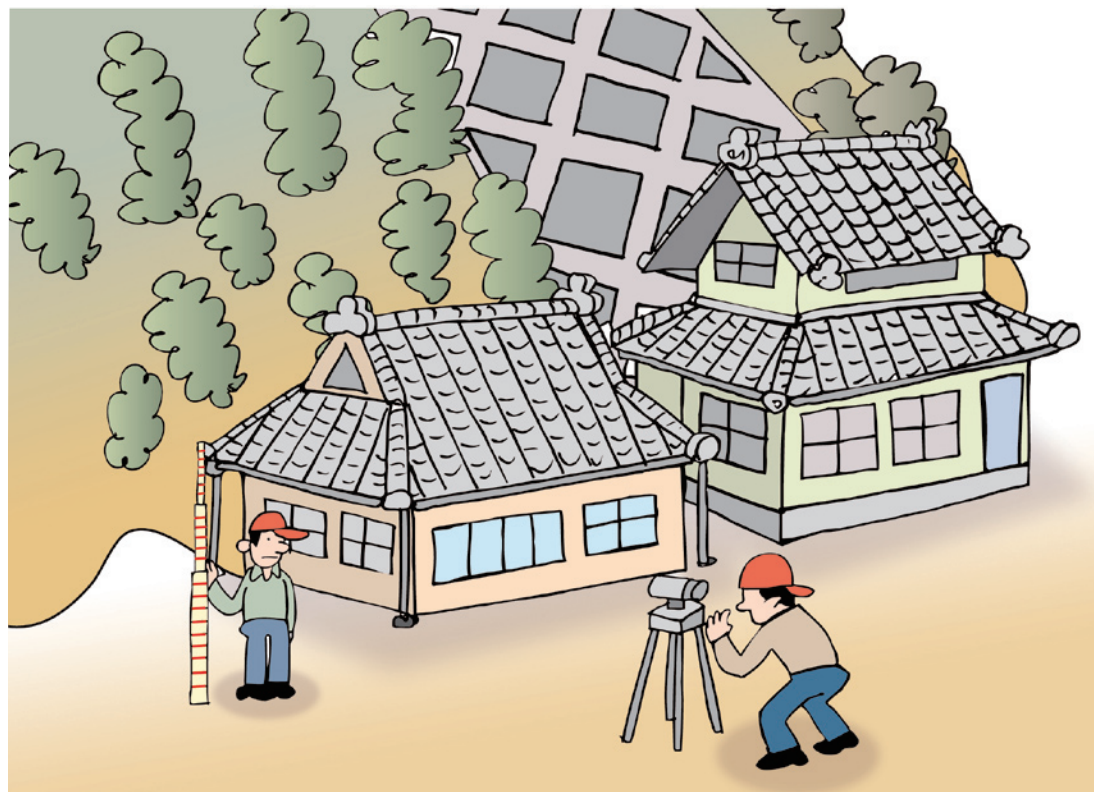
～測量開始が一週間前～

（呉市 70代 女性）

あの日は、山から小石がコロコロ流れ出していたんです。小石が流れ始めると山が崩れるって聞いていたから、心配して隣の家の様子を見に行きました。そしたら、隣の家の裏がすごい滝になっていたんです。私は見た瞬間に、「あ、これ危ないよ、避難せにゃいけんわ」って言ったんですが、家の人に「なあに、大丈夫よ」って言われて、私は怖くて家に戻りました。

帰ってしばらくしたら、ズズズ、ドーンという音がしたんです。土砂崩れが起きるなら、うちの裏か隣の家と、以前からわかっていたので、窓から隣の家を見たら家がないんですよ。3回くらい振り返ってみたんですが、やっぱりない。信じられませんでした。流されていました。

うちの裏は急傾斜対策の工事を済ませていたんですけど、隣の奥さんは、ずっと工事に反対していましたね。山の持ち主の許可もあって、とうとうご主人が印鑑をつけて、ちょうど山が崩れる一週間くらい前から、業者が測量を始めていました。「ああやっぱり工事するんやな」と思って安心していたんですが、間に合わなくて残念でした。



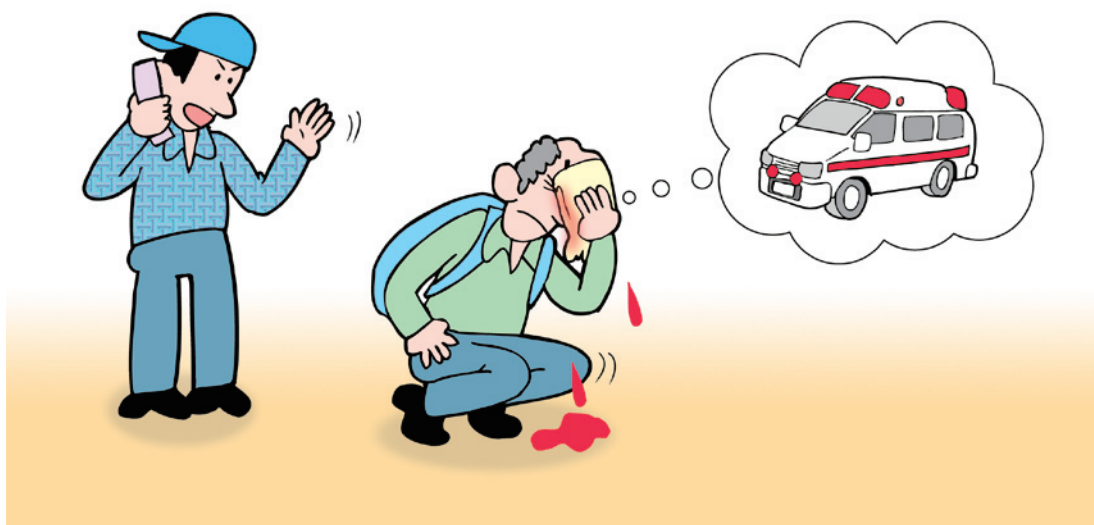
救急車来ず、自力で病院へ

～ 3回目の119番に「行けません」～

(呉市 70代 男性)

災害が起こった日は家内と広島に出かけていて、ものすごい土砂降りの中を家に帰ったところでした。玄関先に着いても、車から降りるのを躊躇するくらいの雨だったので、2、3分車内で待ったんですが、やみそうにないので、決心して家に走り込みました。着替えようと2階に上がってすぐ、雷が炸裂したみたいなドッカーンという大きな音がしたんです。その瞬間、私は家内に、「どうやら山が裂けたみたいやから二人とも生き埋めになるかしらんよ」って声をかけて、体は山の方にむかって身構えたんですが、家に土砂がぶつかった衝撃で整理ダンスの上の方が飛んできて、額を切ってしまいました。

すぐに近くの会社の建物に避難させてもらったんですが、血がとまらないものですから、救急車をよんでもらいました。ところが、20分しても来ない。もう一回電話したら、「行きます」と言うんですが、まだ来ない。しばらくして3回目に電話したら、「行けません」と言われました。あとから聞いた話ですが、あまりにも119番通報が重なり、消防署も動きがとれなかったみたいです。結局、自分で病院を探すことになって、病院を2軒まわってやっと2針縫ってもらいました。



「サラサラサラ」と流れていった隣の家

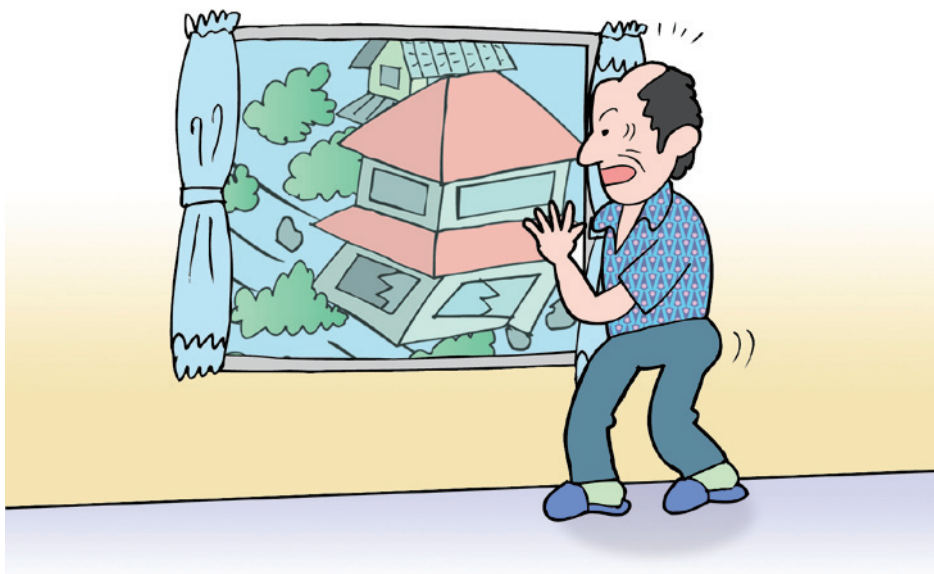
～「99%中に人がおる」の一言でレスキューがすぐ救助～

(呉市 70代 男性)

山が崩れる前に、私は家から道路を見よったんです。道路は川のようになっていて、上から植木鉢やら何やらが流れてきていました。そしたら、「サラサラサラ」と隣の家が流れ始めましてね。裏の山も崩れて来て、流れた家はその土砂に押し出されて、下の家にダンとぶつかったんです。

こりゃ大変だと思って、市役所か消防署かに電話しましたが、どちらかが通じませんでした。でも、たまたま、うちよりもっと上に行こうとしていた消防車が通りかかりましてね。「あの家には誰か住んでいますか？おりますか？」と聞くものですから、「99%おると思う」と答えました。レスキューの方がすぐ救助にかかってくれて、屋根に穴を開けてね、だいぶ時間かかったんですけど、土砂に半身埋まっていた方を救助できました。あのとき、「99%中に人がおる」って言う人がいなかったら、ほっておかれたかもしれないので、助かって良かったなと思います。

今、自治会と民生委員とでやっていますが、一人住まいの方とか体の弱い方がどういう場所におられるのかを書いた地図をつくったり、声かけしたり、というのが、これからは重要だなと思っています。



顔色みながら職員と会話し、アフターケア

（呉市 50代 男性 市役所職員）

平成11年の豪雨のときは、一週間は家に帰れませんでしたよ。一週間ぶりに家に帰って、ご飯食べて、風呂入って、寝ようか思ったときに、電話で呼び出されて、また3日くらい出てという感じでした。睡眠時間は多い時でも1日1時間か2時間くらいでしたね。一日も早く被害状況をとりまとめて国、県に補助の手続きをしなければいけなかったのも、ものすごいプレッシャーで、ご飯が食べれなかったですね。酢の物とかそういうのを流し込むしかなくて。

ある程度職員の数がいれば、「交代で休みなさい」と言えるんですが、担当部署だけでなく、各部から応援を頼んでいるくらいなんで、その辺は一人ひとりの顔色を見ながらやりましたね。特に現場から戻った職員は、市民の方への対応で精神的な疲れが大きいようでした。私が現場に出た時も、市のマークを見て住民の方が10人、20人ワッと取り囲んできましてね。「どうしてくれるんや」と言われて、ただ、その場をおさめるしかありませんでした。それで、外から帰って来た職員には、不安に思うことがないとかか会話をするようにして、アフターケアに気を遣いましたね。



膝までの水にパソコン持って部屋の中をうろうろ

～最後は水の中に「ポイ」～

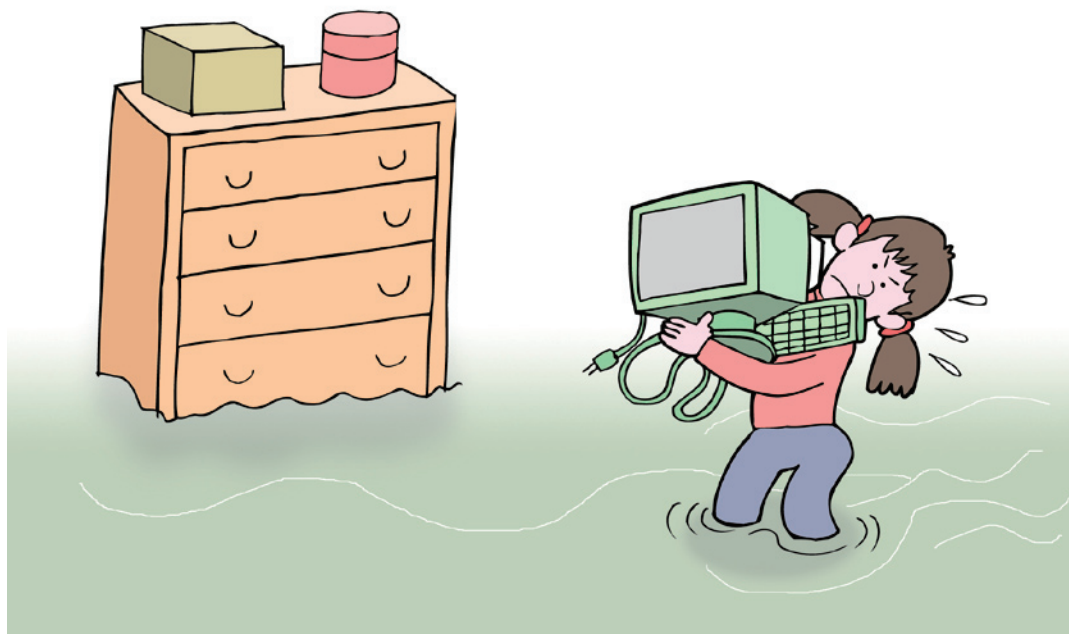
（宇部市 30代 女性）

当時、父がお店をやっていた関係で、旧道沿いに住んでいました。旧道のすぐそばに側溝があって、それまでも大雨が降るとしょっちゅう水があふれたりしていたのですが、家まで水が来ることはありませんでした。

あの朝はものすごい勢いで雨が降っていたので、「もしかしたら浸水するかもよ」なんて言っていたんですけど、あっという間に、水がどんどん押し寄せて来て、和室の畳がグラグラと浮いてきたんです。すぐに家の中は洪水みたいになって、2階がないから少しでも高いところに行こうと家族みんな必死でした。実際、私の目の高さくらいまで、高潮の水が来たんです。

ヒザぐらいの高さまで水が来たとき、パソコンを買って間がなかったので、「パソコンをちょっと避難させよう」とか言って、両手で抱えて逃げようとしたんです。でも、「そんな重たいものを持っている場合じゃないでしょ、捨てなさい!」と、親に言われましてね。

しばらくはパソコンを胸の高さまで持ち上げていたけれど、あきらめて手を離しました。水の中にポイと。すごく悲しかったです。



水は「ズンズンズン」と押し寄せた

（宇部市 60代 女性）

朝いつものとおり起きて、台風で風も雨もあったけれど、ウイークデーでしたから、主人も私も車で出勤するつもりでした。カーテンのすき間から外をのぞいた夫が、「車で行けるんじゃないか」と言いよるわけです。

ご飯を食べててしたくをしている時に、主人が「あれ、道路に水が来ているで」って言うんです。「じゃあ、今日は休んだらいい」とか、まだそんなことを言っていたんです。

うちの土地は高いほうで、それが川に向かって低くなり、川は港、海につながっています。だから、うちの家の前を道路が冠水しているということは、てっきり降った雨が川へ向かって流れているのだと思ったのです。

これが大間違いで、水は逆さまに流れて、あれよ、あれよと言う間に、どんどん水位が上がってきました。それが『高潮』だったわけです。

普通、波というのは寄せては返すわけですが、引かないんですね。ズン、ズン、ズンズンズンと水がこちらに向かってくるんです。「車を移動したほうがいいね」って、夫が長靴をはいて外に出て行ったんですが、見ると、もう夫の胸のあたりまで水が来ていました。車をあきらめるといよりも、命の危険を感じて、私は「はやく家に戻って！」と叫んでいました。



台風通過の全国ニュース、地元の状況分からず

～避難勧告の空振り「最高」～

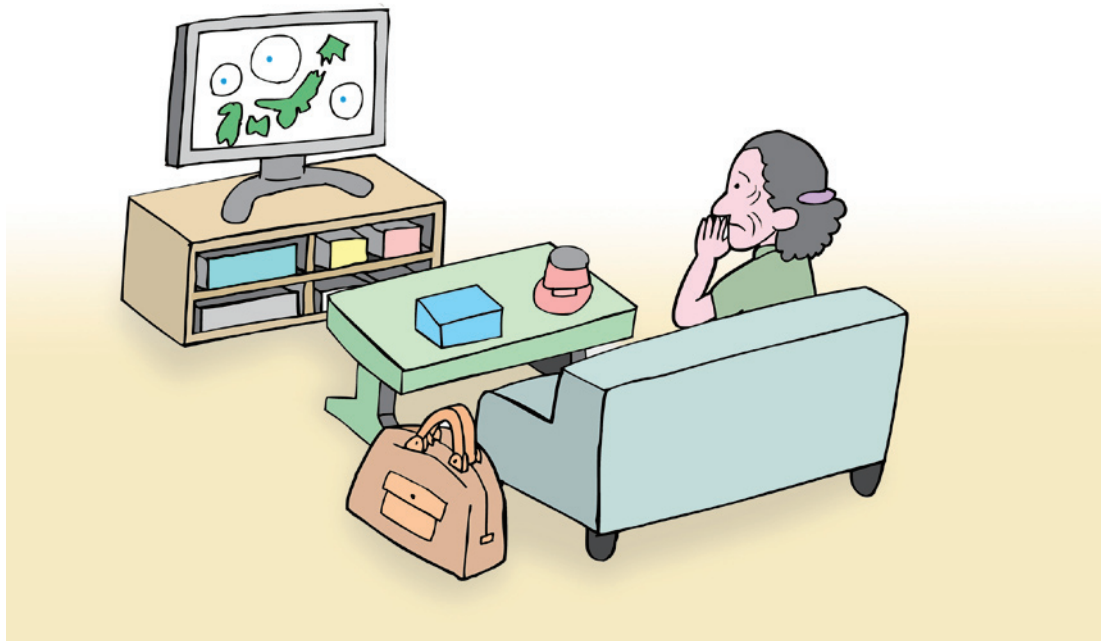
（宇部市 60代 女性）

もちろんテレビは朝からつけっぱなしにしていたのですが、ニュースじゃ台風が通過しているということだけでね。自分の意識がなかったのかもしれないけど、当時、避難勧告とかはなかったような気がするんです。

10年も前ですから、今と違って、ニュースで言っているよりも台風が先に来ることもあったし、気象情報でも放送局がある山口の天気は言っても、宇部の情報はなかったように思います。

だけど、あの時、台風がどういう経路で動くかというのは知っていたわけだし、自分の住んでいる地域を通るというのは少なくとも知っていたわけだから、自分が悪いということは間違いないんですよ。まさしくど真ん中を通ると知っていて、避難しなかったのだから。

今は違いますよ。「情報は待っていたらだめ。自分で積極的に取りに行く」というのと、周りが何と言おうと避難勧告が出たら家にはいないということです。もう、水が押し寄せてきたら、避難なんてできないんですよ。だから避難勧告には絶対に応じないといけないと思います。避難勧告が空振りに終わればラッキー。「空振りばんざい、最高」です。



2度目の経験 記録に残そうと写真撮る

（宇部市 60代 男性）

私は2回ほど台風災害に遭っているんですよ。1回目は昭和17年、小学2年の時でした。この時は、父も母もどこに行ったか、家族全員バラバラになりました。自分は知らない人に山の手の方に連れて行ってもらい、3日ぐらいその人の家でお世話になりました。その後、家に連れてきてもらって、ようやく姉弟たちと再会できたという非常に悲しい経験を持っています。

それから約50年後、その時の災害のことなんか、すっかり忘れていました。「ああ、台風が来る、すごいな」とか言うて、家の中から庭を見ておりましたら、瞬間に水が胸まで来たわけです。家内が「助けてくれ」と言ったって、どうすることもできない。最悪の場合、屋根に上がるかという話をしておりましたら、水が引き始めたんです。

「よし、この際写真を撮ってやろう」と思って、胸までつかってこの写真を撮りました。写真に写っているのは、流されてきた車です。「この中に人がいるんです。助けてください」と言ったって、どうにもならなかったんです。

水害のときに一番悲しいのは、助けてあげたくても、自分も浸かっているから助けてあげられないということ。だから、自分は一生懸命逃げる。それしかないと思うんです。



まちの電気屋さんが家電製品を無料修理

～直後にご近所から部屋借りる～

（宇部市 30代 女性）

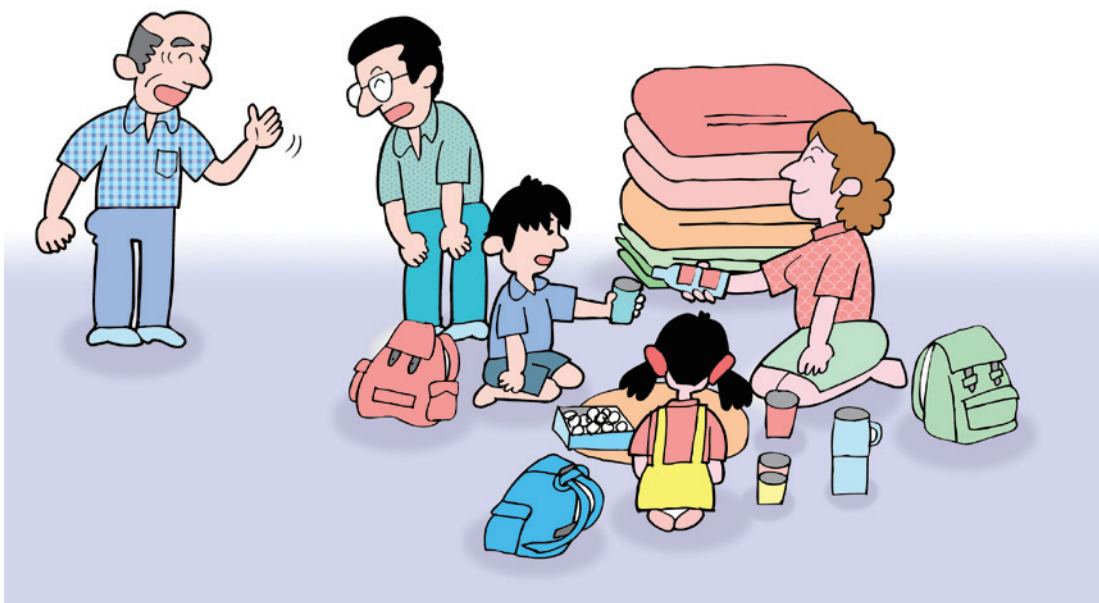
家の中の水が引くまでは外にも出られないんですよ。外からいろいろなものが流れてきて危険な状態なので、台所のテーブルの上に椅子を上げ、足の不自由な父にはそこに座ってもらって、とにかく水が引くの待ちました。

1時間が2時間か、よく覚えてないんですけど、水は引き切ってはないけれど、「これだったら歩いて出られるね」というところで、近所の方が助けに来てくださったんです。下町で近所つき合いというのをふだんからしている地域なので、みんなが心配して来てくれるんですね。

「家の中も水浸しだし、家電製品も使えないんだから、しばらく泊っていいよ」って、部屋を貸してくださってね。そこのお宅も停電で電気が通じなかったんですが、ふだんからきちんと備えをされている方なので、レトルト食品とかを用意されていたんです。それで犬と一家4人、しばらくやっかいになりました。

普段からまちの電気屋さんとつきあいがあったので、何も言わないでも「分解して洗ったら使える」と言って、持って帰ってタダで修理してくれました。普段からつきあいをしていた良かったです。

ほんとうにあのときほど、ご近所の好意をありがたく感じたことはありませんでしたね。



特定の避難所より2階や親戚

～自主防災会で計画～

（宇部市 60代 男性）

私は民生委員をしていますが、情報を出してくれと言っても、「嫌ですよ」というのが結構あるんです。「じゃ、あなたは死んでもいいんですか」と言ったら、「いいです」と言う人がおられるんですよ、事実。

行政は指定の避難場所に避難してくださいと言うんですが、65才以上のいわゆる災害弱者と言われる方がひとりでそこまで行くのは無理なんです。だから、その人の状況によって、避難場所は親戚でも、自宅の2階でも、指定の避難場所でもいいと思うんですよ。「ここで死んでもええ」と言う人も、極端に言やあ強制的に避難させにゃいかん。これも我々自主防災会の大きな使命だと思います。

地域住民が消防団と一緒に地域のお年よりを援助する仕組みを作成中ですが、何と言っても日ごろからのコミュニケーションが大切ですね。



高潮きっかけに自主防災会

～やっぱり日ごろのおつき合い～

(宇部市 60代 男性)

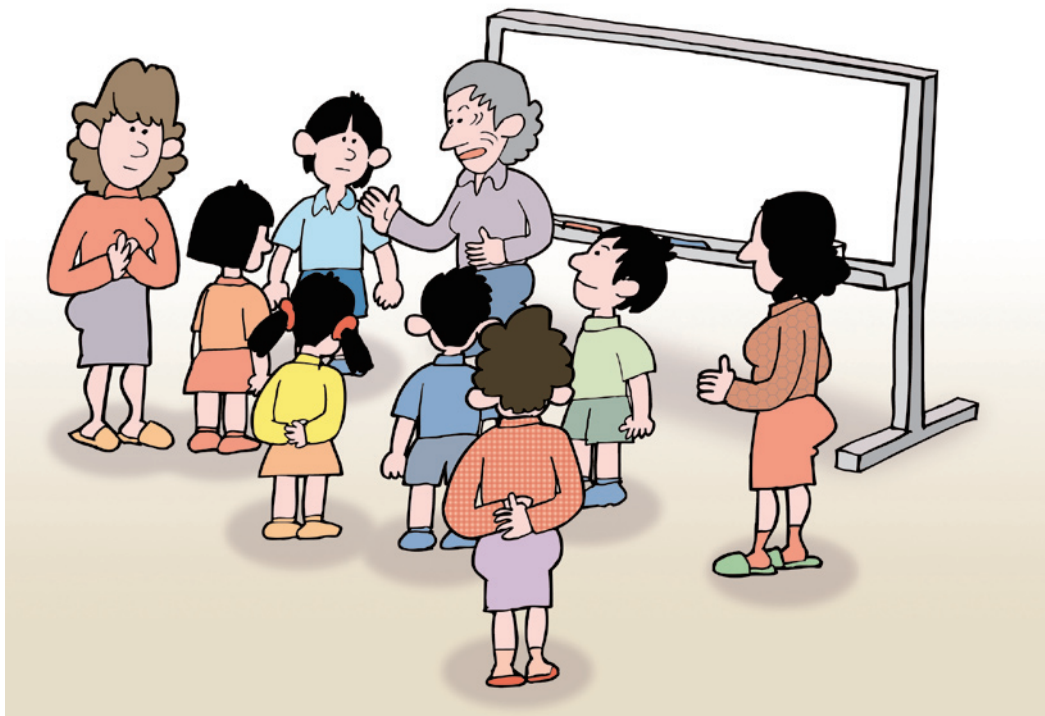
私はあの台風18号を契機に地域の自主防災会を立ち上げました。毎年8月30日に訓練をやっていますが、この自主防災会をみんながもっと理解できるような、きめの細かい方法をとっていくと同時に、日ごろから良い人間関係をつくっておくことが大事なんじゃないかなと思っています。

高齢者になればなるほど、ボランティアといえども家の中に一步も入れんときが多いんですよ。人間にはいろいろ好き嫌いがありましてね。それを解決するのはやっぱり自治会長。各班にいる班長をうまく活用して、気軽に物の言えるような環境を日ごろからつくっておけば、ある程度うまくいくんじゃないかなと思います。

近頃は、向こう三軒両隣のほうが仲が悪いこともあるんですよ。隣に聞いたら「知らん」、ずっと向こうの人が知っちゃったとかいう話でね。だから、となり近所のつき合い方が、昔のような状態に戻らんと、やっぱり自助・共助・公助というのは難しいと思いますね。

今、婦人会では、3世代の交流の場を作って、子どもたちもみんなひっくるめて、お年よりから戦前の台風の話とかを聞かせてもらって、一緒に学びあうということもしています。

災害時に助け合うには、いわゆる『日ごろのつき合い』。これに尽きると思いますよ。



30センチの水が急に胸まで

～普段は気付かない道路の凸凹～

（宇部市 50代 男性 記者）

当時、うち（新聞社）にも情報はなかなか入ってきませんでした。そこで、こちらから情報を取りに行こうということで、長靴をはいて、市役所との間を何度か往復しました。市役所に続く通りは、すでに30センチか40センチぐらい水に浸かっていたと思います。

泥水ですから下の方はまるきり見えないんですよ。「ここら辺が道路だったかな」という感じで歩いて行ったら、急にドカッと、胸のあたりまで水に浸かってしまったのです。ほんとうにあの時はびっくりしましたね。今思えば、市役所の手前が車道になっていますが、ちょうど一段下がったそのあたりだったと思います。

日ごろ、そんなに道路の凹凸とかを気にしていませんよね。浸水して足もとが見えない時は、「ここら辺はまっすぐだったな」とか、記憶だけを頼りに歩いていくわけで、それがちょっと外れると、えらいことになるんだということを実感しました。

大雨の時に歩いて避難して、道路わきのミゾに落ちて大変なことになったなんていうニュースを耳にするたびに、あの時のことを思い出します。



近くの大災害もニュースで知る

（防府市 50代 男性）

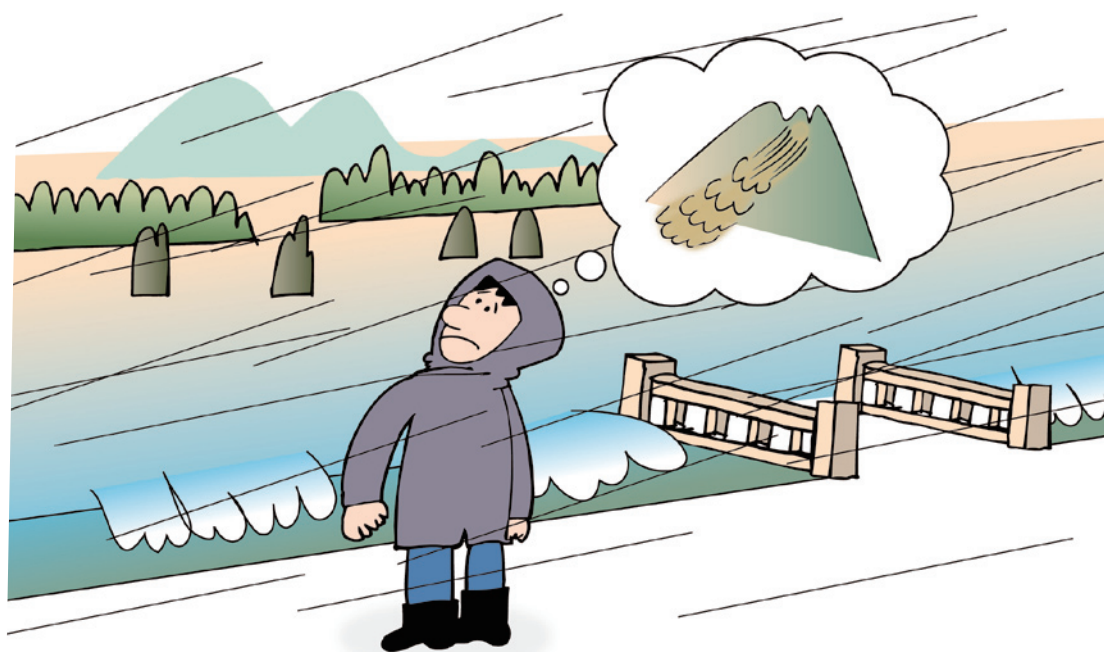
あの日は『海の日』の翌日。朝の8時半ごろから雨がどんどん降ってきてね。これは少し異常だなと思いました。で、車であちこち見て回りました。川には濁流が流れていて、とにかく雨の降り方が尋常じゃないわけです。もう、確実に異常でした。

家へ戻ると、近所の人から「谷が崩れ始めたので、何とかしてくれ」という電話があり、すぐに消防団に連絡をして、軽トラックに土のうを積んできてもらうことになりました。私に道まで出て案内せよという依頼だったので、そのお宅まで誘導しました。

で、土のうを積んで、家のまわりの小さな溝から水が浸入するのを何とか防ぐことができたのですが、軽トラが作業を終えて渡ったとたんに橋がドーンと落ちたんです。ほんのちょっとの時間差でした。

そのうち、はじめは透き通っていた神社わきの溪流も赤み泥に変わり、最後は真っ黒な水となりました。それを見て、「どこかが崩れたな」と直感しましたね。

午後の3時頃だったか、上空をヘリが飛びかうようになって、「何が起こったのだろう」と。でも、すぐ上の老人ホームが大変なことになっているなんて、夕方にテレビをつけるまで知りませんでした。



たな田がナイアガラの滝のよう

（防府市 60代 男性）

私らは田んぼをつくっておりますが、毎年8月には土のうを積んで川の水をせきとめて、それでやっと取水するぐらい、この辺は雨がそう多くない地域なのです。

その日は、ちょうど新しい橋もかかり、うちの家のところまで、路盤の整備が終わったということで、県の工事検査が入る予定でした。

朝の8時半ごろ、雨が降っていたので、「ちゃんと水が流れているかな」と橋を見に行ったんです。その頃は、まだ橋まで50センチ以上余裕があって、「まあまあ、大丈夫だな」と思いながら家に帰りました。

それから10時過ぎたころだったでしょうかね。雨がどんどん降るので、「えらく降るな」とつぶやきながら、ひょっと外を見ると、段々畑になっている田んぼがナイアガラの滝みたいに、水と泥がどんどん流れ落ちていました。

そのうち、まわりの道路も水浸しになって、家の敷地内にも水と泥がどんどん入りはじめました。で、「これはどうにもならんな」と、県の土木のほうに電話をしたのです。



まるで地獄の使者のよう

～木、岩、砂が家に「バリバリッ」～

（防府市 50代 男性）

地獄の使者のテーマソングのような、地面からゴーっとわき上がってくるような音がしました。その音が上の方からだんだんこちらに近づいてくるような感じがして、両ひざ立ちで窓の外を見ると、30メートルぐらい先に土石流が迫っていました。横倒しになった木と無数の岩、それに大量の砂がどんどん押し寄せてきたのです。

「うわ、家を直撃だ！」と、思わず後ずさりしたとたん、何かがドーンと家に当たり、バリバリッという音がして、すぐに腰まで水に浸かってしまいました。

割れた窓ガラスが勢いよく水と一緒に僕の体のほうへ攻めてきたので、足が切れて、水が血で真っ赤に染まりました。

逃げるためにはどうしたらいいかなと考え、「あっ、そうか、靴を履けばいいんだ」ということでね。裏返しになってスーっと流れてきた片方の靴をはき、倒れたソファやイスなんかの上を歩いて行くと、もう片方の靴が浮いていました。水をかいてたぐり寄せ、それを履いて、一番近い出口から逃げようと思ったけど、サッシが曲がって開かないんです。

で、土石が入ってきた玄関のほうから脱出したのですが、玄関の前は4、5メートル掘られて川のようになり、ゴーゴーと水が音をたてて流れていました。結局、建てて間もない我が家に、再び帰ることはできなくなったのです。



準備万端でクールに受け止め

～ニュースにならないとメディア引き上げ～

(壮瞥町 70代 男性)

うちの地域は、昭和52年の噴火を教訓に、避難所は住民が自主的に運営して、行政職員は現場に戻ってもらうという主義でやっていたから、避難所の収容人員も少な目にしてプライバシー確保の衝立も用意し、避難したその日から町営の温泉に入れたほど、準備万端でした。

ただ、その避難所から噴火そのものは見えませんでしたから、放っておくと、「もう火の海ですよ」とか、「あの辺一带、全滅ですよ」とか、いかにもそれらしい話ばかりが入ってくるわけです。ですから、できるだけ現場の情報を得てはもって帰って正しい情報を伝えるとともに、毎晩食事の後に、自衛隊が空撮したビデオをみなさんに見てもらいました。すると、自分の目で確かめることができ、「わあ、自分の家は安全だ」と、すごく落ち着くんですよ。危険の及ばない距離から現場を見せると納得するんですね。

私は、地域で積み重ねてきたことがどう機能するか点検している気分でしたし、災害にかみつく人が誰もいない。報道陣にマイクを向けられて「大変ですか」と聞かれても、「自然現象だからしょうがない」とかいうコメントしか出ないので、記事にならないと避難所からも引き上げてしまいました。極めてクールな雰囲気でしたね。



安全な時期に学ぶ山と共生の大切さ

～火山防災への地域の積み上げ～

(壮瞥町 50代 男性)

前回の噴火を経て昭和新山*50年の実行委員会のできた共通認識は、私たちの住む街は観光地で、明るい陽の部分もあれば、陰の噴火もあるということでした。それはもうほんとに背中合わせです。奇しくも昭和52年は、火祭りの日でお客さん呼んでにぎやかにという時に噴火になっちゃった。100%逆転しちゃう感じ。それは非常に辛いことなんだけど、あとの30年ぐらいは、ちゃんとすべての恩恵を受けられるわけですね。

そういうことは、やっぱり歴史と経験で培っていくもので、噴火のメカニズムや、地域の特性というものを、安静期といいますか、平穏な時期に、子供も含めて学ぶ機会を持つことって必要なんだろうなと思います。

子供郷土史講座なんかで子どもたちを集めて、一緒に昭和新山に登ったり、大学の先生などの話を聞いたりというのも、重要なことですよね。そういうことが定期的に行われているということが、この町の地域力というものなのではないかなという気がします。

*昭和新山とは、昭和18年に畑がいきなり隆起し、いまでは標高407mまで隆起した活火山です。



避難所内の取材規制で被災者の心を守る

～子どもたちの居場所作りにも苦心～

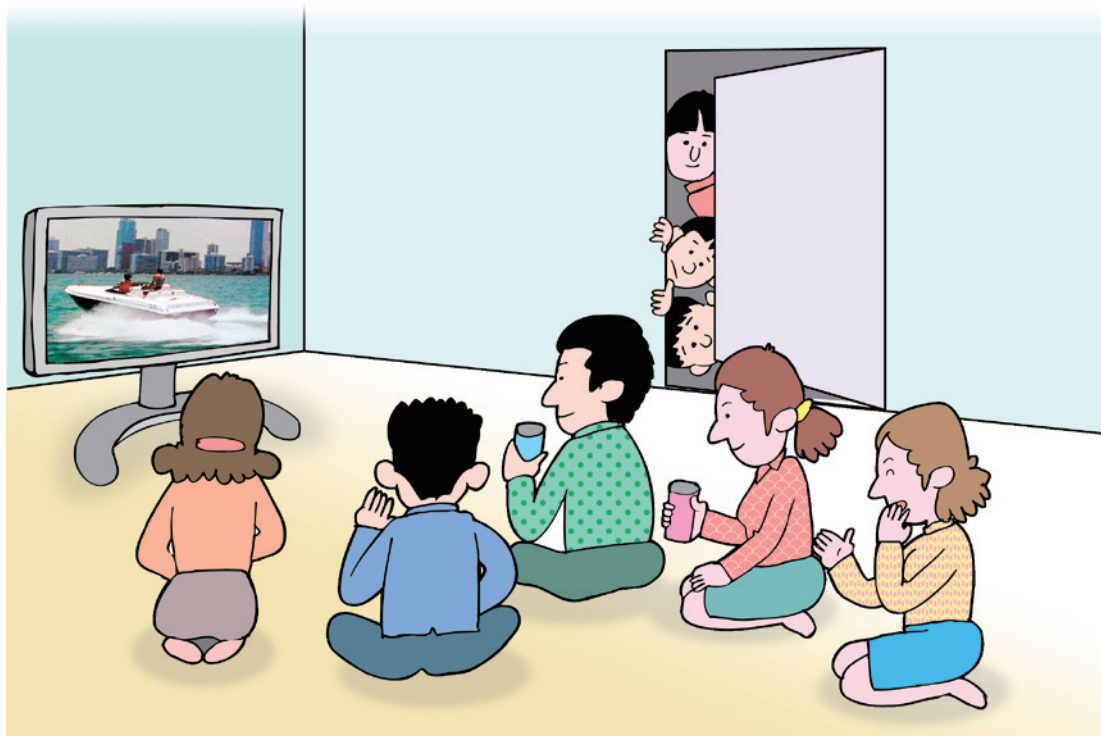
(壮瞥町 60代 男性)

昭和52年の噴火の時は、大人たちはもう慌てふためいちゃって、避難所の中は小学生から高校生、喫煙者までごちゃまぜで、子どもの居場所というものがあったりなかったりです。アニメを見たくとも、大人がテレビを占領しちゃって、子どもは完全に放置状態で、たばこを覚える子も出るありさまでした。

そういうことがあったので、今回の噴火では、避難所の中に子ども専用のテレビを置いたスペースを作るなど、子どもたちの居場所を確保しました。それから、先生方がしょっちゅう避難所に顔を出して、「元気か」と声をかけてくれるようにしました。

マスコミには、こちらからふんだんに情報は出すけれども、決められた時間や枠内でのみ情報収集をするということ、避難所の室内には一切立ち入らないということを守ってもらいました。だから、以前の噴火の時のように、避難所の部屋の中に入り込んで、午前5時から、疲れ切って寝ているところにいきなりライトを当てて写真を撮るといったようなことはなくなりました。

やっぱり、避難所の運営には、人に対するこまやかな気配りが必要なんだと思います。



噴火前から避難所新聞

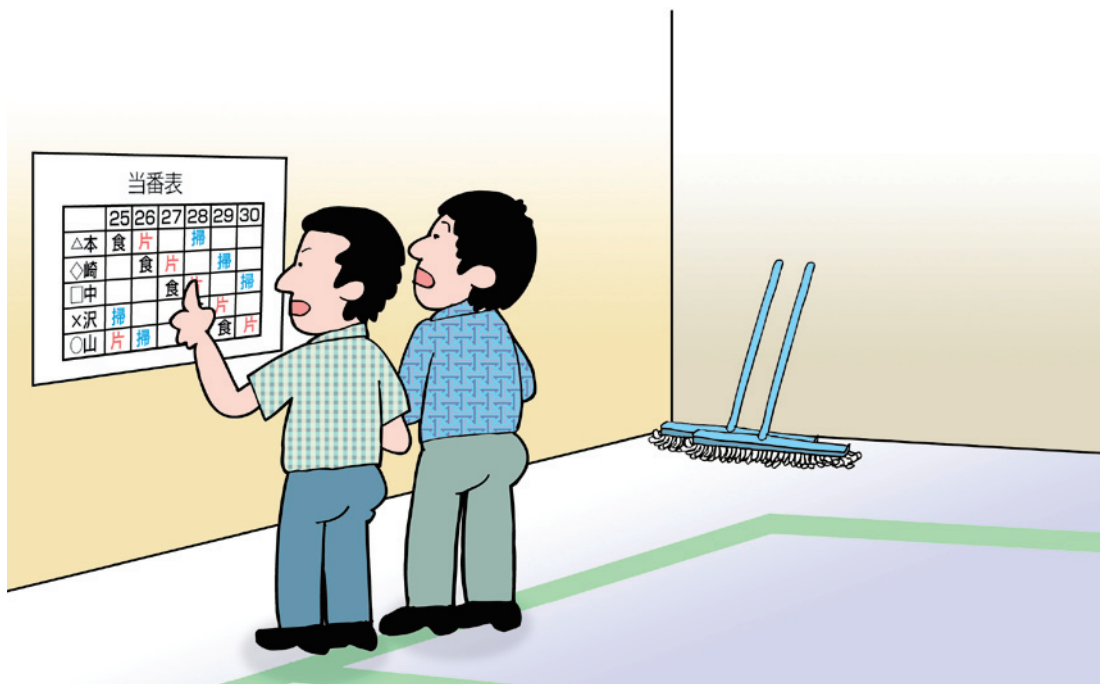
～生活の約束事など知らせる～

(壮警町 60代 男性)

避難所に入ったら、いつ出られるかわかりませんからね。生活のリズムがどうしても単調になってしまうので、何時までに起きて、何時までに清掃して、食事をして、後片づけをする、というように、タイムスケジュールをきちんと作りました。また、それを同じ人がやるのではなくて、毎日、順番に変わってやりましょと、当番表も作りました。

そうして、こういったことを皆さんに周知するために、広報紙「2000年有珠山」を発行したのです。広報誌には、避難所の皆さんがお互いを知らなければならぬということで、「この班にはだれだれさんがいますよ」と班ごとに名前を入れて、何人構成ですよということを理解してもらおう方策をとりました。

もう、個人情報も何もありませんよね。避難所にどういう人たちが生活しているのか互いに知っておくことのほうが大切だと思ったからです。



避難中も空き事務所で商売続ける

～一旦離れたお客は二度と戻ってこない～

(洞爺湖町 70代 女性)

うちの商品は乾物と冷凍食品です。冷凍庫が必要なのですが、一時電気がとまりましたでしょう。だからかなりの損失が出ました。それに、6月に元の場所に戻るまで手つかず状態でしたから、商品は賞味期限切れとなり、全部廃棄処分しました。

自分たちは、昭和52年の噴火の時に、商売を始めたばかりで半年もしないうちに家を壊されて、何も営業ができなくて、ほんとうに長く苦しい時間を過ごしてきた経験がありますから、事業だけは絶対続けなきゃという信念で、すぐに商売を再開しました。

「もうあそこはだめだから、同じものだったら他から購入しよう」というところが出てきますからね。一旦そうになったら、二度とお客は戻ってきません。だから、冷蔵庫がない分、物をいっぱい集めて、注文をとったら配達して、帰ってきたらすぐまた次のところに走るということで、主人と息子は、積み上げた荷物の中に畳1枚敷いて、そこで寝泊まりをしていました。

避難している間に、事務所や倉庫を提供してくれた方々にはほんとうに感謝しています。それがなかったら、営業は続けられませんでしたからね。



3、4年探してやっと見つけた次の自治会長

（呉市 70代 男性）

災害の後で、私が会長をやめる時にね。次に会長になる人がおらんのですよ。3、4年ずっと、「この人は？この人は？」って言って回ったんだけど、誰もおらん。こら、死ぬまでやらないけんかな、と思ひよったんです。でも、老人会に入ってきたこの人をようやっと見つけてね。

最初は「わしは老人じゃない、老人会なんか入りとうない」って言っていた人が、ご近所のつきあいが大切やからって入ってくれたんですよ。それで、私が自治会長も老人会の会計もやっているのを見て、大変そうだと気付いてくれましてね。私もだんだん目が見えんようになるから「誰か代わってくれんか」と言ったら、「わしがやろう」って言ってくれたんです。やっぱり探してみないと見つからないものですね。

次の人もその次の人も立派な人でね、今でもいろいろと相談しながらやっています。三人おれば文殊の知恵じゃないがね、いろんな意見が出てね。今のところ幸せです。



災害時にも必要だった女性の視点

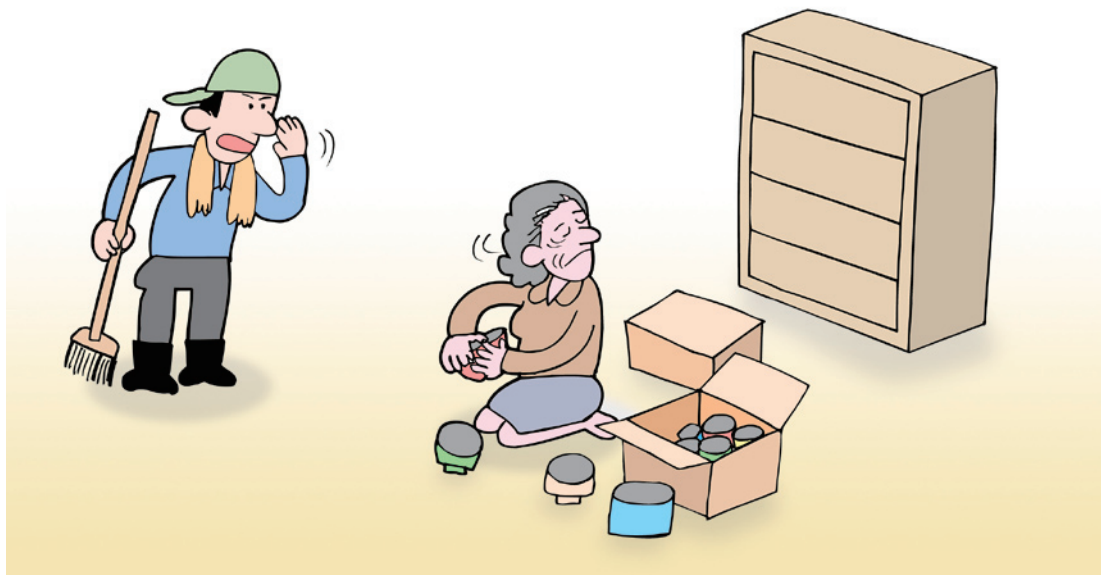
（宇部市 60代 女性）

被害にあったおばあちゃんのところに、ボランティアの方にやっと来てもらったんです。でも、そのおばあちゃんは、結局見てもらいたくないものがあるのか、「女性のボランティアの人に来てほしい」と、こう言われたんです。

で、市のほうに行ったら、女性のボランティアの人は今はおらんと言う。仕方がないので、市の福祉課に電話して、「ばあちゃんが困っているけん、相談相手になってくれんかね」とお願いしました。

やっぱり女性の視点が要るというのは、今どこでも教えられていますよね。部屋の押し入れを片づけてもらう時にも、女性の物や何かがあるから男性では困る。だからと言って、女性の力ではモノを運びきれないという矛盾がありました。

また、災害で避難した女性が着替えをする場所を確保するとか、女性への配慮が必要だということもこれから啓発して欲しいと思っています。



避難者対応に栄養士さんが大活躍

～コンビニ弁当のメニューも考案～

(豊浦町 50代 男性 役場職員)

うちは、町の人口と同じぐらいの4000人の避難者を受け入れました。初めの3日間は学校給食センターとか、道の駅の厨房施設でつくったりしていたんですけど、やはり長期間の対応は無理なんです。

それで、民生課の女性部隊が栄養士さんと相談して、まとめてコンビニ弁当を注文しようという話になったわけです。町内にコンビニはなかったのですが、お願いしたら運んでくれたんですね。でも1週間以上たつと、やっぱり「野菜が食いたい」とか、「緑黄色野菜を」とか、「たまにはつゆ物が食べたい」とか、そういうことが希望として出てくるんですよね。

そこからがうちの栄養士さんたちの頭のいいところと言ったら変だけど、カロリーのバランスを考え、野菜などを取り入れたいろいろなメニューを作って、町の方からコンビニへ注文書を出すようになりました。

最終的に避難所を閉じたのは6月10日。「これ、栄養士学会でも発表したら」なんて言ったほど、栄養士さんたちはよくやってくれたと思います。



一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？

NPO 法人 東京いのちのポータルサイト 副理事長 鍵屋 一
防災リスクマネジメント Web 編集長 中川 和之
東京 YWCA 副会長 池上 三喜子

一日前プロジェクトの物語をお読みいただいて、いかがでしたでしょうか。皆さんも、難しく考えずに一日前プロジェクトを実施してみませんか？

自然災害に遭遇して体験したことや感じたことなどを語り継ぐことは、災害体験者や被災者の重要な使命であると言えるでしょう。なぜなら、多くの市民は被災経験や災害体験を持たないため、災害に事前に備えることの大切さを頭で理解はしていても、実際に自分が被災したらどうなるかをイメージできず、何も対策を講じていないからです。

災害体験や経験を話したい、語り継ぎたい、語り継がなければならないと思っている方々も、実は大勢いらっしゃると思います。その方法が見つからず、語り継ぐこと・発信することがなかなかできないまま、貴重な体験が風化してしまうことが多々ありますが、ここでご紹介する一日前プロジェクトの手法を用いれば、比較的気楽に「語り継ぎ」を実現できます。

一日前プロジェクトでは、被災された方々のさまざまな「思い」や「本音」を物語にして、災害体験・被災体験を持たない人たちに、災害が身近で、恐ろしいものであることに気づいてもらうことを本来の目的としていますが、被災経験者が自分と同様の思いを抱いた人がいることを知り、災害で受けた心の傷を癒すことができたといった話も報告されています。私たちも、物語作りの担い手をもっと増やす手法を考えていきます。

一日前プロジェクトで作られた物語は、研修やワークショップなどの際に、災害のイメージを膨らますために、導入部として使うこともできます。文字だけでなく、添えられている気の利いたイラストも一緒に使うとより効果的でしょう。テレビニュースの企画で、過去の被災者インタビューの代わりに一日前プロジェクトの物語が使われたこともありますし、ホームページでエピソードを紹介している自治体もあります。

一日前プロジェクトの進め方や活用方法のポイントを以下にまとめましたので、参考にしてください。

※詳しくは、内閣府のホームページ <http://www.bousai.go.jp/km/imp/index.html> をご参照ください。

□物語を集める

一日前プロジェクトの素材となる物語を集める時のポイントは次のとおりです。

1. 「物語」を拾い出す

(1) 話を聞く

同じ被災体験のある人同士に2-4人集まっていたいただいて、2時間程度話を聞きます。何らかの共通性がある方々のほうが、互いに思い出して再発見しながら話が進みますので、その過程も丁寧に聞き取りましょう。聞き手は複数で行い、質問して詳しく引き出すより、話が弾むように仕向け、疑問点は最後に確認すれば良いでしょう。最近の出来事だけでなく、時間がたった災害についても振り返って取り上げることもできます。

(2) 物語を見つけ出す

話を聞き終わったら、聞き手同士で手元のメモを確認しながら、災害を体験していない人にも共感を得られる物語になりそうな話を見つけ出します。1回の聞き取りで10話以上の物語ができることもあります。キーワードなどから、仮の見出しを考えておくといいでしょう。ただ、減災や防災行動としてふさわしくない話に気をつけましょう。

(3) 見出しをつけて編集する

テープ起しなどの記録ができあがったら、上記(2)で拾い出した物語の種を、できるだけ語り口を残して編集します。一つの物語ごとに300字から500字程度にまとめると読みやすいでしょう。一つの話から複数の物語に展開することはよくありますので、単純に元の話の切り分けるのではなく、重なっても単独の物語で流れが分かるようにします。

新聞や週刊誌、広告の見出しのように、内容を一言で言い表して興味を持ってもらえるような見出しを考えながら物語をまとめると、いいでしょう。内容を全部説明するような見出しではなく、「どんな話だろう？」と読んでもらえるきっかけになるように工夫しましょう。この見出し付けが、一日前プロジェクトの核とも言えます。

2. 物語を拾い出す場を作る

この4年間、一日前プロジェクトのコンセプトを生み出した『災害被害を軽減する国民運動に関する専門調査会』の専門委員を中心に、各地で物語を探す聞き取りをしました。今後も、いろんな立場の人が、身近に感じられるような物語を拾い出すために、聞き取りの場をさらに増やすことが必要です。そのために、聞き取りの担い手を増やすことを考えていきます。

災害列島である日本では、不幸なことに毎年のように災害が発生します。その体験は、同じように見えても、一人一人にとっては厳しい経験です。その過程で辛い思いをした被災した人々の声を、一日前プロジェクトとして継続的に後世に伝えていくために、物語を聞き取る場を作り続けていきたいと思います。

一日前プロジェクト みんなでやってみよう！

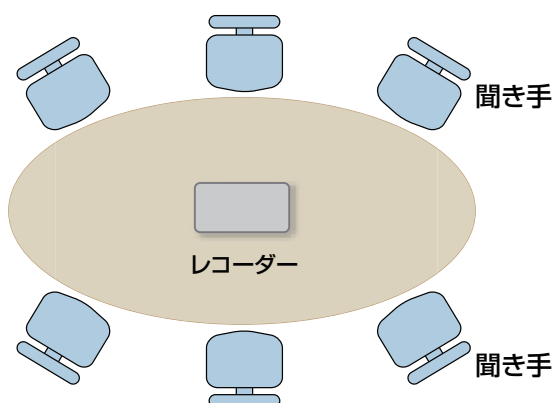
—簡単な手順を紹介します—

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ

その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらおう ※話し手は、2人～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする
※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集
※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

■発行 内閣府(防災担当)

〒100-8969 東京都千代田区霞が関1-2-2(中央合同庁舎第5号館)
TEL.03-3503-9394 <http://www.bousai.go.jp>